

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（23）

東九州自動車道建設（志布志 I C ～鹿屋串良 J C T 間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

み か え り い せ き
見 帰 遺 跡

（志布志市志布志町）

2019 年 2 月

鹿 児 島 県 教 育 委 員 会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 セ ン タ ー



序 文

この報告書は、東九州自動車道（志布志 I C～鹿屋串良 J C T間）の建設に伴って、平成 28 年度に実施した志布志市志布志町に所在する見帰遺跡の発掘調査の記録です。

見帰遺跡からは、旧石器時代、縄文時代早期・中期・後期の遺構や遺物が発見されました。これらの遺構や遺物は、遺跡の周辺や大隅半島における当時の人々の生活を解明する手がかりとなることが期待されます。

本報告書が、県民の皆さまをはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する正しい理解と認識を深めていただき、文化財保護の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘から報告書刊行までの一連の作業にあたり、ご協力いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、志布志市教育委員会等の各関係機関、並びに調査においてご指導いただいた先生方や発掘作業・整理作業に従事された方々に対し、厚く御礼申し上げます。

平成 31 年 2 月

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長 前迫 亮一

報告書抄録

ふりがな	みかえりいせき							
書名	見帰遺跡							
副書名	東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	23							
編集者名	西園勝彦 大坪啓子							
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒 899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号 T E L 0995-70-0574 F A X 0995-70-0576							
発行年月	2019 年 2 月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
みかえりいせき 見帰遺跡	かごしまけん 鹿児島県 しぶし 志布志市 しぶしちよう 志布志町 しぶし 志布志	46221	221-513	31° 29′ 26″	130° 5′ 6″	2016. 05. 09 ～ 2016. 09. 09	2,705	東九州自動車道建設 (志布志ＩＣ～鹿屋 串良ＪＣＴ間) に 伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
見帰遺跡	散布地	ナイフ形石器文化期				ナイフ形石器, 磨石, 叩石		
		細石刃文化期				細石刃, 使用痕剥片, 磨石, 叩石, 台石		
		縄文時代早期				石坂式土器, 下剥峯式土器, 押型 文土器, 石鏃, 磨石, 叩石		
		縄文時代中期		土坑 5 基		石鏃		
		縄文時代後期				納曽式土器, 辛川式土器, 西平式 土器, 丸尾式土器, 円盤状土製品, 磨石, 叩石, 石錘		
		その他の時代		溝状遺構 4 条		溝状遺構 1 納曽式土器, 辛川式土器, 西平 式土器, 市来式土器, 丸尾式土 器, 磨石, 叩石, 石錘 溝状遺構 2 中岳Ⅱ式土器, 薩摩焼, 染付, 磨石, 叩石, 石錘, 打製石斧 溝状遺構 3 薩摩焼, 染付, 金床石 土師器, 燈明皿, 薩摩焼		
遺跡の概要	見帰遺跡は、旧石器時代から近世までの複合遺跡である。 旧石器時代の発掘調査では、ナイフ形石器文化期・細石刃文化期の2つの文化期の遺物が出土した。 縄文時代早期では、遺構はなかったが数型式の土器に伴う石鏃・磨石・叩石などの石器が出土した。 縄文時代中期では、池田降下軽石の上位から落とし穴と考えられる土坑5基を検出した。 縄文時代後期では、遺構はなかったが複数の型式の土器とともに磨石・叩石・石錘などが出土した。 中でも、貝殻で文様を施し、赤色顔料を塗布した台付皿形土器は、1破片の出土ではあるが、台付皿形土器の中では出土例が少ないものである。 時期の特定ができなかったが、溝状遺構4条を検出した。これらは、隣接する鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査中の調査区でも検出している。							



遺跡位置図 (1 : 50, 000)

例 言

- 1 本書は東九州自動車道建設（志布志 I C～鹿屋串良 J C T間）に伴う見帰遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は鹿児島県志布志市志布志町志布志に所在する。
- 3 発掘調査事業は平成 28 年度に国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）が受託した。
県教委は発掘調査事業のうち東九州自動車道から県道への取付部分の本発掘調査と整理・報告書作成作業を公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）に委託した。また、高規格道路と高規格道路から県道への取付部分の本発掘調査と整理・報告書作成作業を鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」という。）に依頼して調査を実施した。
- (1) 東九州自動車道から県道への取付部分の本発掘調査は、県教委の監理のもと埋文調査センターが株式会社イビソク鹿児島営業所（以下「(株)イビソク」と支援業務委託を契約し、平成 28 年度に実施した。
- (2) 東九州自動車道から県道への取付部分の整理・報告書作成作業は、県教委の監理のもと平成 28 年度・平成 30 年度に埋文調査センターが実施・刊行した。
- (3) 高規格道路と高規格道路から県道への取付部分の本発掘調査は、県埋文センターが平成 25 年度と平成 30 年度に実施し、次年度以降整理・報告書作成作業を実施予定である。
- 4 掲載遺構及び遺物には通し番号を付し、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 5 遺物注記等で用いた遺跡記号は「ミカ」である。
- 6 挿図の縮尺は挿図ごとに示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は海拔絶対高である。
- 8 本書で使用した方位は全て磁北である。

- 9 本発掘調査における実測図作成、出土状況図作成及び遺構位置図等の作成は、(株)イビソクが行った。
- 10 本発掘調査における写真撮影は西園が行い、空中写真の撮影は(株)イビソクがふじた航空写真に委託し行った。
- 11 本書に係る遺構位置図及び遺物出土状況図等の作成は、西園・大坪が作業員の協力を得て行った。
- 12 本書に係る出土遺物の実測・トレースは、西園勝彦・大坪啓子が作業員の協力を得て行った。また、出土石器の一部について株式会社九州文化財研究所に業務委託して実測・トレースを行った。
- 13 本書で使用した色調については、『新版標準土色帳』（1967、農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。
- 14 本書に係る出土遺物の撮影は、県埋文センターの写場にて西園が埋文調査センター吉岡康弘の協力を得て行った。
- 15 本書に係る自然科学分析の赤色顔料の分析は、県埋文センター中村幸一郎氏に依頼し行った。
- 16 本書の執筆は、次のように分担した。

第 I 章	西園
第 II 章	大坪
第 III 章	西園
第 IV 章 第 1 節～第 5 節	西園
第 6 節	大坪
第 V 章	中村幸一郎(県埋文センター)
第 VI 章	西園・大坪
図版	西園・大坪
- 17 本書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は、県埋文センターで保管し、展示・活用を図ることとしている。

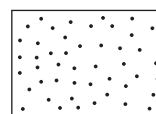
凡 例

- 1 本書に掲載してある遺構位置図・遺物出土状況図等の 1 グリッド（1 マス）は 10 m 四方であり、各図には縮尺を記した。
- 2 本書掲載の遺構・遺物の縮尺は、基本的に以下のとおりである。ただし、遺構・遺物の大きさによってはこの限りでない。挿図中に示した縮尺を参照されたい。

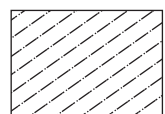
土坑：1／20 溝状遺構：1／80，1／100
土器：1／2 石器：1／3

- 3 石器実測図の自然面等の表記は、下記の通りである。

自然面



節理面



本文目次

序文		第2節 縄文時代草創期の調査	24
報告書抄録		第3節 縄文時代早期の調査	25
遺跡位置図		1 遺構	25
例言・凡例		2 遺物	25
目次		第4節 縄文時代中期の調査	29
		1 遺構	29
		2 遺物	30
第Ⅰ章 調査の経過	1	第5節 縄文時代後期の調査	33
第1節 調査に至るまでの経緯	1	1 遺構	33
第2節 事前調査	1	2 遺物	33
第3節 本調査	1	第6節 その他の時代の調査	40
第4節 整理報告書作成作業	2	1 遺構	40
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	3	2 遺物	50
第1節 地理的環境	3	第Ⅴ章 自然科学分析	51
第2節 歴史的環境	3	第Ⅵ章 総括	52
第3節 志布志 I C～鹿屋串良 J C T間の遺跡	8	第1節 旧石器時代	52
第Ⅲ章 調査の方法	13	第2節 縄文時代早期	52
第1節 調査の方法	13	第3節 縄文時代中期	52
第2節 層序	13	第4節 縄文時代後期	52
第Ⅳ章 発掘調査の成果	20	第5節 本遺跡出土石器の特徴について	56
第1節 旧石器時代の調査	20	第6節 科学分析	57
1 遺構	20	第7節 溝状遺構	58
2 遺物（石器）	20		

挿図目次

第1図 周辺遺跡位置図	6	第11図 旧石器時代出土石器(2)	22
第2図 東九州自動車道関連遺跡位置図	12	第12図 旧石器時代出土石器(3)	23
第3図 周辺地形・本調査範囲及び遺跡の残存範囲図	14	第13図 縄文時代草創期出土石器	24
第4図 グリッド配置図	15	第14図 縄文時代早期遺物出土状況	25
第5図 土層断面図作成位置図	16	第15図 縄文時代早期出土土器	26
第6図 土層断面(1)	17	第16図 縄文時代早期出土石器(1)	27
第7図 土層断面(2)	18	第17図 縄文時代早期出土石器(2)	28
第8図 土層断面(3)	19	第18図 縄文時代中期出土石器	30
第9図 旧石器時代出土石器(1)	20	第19図 土坑1～5号位置図	30
第10図 旧石器時代遺物出土状況	21	第20図 土坑1号	31

第21図	土坑 2 ～ 5 号	32	第31図	溝状遺構 1 号出土土器 (3)	44
第22図	縄文時代後期遺物出土状況	33	第32図	溝状遺構 1 号出土石器	45
第23図	縄文時代後期出土土器 (1)	34	第33図	溝状遺構 2 号及び溝状遺構 2 号出土遺物	47
第24図	縄文時代後期出土土器 (2)	35	第34図	溝状遺構 2 号出土石器	48
第25図	縄文時代後期出土土器 (3)	36	第35図	溝状遺構 3 号及び溝状遺構 3 号出土遺物・ 溝状遺構 4 号	49
第26図	縄文時代後期出土土器 (4)・円盤状土製品	37	第36図	その他の出土遺物	50
第27図	縄文時代後期出土石器	38	第37図	縄文時代後期土器 (1)	53
第28図	溝状遺構配置図及び 溝状遺構 1 ～ 4 号遺物出土状況	40	第38図	第Ⅶ類文様帯模式図	53
第29図	溝状遺構 1 号及び溝状遺構 1 号出土土器 (1)	42	第39図	縄文時代後期土器 (2)	54
第30図	溝状遺構 1 号出土土器 (2)	43	第40図	溝状遺構位置図	58

表目次

表 1	周辺遺跡一覧	7	表 9	縄文時代後期石器観察表	39
表 2	志布志 I C ～ 鹿屋串良 J C T 間の遺跡	8	表10	溝状遺構 1 号土器観察表	46
表 3	見帰遺跡基本層序	16	表11	溝状遺構 1 号石器観察表	46
表 4	旧石器時代・縄文時代草創期石器観察表	24	表12	溝状遺構 2 号土器・陶磁器観察表	48
表 5	縄文時代早期土器観察表	29	表13	溝状遺構 2 号石器観察表	48
表 6	縄文時代早期石器観察表	29	表14	溝状遺構 3 号土器・陶磁器観察表	50
表 7	縄文時代中期石器観察表	31	表15	溝状遺構 3 号石器観察表	50
表 8	縄文時代後期土器観察表	39	表16	その他の時代の土器・陶器観察表	50

図版目次

図版 1	遺跡遠景	図版 9	旧石器時代の遺物 (ナイフ形石器文化期)
図版 2	標準土層	図版10	旧石器時代の遺物 (細石刃文化期)
図版 3	旧石器時代の調査	図版11	縄文時代早期の遺物
図版 4	縄文時代中期の調査 1	図版12	縄文時代後期の土器 1
図版 5	縄文時代中期の調査 2	図版13	縄文時代後期の土器 2 (台付皿形土器)
図版 6	その他の時代の調査 1	図版14	縄文時代後期の石器
図版 7	その他の時代の調査 2	図版15	溝状遺構 1 号の遺物
図版 8	その他の時代の調査 3	図版16	溝状遺構 2 号・3 号の遺物・その他の時代の遺物

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は、東九州自動車道の建設を計画し、志布志IC～末吉財部IC区間の事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会に照会した。

これを受けて、鹿児島県教育庁文化財課（以下、「文化財課」という。）は、平成11年1月に鹿屋串良JCT～末吉財部IC間を、平成12年2月には志布志IC～鹿屋串良JCT間の埋蔵文化財の分布調査を実施し、50箇所の遺跡が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに、事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室、文化財課、県立埋蔵文化財センター（以下、「県埋文センター」という。）の4者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後、日本道路公団民営化の政府方針が提起され、事業の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。このような社会情勢の変化に伴い、遺跡の緻密な把握が要求されることとなり、埋蔵文化財の詳細分布調査や試掘調査、確認調査が実施されることとなった。なお、志布志IC～鹿屋串良JCTについては、平成14年4月に再度分布調査を実施した結果、遺跡の調査対象範囲が678,700㎡となった。

その後、日本道路公団民営化（現在の西日本高速道路株式会社）の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設が確定したことを受け、平成15年11月に暫定2車線施行に伴う議事確認書、同年12月に大隅IC（平成21年4月28日に「曾於弥五郎IC」へ名称変更）～末吉財部IC間の発掘調査協定書、平成16年3月に国土交通省九州地方整備局長、日本道路公団九州支社長、鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書が締結された。工事は日本道路公団が国土交通省から受託し、発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に委託することとなり、これまでの確認書、協定書は引き続き有効とされた。

また、日本道路公団からの委託は曾於弥五郎ICまでで終了し、曾於弥五郎ICからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

その後、平成23年度からは試掘・確認調査については文化庁の国庫補助事業を導入し、県内遺跡事前調査事業として県埋文センターが実施することとなった。

県内遺跡事前調査事業として、東九州自動車道建設に

係る試掘及び確認調査を平成23年度は荒園遺跡ほか2遺跡、平成24年度は町田堀遺跡ほか3遺跡、平成25年度は見帰遺跡ほか2遺跡実施した。

見帰遺跡の試掘調査は、平成25年11月8日に行い縄文時代後期の遺物を確認した。その結果、表面積3,060㎡が調査対象範囲となった。

改めて遺跡の取り扱いについて文化財課、国土交通省、県埋文センターの3者で協議を行い、遺跡の現地保存は困難であることから、発掘調査を実施することとなった。

近年、東九州自動車道建設事業等の増加に伴い、埋蔵文化財調査の事業量も増大することが見込まれ、その対応が困難な状況となりつつあった。そこで、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）を平成25年度に設立し、県から委託を受けて国関係の事業に係る発掘調査をより円滑かつ効率的に実施することとなった。

また、事業の効率化を図るために平成24年度から発掘調査の支援業務の民間調査組織へ委託することとなり、平成25年度に埋文調査センターが発足するにあたり、「埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」が策定された。これに基づき、見帰遺跡の発掘調査は、株式会社イビソク鹿児島営業所と支援業務委託を契約し、平成28年度に本調査を実施した。

整理報告書作成作業については、平成30年度に実施した。

第2節 事前調査

1 分布調査

平成12年2月

2 試掘調査

平成25年11月8日に行い縄文時代後期の遺物を確認した。その結果、表面積3,060㎡が調査対象範囲となった。

第3節 本調査

1 調査体制

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター センター長 堂込 秀人
調査企画	〃 総務課長兼総務係長 有村 貢
	〃 調査課長 八木澤一郎
	〃 調査第一係長 中村 和美
調査担当	〃 文化財専門員 西園 勝彦
事務担当	〃 主 査 荒瀬 勝巳

2 調査の委託

本調査の実施にあたり、埋文調査センターは「公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋文調査センター埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき、株式会社イビソクへ発掘調査の支援業務委託を行った。

なお、埋文調査センターは文化財専門員1名を常駐させ、発掘調査の支援業務の総括（運営・指揮・調整）等を行った。

委託先	株式会社イビソク鹿児島営業所
所長	稲田 昌和
主任技術者	栃原 正美
主任調査支援員	澤田 孝
測量主任技師	澤田 恭一
調査支援員	香山 周亮
〃	菅井 一希
委託期間	平成28年4月11日（月） ～平成29年3月10日（金）
調査期間	平成28年5月9日（月） ～平成28年9月9日（金） （実働54日）
委託内容	発掘調査支援業務 1式 測量業務 1式 土工業務 1式
検査	一部完成検査 平成28年10月4日（火） 完成検査 平成29年3月1日（水） 〔成果物の検査〕

3 調査経過

以下、月ごとに作業経過を略記する。

平成28年5月

表土機械掘削，Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅳa層・Ⅳb層・Ⅴ層の人力掘削，遺構検出，旧石器時代確認トレンチ人力掘削
Ⅱ層中で溝状遺構を検出し，Ⅳa層埋土の土坑を検出
Ⅱ層・Ⅲ層から縄文時代後期の遺物が出土
旧石器時代確認トレンチから少量の遺物が出土

平成28年6月

Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅳa層・Ⅳb層・Ⅴ層・Ⅶa層・Ⅶb層の人力掘削，遺構検出，旧石器時代確認トレンチ人力掘削
溝状遺構4条・土坑4基の遺構掘削
Ⅶa層・Ⅶb層の無遺物層機械掘削

平成28年7月

Ⅶ層の人力掘削，土坑断割り
Ⅷ層の無遺物層機械掘削

平成28年8月

Ⅶ層の人力掘削，Ⅸ～Ⅺ層の人力掘削
空中写真撮影（8月9日）

平成28年9月

Ⅸ～Ⅺ層の人力掘削
調査完了，現場撤収作業

第4節 整理報告書作成作業

本発掘調査時に遺物洗浄・注記等の基礎的作業を終了していたため，遺物接合等から開始し，平成28年度中に刊行した。

1 調査体制

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター センター長 前迫 亮一
調査企画	〃 総務課長兼総務係長 中村伸一郎
	〃 調査課長 中原 一成
	〃 調査第一係長 今村 敏照
調査担当	〃 文化財専門員 西園 勝彦
	文化財調査員 大坪 啓子
事務担当	〃 主 査 小牧 智子

2 作業経過

以下，月ごとに作業経過を略記する。

平成30年5月

遺物接合，復元

平成30年6月

土器分類実測，拓本，トレース，遺物観察表作成

平成30年7月

石器実測，トレース，遺物観察表作成

平成30年8月

遺構図トレース，原稿執筆

平成30年9月

原稿執筆，編集

平成30年10月

原稿執筆，遺物写真撮影，編集，見積徴収

平成30年11月～平成31年1月

校正，遺物収納準備

平成31年2月

報告書納品 遺物・図面・写真収納

平成31年3月

完了検査

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

志布志市は鹿児島県の東部、志布志湾奥のほぼ中央に位置し、東部は宮崎県串間市、西部は大崎町、北部は曾於市と境をなし、その一部は宮崎県都城市と接している。東西に約23 km、南北に約18 kmの区域で、総面積は290.28 km²となっている。平成18年1月1日に志布志町・有明町・松山町の3町が合併し志布志市となった。平均気温は約17℃と温暖な気候で、年間の降雨量は約2,470 mmと比較的多雨地帯である。また、志布志湾に浮かぶ枇榔島は、海流の影響を受け、熱帯・亜熱帯植物が繁茂している。昭和31(1956)年には国の特別天然記念物に指定された。

大隅半島は、南北方向に走る山地、その間の丘陵、台地及び平野部などの低地帯から構成される。大隅半島北部(曾於郡域)、同半島中部(肝属郡域)にシラス台地を形成し、薩摩半島南部域と大隅半島中部では火砕流溶結物からなる岩石台地もみられる。

地形は、中央部から南部にかけて、シラス台地が広がり、全体として志布志湾に向かって緩やかな勾配で傾斜し、海岸の近くで急崖となり、わずかな沖積平野を経て海岸線となる。この海岸線は、西側に砂丘海岸が続くのに対し、東側は日南層群で構成される岩礁海岸となる。

対照的に、市の北東部には、御在所岳(530.4 m)、笠祇岳(444.2 m)、陣岳(349.3 m)と起伏の多い山稜が広がり、それに接続する丘陵地の山稜線は、東側に位置する前川(全長約15 km)、西側に位置する安楽川(全長約24 km)、大隅中央部のシラス台地を貫流する菱田川(全長約55 km)を主として、大小河川の活発な浸食活動による深い浸食谷を作ること、沖積低地を形成し、各所の河岸段丘を作っている。段丘崖下からの自然湧水によって、低・中位段丘では集落が形成される。一方、高位段丘では地下水位が深いため集落形成が困難で、「蓬原開田」や「野井倉開田」などのように近～現代に開かれるまでは、畑地として利用されるにとどまっていた。

地質は古いほうから、日南層群－阿多鳥浜火砕流－夏井層－阿多(夏井)火砕流－旧期ローム層－入戸火砕流－新規火山灰層となる。日南層群は主に頁岩・砂岩の細互層から成り、年代は漸新世～前期中新世とされている。阿多鳥浜火砕流は夏井海岸の一部に認められるもので、23～25万年前とされる。夏井層は下部の貝や植物の化石を含むシルト層と上部の礫層から成る。阿多(夏井)火砕流は黒色を呈する溶結度の低い均質な凝灰岩で、年代は8.5～10.5万年前とされる。入戸火砕流は海岸に沿った地域では海拔40 m程のシラス台地を形成する。下部には大隅降下軽石層が存在する。海岸線の東半分は

シラス台地が直接張り出すことで、小リアス式海岸状を呈し、西側部分は海食による僅かな海岸沖積地が形成され、市街地や一部水田が発達し、砂丘や砂浜をへて海岸に接している。しかし、近年、志布志港が中核国際港に認定されたことにより、海岸線の様相は大きく変化している。

見帰遺跡は志布志湾へ流れる安楽川の河口から約3 km北にさかのぼった箇所右岸、標高約75 mのシラス台地上に位置する。見帰遺跡より南には、本遺跡と同一事業によって調査が進められている安良遺跡、小牧古墳群があり、北には船迫遺跡、高吉B遺跡、宇都上遺跡、稲荷迫遺跡、後迫遺跡がある。なだらかな斜面であることや近くに河川が流れていることなど、地理的な条件に恵まれていることから、旧石器時代、縄文時代早期・中期・後期・晩期、中世、近世にこの地が利用されていた。

第2節 歴史的環境

志布志の名は、正和5(1316)年の『沙弥蓮正打渡状案』に「日向方島津御庄志布志津大沢宝満寺敷地・・・」とあるのが初見とされており、万寿3(1026)年平季基が開いた島津庄・日向諸県郡一帯の外港であったと考えられている。室町時代以降にも、国内外航路の要衝として栄え、1562年に著された中国の海防・地理書『籌海図編』の倭国事略に、薩摩・大隅の主要港の一つとしてあげられている「審亭署」は志布志のこととされる。このように要衝の地であった志布志を巡って中世から戦国時代にかけて、楡井氏・畠山氏・肝付氏・島津氏と支配勢力はめまぐるしく変わり、最終的に島津氏の勢力下となり、江戸時代をむかえる。江戸期も藩境の要地で、番所・辺路番所が設置されている。志布志湊は南大隅及び日向諸県郡の蔵米の集積地で、琉球・大坂方面などへの物資の中継地として栄えた。近世中期には志布志千軒町といわれるほど賑わいをみせた。

明治4年の廃藩置県により鹿児島県諸県郡志布志郷となり、同年11月には新設の都城県に、明治6年には宮崎県の所管に移され、明治9年に再び鹿児島県の所管となり、16年宮崎県再設置の際は鹿児島県にとどめられ、同県南諸県郡に属した。

学史上重要な遺跡が多く、中でも縄文時代の遺跡が多い地域であり、さらに、近年の志布志市や大崎町、東九州自動車道建設に伴う発掘調査の成果や旧有明町(現志布志市)の農道整備に伴う発掘調査により、弥生時代・古墳時代等の様相も明らかになりつつある。

旧石器時代

中須B遺跡・蕨野B遺跡から剥片尖頭器・角錐状石器

等ナイフ形石器文化期の石器群が、道重遺跡・和田上遺跡では細石刃文化期の石器群が出土している。また、中原遺跡や和田上遺跡で、畦原型細石刃核が出土している。次五遺跡では、黒曜石（三船産）を素材とする細石刃核と珪質頁岩を素材とする細石刃核が別々のブロックで見つかっている。珪質頁岩を素材とする細石刃核は、宮崎平野部を中心に分布する畦原型細石刃核であり、石器製作技術をめぐる地域間関係を考える上で、新たな資料が追加された。見帰遺跡でも、細石刃やナイフ形石器が出土している。

縄文時代草創期

東黒土田遺跡・鎌石橋遺跡から隆帯文土器が出土している。東黒土田遺跡では、舟形石組遺構や貯蔵穴を検出した。この貯蔵穴からは、日本最古の落葉性のコナラ属の木の実が出土している。また、小牧古墳群でも草創期の土器が出土している。当該時期の土器は志布志市を含む大隅半島一帯で出土例が増加している。

縄文時代早期

倉園B遺跡から前平式土器・吉田式土器・石坂式土器などが出土し、堅穴住居跡、連穴土坑、集石、配石遺構などの遺構を検出している。出口B遺跡では、前平式土器・塞ノ神式土器が出土しているほかに、故海老原行秀氏が、昭和初期に独鈷状石器2点を発見している。夏井土光B・C遺跡では、塞ノ神A式土器の壺形土器などの良好な資料が出土した。また、稲荷上遺跡や横堀遺跡では、耳栓状土製品などが見つかっている。高吉B遺跡は、集石遺構を141基検出し、それらに伴う南九州に特徴的な数型式の土器が出土している。特に、連穴土坑の中から完形に近い石坂式系土器が出土し、連穴土坑の用途や使用時期の下限を知る上で重要な例となっている。当該時期の出土例は多く、今後もさらに増える様相である。見帰遺跡では、下剥峯式土器、石坂式土器や押型文土器が数点出土している。

縄文時代前期

縄文時代前期末から中期初頭を代表する野久尾遺跡から曾畑式土器が出土している。ほかに、鎌石橋遺跡と別府（石踊）遺跡では、轟式土器、曾畑式土器が出土している。当該時期の調査事例は少ない。

縄文時代中期

野久尾遺跡では、深浦式土器、船元式土器等が出土した。また、総計約5,000点出土した遺物のうち、約80%を占める尖底の条痕文土器が野久尾式土器として型式設定された。形状や製作技法などの特徴から縄文時代中期を代表する深浦式土器との関連が考えられる。また、池野遺跡、樽野遺跡、土光A遺跡、野久尾遺跡では、春日式土器が出土している。さらに、前谷遺跡では春日式土器段階の堅穴住居跡が検出されている。

縄文時代後期

代表する遺跡として、中原遺跡と片野洞穴遺跡がある。中原遺跡では、南福寺式土器や阿高式系土器の類似土器、磨消縄文土器、疑似縄文土器、指宿式土器などが多量に出土した。特に、磨消縄文系土器で瀬戸内地方の福田KⅡ式土器の完形に近い土器は、形態や技法は瀬戸内系であるが胎土は地元のものであり、この時期における文化の伝播や交流を考える上で貴重な資料である。また、石鍾が400個以上出土している。これほどまとまった量の出土例は県内でも類例をみない。この遺跡の直下は安楽川と尾野見川が合流する地点であり、関連があると考えられる。また、土器の破片を利用した土製加工品、いわゆる「メンコ」も多量に出土している。片野洞穴遺跡では、西平式～御領式期の動物骨や貝殻、釣針やかんざし等の骨角器が出土している。稲荷迫遺跡では中岳Ⅱ式の埋設土器が出土している。なかには、完形に復元できるものがあり、これまで全形の分かる資料が少なかった中岳Ⅱ式土器に関する重要な資料が加わった。この他、後期のほぼ全ての型式が出土した家野遺跡や独鈷状石器が出土した出口A遺跡や、落とし穴状遺構を2基検出した船迫遺跡など、調査事例は近年増大傾向である。見帰遺跡では、西平式土器、丸尾式土器などが出土している。

縄文時代晩期

井手上A遺跡や上苑遺跡では、入佐式深鉢の埋設土器が見つかっている。特に、井手上A遺跡の資料は横位の状態で埋設されたもので、類例が少ない。小迫遺跡、飛渡遺跡は、黒川式土器とともに孔列土器が出土している。小迫遺跡では、黒川式干河原段階の良好な資料が認められている。稲荷迫遺跡でも孔列土器が出土している。また、晩期に属すると考えられる勾玉が西原A遺跡と小迫遺跡で出土している。

弥生時代

縄文時代後期後半から弥生時代早期を代表する刻目突帯文土器が夏井土光遺跡、小迫遺跡、稲荷迫遺跡、上苑遺跡、上苑A遺跡から出土している。また、稲荷迫遺跡では中期前～中葉の incoming I・Ⅱ式期の土坑墓が2基見つかっている。次に、学史上重要な遺跡として、京ノ峯遺跡と土橋遺跡がある。京ノ峯遺跡では、中期後半の円形・方形周溝墓が多数検出された。南九州でも稀有な墓制であり、近畿・瀬戸内地方の影響が考えられる。土橋遺跡では、明治40(1907)年に中広形銅鉾が出土している。県内唯一で本土最南端の発見例である。中広形銅鉾は中期後半に位置づけられるもので、分布域は高知県中央～西部、豊前～豊後地域に集中することから、豊後水道地域における地域間交流の課程でもたらされた可能性が指摘されている。また、柳町遺跡、長田遺跡、前谷B遺跡、船迫遺跡、高吉B遺跡では、弥生時代中期の堅穴住居跡が検出され、住居内からは山ノ口式土器が出土している。井手上A遺跡では中期中葉の incoming Ⅱ式期の堅穴住居跡が

見つかっている。中期後半の山ノ口Ⅱ式期になると堅穴住居跡の検出例は増加し、柳遺跡、長田遺跡、本村遺跡、井手間遺跡、前谷B遺跡がある。このほか、夏井土光遺跡では前期末～中期初頭の柱状片刃石斧が出土している。

古墳時代

仕明遺跡では中津野～東原式期、屋部当遺跡では辻堂原～笹貫式期、長田遺跡や稲荷迫遺跡、上苑A遺跡などで笹貫式期の堅穴住居跡を検出している。近年では、宮脇遺跡、安良遺跡、上苑A遺跡、中牟田遺跡、仕明遺跡から成川式土器の笹貫式新段階期が出土している。県内では出土例が少ない6世紀末～8世紀前半期頃の須恵器も多数認められており、「謎の7世紀」と呼ばれている南九州の様相を解明する上で重要な地域である。

古墳は、前方後円墳である飯盛山古墳、小牧1号墳、中期の「造り出し付き円墳」の可能性が指摘されている原田古墳がある。飯盛山古墳は出土した埴輪から中期初め（4世紀後半）、原田古墳は出土した須恵器から中期中頃（5世紀中頃）、そして小牧1号墳は採集された須恵器から後期後半（6世紀後半）に築造された可能性が指摘されている。また、高塚古墳以外には原田地下式横穴墓群、馬場地下式横穴墓群、京ノ峯地下式横穴墓群、六月坂横穴墓がある。六月坂横穴墓は明治42(1909)年に旧制志布志中学校敷地整地の際に発見されたもので、後期末～奈良時代初め（6世紀後半～8世紀前半）の須恵器などが見つかっている。ただし、近年の再調査の結果、墓ではない可能性が指摘されている。

古代

仕明遺跡では、8世紀代の堅穴住居跡を検出している。いずれも壁溝帯を有することが特徴である。水ヶ迫横穴墓で須恵器の蔵骨器が見つかっている。小迫遺跡、安良遺跡、牧ノ原A遺跡、井手上A遺跡では墨書土器が出土している。また、焼塩土器が野久尾遺跡、宮脇遺跡、稲荷迫遺跡、仕明遺跡などで出土している。本地域では特に8世紀代の成果があがっており、注目されている。

中世

国指定史跡である志布志城跡がある。志布志城とは、内城・松尾城・高城・新城の四城の総称である。志布志城跡に関する記録については、建武3(1336)年の「救仁院志布志城」が初見で、肝付氏が重久氏に攻められた際のもので、それ以前については不明である。保存整備の目的で継続的に調査が行われ、華南三彩など中世後期の中国産陶磁器や東南アジア産陶器が出土している。このほかに、建久(1190～1198)年間に築かれ、地頭弁済使安楽平九郎為成の居城とされる安楽城跡、文治4(1188)年に平重頼によって築かれたとされる松山城跡、南北朝期に救仁郷氏の居城とされる蓬原城跡などが存在する。

山城以外の事例としては以下のものがある。安良遺跡では、中世前期の備前焼・常滑焼等の国産陶磁器や白

磁・龍泉窯系青磁等の輸入陶磁器が出土している。山宮神社境内からは、明治26(1893)年に青白磁四耳壺の蔵骨器や鏡・太刀・青白磁合子が見つかっている。長田遺跡・仕明遺跡では中世前半期の土坑墓、京ノ峯遺跡では2基の方形周溝墓を検出している。

近世

この地域は、日向国諸県志布志郷とされ、東を高鍋(秋月)藩と接することから陸海ともに極めて重要な郷であった。現在の志布志小学校に地頭仮屋がおかれ、その周辺には武家屋敷が建ち並ぶ「麓」を形成していた。藩米等の集積・積出港であった前川河口には津口番所がおかれていた。藩政末期には琉球を通して密貿易が行われ、その商人であった中山宗五郎の屋敷は「密貿易屋敷」と呼ばれていた。これらの地頭仮屋跡、津口番所跡、密貿易屋敷跡は発掘調査が行われ、陶磁器類が出土している。船迫遺跡では、県内遺跡からは初の出土例となった二分金が見つかっている。また、志布志湾の海岸沿いでは砂鉄が採取でき、それを用いて製鉄が行われていた。現在でも浜砂鉄が薄く堆積している。安楽川や前川など中小河川沿いに製鉄関連遺跡を多く確認していることから、河川を利用し、製鉄作業を行っていたと考えられる。

近代

太平洋戦争末期、アメリカ軍の南九州上陸作戦(オリンピック作戦)を予測した日本軍は、志布志湾沿岸に洞窟式の地下陣地を造った。特に、海岸に面する台地の断崖に造成された洞窟陣地は総延長16kmに及ぶもので、すべての陣地が地下壕で連絡していた。壕は場所によって2～3段になり、銃眼・砲座など戦闘施設以外にも炊事場などの生活施設も存在していた。権現島水際陣地跡は現存している陣地の一つである。また、野井倉台地には昭和20(1945)年に海軍航空隊志布志基地(野井倉飛行場)が建設された。

参考文献

- 志布志町1972『志布志町誌』上巻
- 有明町誌編纂委員会1980『有明町誌』
- 志布志町教育委員会1985『志布志の埋蔵文化財』
- 大木公彦・内村公大2012『夏井海岸の地形・地質調査報告書』志布志市教育委員会
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2012『稲荷迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(169)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2014『船迫遺跡・高吉B遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(180)
- 鹿児島県志布志市教育委員会2013『(伝)六月坂横穴墓』志布志市教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
- 鹿児島県志布志市教育委員会2018『次五遺跡』志布志市教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書(13)



第1図 周辺遺跡位置図

表 1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代	地形	遺構・遺物等	備考
1	土橋遺跡	有明町野井倉字土橋・下原・土原・合所・下口・谷尻, 有明町伊崎田字塚・西ヶ迫	縄文後, 弥生中	台地	中広形銅矛	
2	渡迫遺跡	志布志町安楽字稲渡迫	古代	台地		平成11年農政分布調査
3	稲荷迫遺跡	志布志町安楽字稲荷迫・牧	縄文, 弥生, 古墳, 古代	台地	縄文・弥生・古墳土器 土師器 石器	鹿児島県埋文セ(169)
4	小迫下遺跡	志布志町安楽字小迫下・曲迫	縄文早・後・晩	台地		平成13年分布調査・平成16年確認調査
5	宇都上遺跡	志布志町安楽字宇都上・高吉	古墳	台地		平成18年県道関係分布調査
6	高吉B遺跡	志布志町安楽字宇都上・茶馬場・雨堤	弥生	台地	落とし穴 縄文・弥生土器 石器	鹿児島県埋文セ(180)
7	西迫遺跡	志布志町安楽字西迫	縄文晩	台地		平成15年農政分布調査
8	中原（曲瀬）遺跡	志布志町安楽字中原・西迫・中渡	旧石器, 縄文後, 弥生	台地	縄文土器 磨石	
9	中原遺跡	志布志町安楽4712-11・4712-6字中原	旧石器, 縄文早・中・後	台地	縄文土器 石器	志布志町埋文報(9)
10	小瀬A遺跡	志布志町安楽字中原小瀬・西迫	縄文後	台地	縄文晩土器 石器	
11	小瀬B遺跡	志布志町安楽字小瀬・中原	縄文後, 弥生	台地	縄文・弥生土器 石器	
12	大渡遺跡	志布志町安楽字大渡	縄文, 弥生	台地		
13	大渡B遺跡	志布志町安楽字大渡	縄文早・後	丘陵		
14	船迫遺跡	志布志町安楽字船迫・大渡	縄文早・後, 弥生中, 古墳	台地	三稜尖頭器・剥片 縄文～中世土器	鹿児島県埋文セ(180)
15	上原遺跡	志布志町安楽字上原	弥生	台地		平成11年農政分布調査
16	山角B遺跡	志布志町安楽字山角・炭床	縄文後・晩, 弥生, 古墳	台地	縄文・古墳土器 石器 勾玉	志布志市埋文報(11)
17	山角A遺跡	志布志町安楽字山角	縄文後	台地		
18	上重遺跡	志布志町安楽字上重	縄文後	台地		
19	百堂穴遺跡	志布志町安楽字岩戸	縄文前, 弥生	洞穴	縄文土器 獣骨 磨製石鏃 磨製石斧	
20	見帰遺跡	志布志町志布志字見帰	旧石器, 縄文早・後	台地		本報告書
21	炭床遺跡	志布志町安楽字炭床	縄文後・晩, 弥生, 古墳	台地	縄文・古墳土器 石器	志布志市埋文報(11)
22	大久保A遺跡	志布志町安楽字大久保	縄文, 弥生	丘陵		
23	大久保B遺跡	志布志町安楽字大久保・七本松	弥生	台地		
24	大久保C遺跡	志布志町安楽字大久保	弥生	台地		平成11年農政分布調査
25	七本松B遺跡	志布志町安楽字七本松	弥生	台地		平成11年農政分布調査
26	七本松A遺跡	志布志町安楽字七本松	弥生	台地		平成11年農政分布調査
27	高牧遺跡	志布志町安楽字高牧	弥生	台地		平成5年確認調査 平成11年農政分布調査
28	安楽城跡	志布志町安楽字前原	中世	台地		1190～1198年（建久年間）
29	山宮古墳	志布志町安楽字宮下	中世	台地	仿製鏡, 直刀他	
30	山宮神社跡	志布志町安楽字宮下	古代	台地		銅鏡（唐草鴛鴦文様鏡）, 大正7年4月8日国指定
31	宮内遺跡	志布志町安楽字宮内・下原	弥生, 古代	台地		
32	宮之上遺跡	志布志町安楽字宮之上	古代	台地		平成12年東九州自動車道関係分布調査
33	尖堀遺跡	志布志町安楽字尖堀	古墳, 古代, 中世	台地		
34	湯田堀遺跡	志布志町帖字湯田堀	縄文, 古墳, 中世	台地		平成11年農政分布調査 平成14年確認調査
35	桃ノ木遺跡	志布志町帖字桃ノ木・五里ヶ迫	弥生中	丘陵		
36	弓場ヶ尾遺跡	志布志町帖字弓場ヶ尾	縄文早, 古墳	台地	円筒形土器 石器	町埋文報(31)・(35)
37	稻荷免遺跡	志布志町帖字稻荷免		台地		
38	島廻遺跡	志布志町帖字島廻	縄文早, 弥生	台地	弥生土器	志布志町埋文報(13)
39	飛渡遺跡	志布志町帖字飛渡	縄文晩, 弥生中, 古墳	台地	縄文・弥生土器 石器	志布志町埋文報(13)
40	油田遺跡	志布志町帖字油田・西中尾	縄文, 弥生	台地		昭和62年確認調査
41	道悦遺跡	志布志町帖字道悦	縄文後, 弥生	丘陵	弥生土器 磨製石斧	

番号	遺跡名	所在地	時代	地形	遺構・遺物等	備考
42	志布志城（内城）跡	志布志町帖字内城	縄文，弥生，中世	台地	土塁 虎口 青磁 白磁 陶器ほか	志布志町埋文報(34)・ 志布志市埋文報(1)・(8)・(12)
43	志布志城（松尾城）跡	志布志町帖字松尾	中世	台地	青磁 白磁 染付 陶器 石製品 金属製品	平成17年7月14日国指定 志布志町埋文報(34)
44	志布志城（高城）跡	志布志町帖字高城	中世	台地	青磁 白磁 染付 陶器 金属製品	志布志町埋文報(34)
45	志布志城（新城）跡	志布志町帖字字都ノ上	縄文早・中，中世	台地	青磁 白磁 染付 陶器	志布志町埋文報(14)・(34)
46	小渕遺跡	志布志町帖6423 字高濱	縄文中・後	丘陵		
47	高濱遺跡	志布志町帖字高濱	縄文中・後，近世	河川		
48	宝満寺跡	志布志町帖字宝満	古代，中世	河川	染付 陶器 土師質土器	志布志町埋文報(31)
49	向川原遺跡	志布志町帖字向川原	縄文早	丘陵	縄文土器	
50	津口番所跡	志布志町志布志一丁目3151	近世	低地		
51	密貿易屋敷跡	志布志町志布志2866-1・5・6字西町	近世	海岸		
52	大慈寺開山堂墓地	志布志町志布志二丁目	中世	海岸		大慈寺止々庵跡，大慈寺開山堂
53	大慈寺跡（即心院）	志布志町志布志二丁目	中世	海岸		1340年(興国元年) 大慈寺開山 昭和46年7月1日県指定
54	愛甲喜春墓	志布志町志布志二丁目	近世	海岸		昭和36年7月16日県指定
55	外堀遺跡	志布志町志布志字外堀	縄文早	台地		
56	大西遺跡	志布志町志布志字大西	古代	海岸	縄文土器	
57	六月坂横穴墓	志布志町志布志字水ヶ迫	古代	丘陵	土師器 須恵器	明治42年発見か
58	水ヶ迫横穴墓	志布志町志布志字水ヶ迫	古代	丘陵	土師器	昭和8年発見
59	船磯遺跡	志布志町安楽字船磯・水ヶ迫	縄文前・中	海岸	縄文前土器	
60	別府上遺跡	志布志町安楽字別府上	古代	台地		
61	別府（石踊）遺跡	志布志町安楽字別府	縄文早，弥生中	台地	縄文土器 石鏃 石斧	志布志町埋文報(1)
62	鳥井下遺跡	志布志町安楽字鳥井下	縄文早・前	台地	縄文土器	
63	権現原遺跡	志布志町安楽字権現原	弥生	台地	弥生土器	
64	八ヶ代遺跡	志布志町安楽字八ヶ代	弥生，古墳	台地		平成6年農政分布調査 平成8年確認調査
65	宮脇遺跡	志布志町安楽1106-1字宮脇・岩下	縄文中・後・晩， 古墳，古代	台地	縄文土器 成川式土器 土師器 須恵器	志布志町埋文報(28)
66	二重堀A遺跡	志布志町安楽字二重堀	弥生	台地		
67	水神松遺跡	志布志町安楽字水神松・三郎丸・小井出手	古墳	平地		
68	安良遺跡	志布志町安楽字勢園	縄文後，古代	台地	縄文土器 土師器 石器	平成28・29年発掘調査
69	安楽小牧	志布志町安楽字小牧	縄文早	台地		
70	小牧古墳群	志布志町安楽5973-10字小牧	古墳	台地		
71	次五遺跡	有明町野井倉字次五・横堀	古代	台地	縄文早土器 集石	志布志市埋文報(13)

第3節 志布志ⅠC～鹿屋串良ⅡCⅢ間の遺跡
ここでは調査済み及び調査中の遺跡の概要を記載する。
東九州自動車道の志布志ⅠC～鹿屋串良ⅡCⅢ間には，
詳細については各報告書等を参照していただきたい。
第2表に示すとおり23か所の遺跡が存在する。

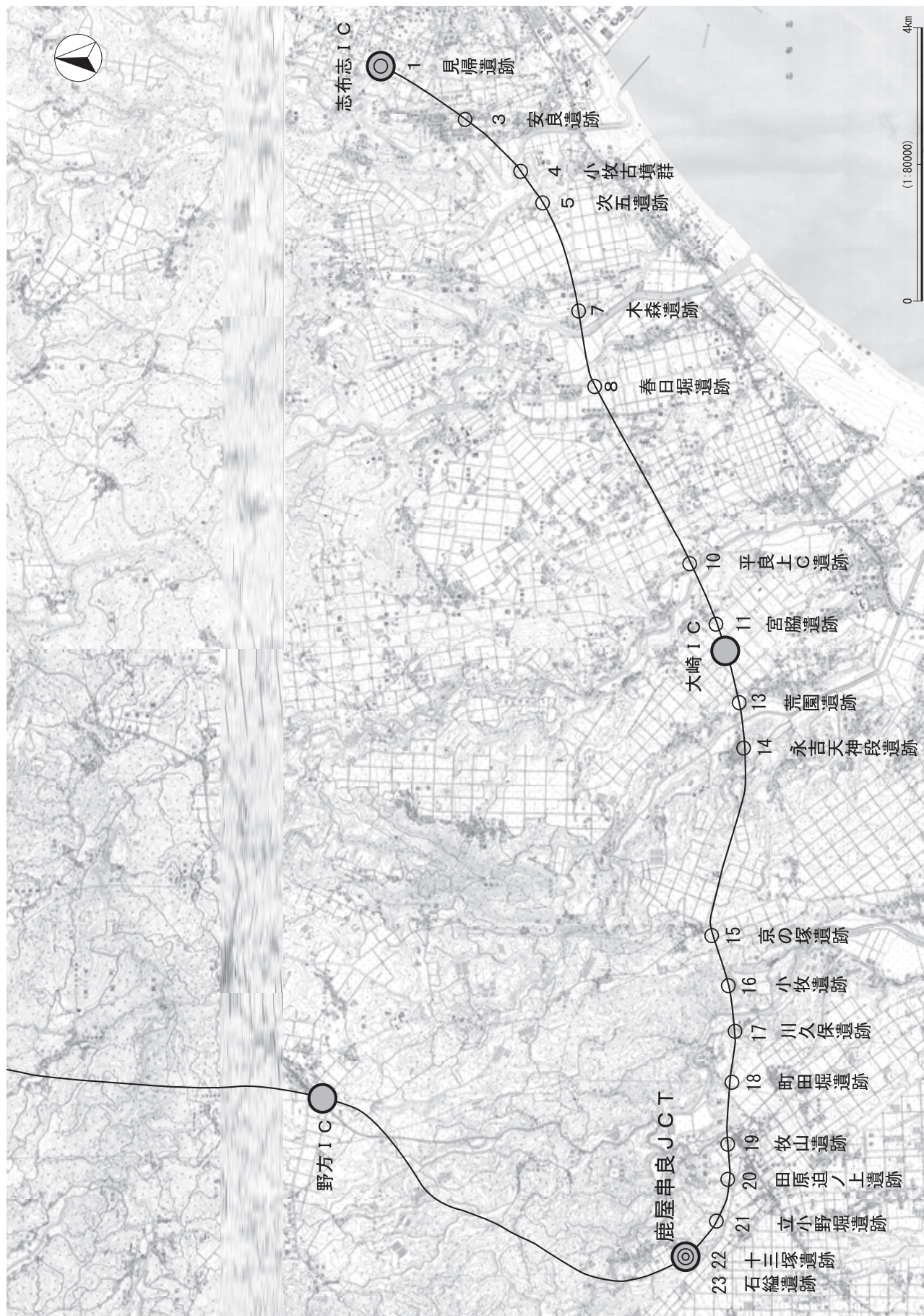
表2 志布志ⅠC～鹿屋串良ⅡCⅢ間の遺跡

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺 跡 の 概 要		
					時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物
1	見 婦	志布志市志布志町志布志台地上 標高約 70 m	H 28 年 度 終 了 H 25・30 年 度 に 県埋文センター 調査（隣接地）	H 30 年 度 終 了 本報告書	旧 石 器	—	ナイフ形石器，細石刃，使用痕剥片，磨石，叩石，ハンマーストーン
					縄文早期	土坑（H 25 年度県埋文センター調査のみ）	石坂式，押型文，下剥峯式，石鏃，磨石，石皿
					縄文前・中期	落とし穴，土坑	—
					縄文後・晩期		磨消縄文，丸尾式，西平式，中岳Ⅱ式，磨石，敲石
					縄文時代を中心とした遺跡である。旧石器時代はナイフ形石器文化期及び細石刃文化期に比定される。縄文時代早期は，土器に比して石器の出土が極めて少ない。前～中期の落とし穴が2基検出されている。溝状遺構1号は時期不詳であるが縄文時代後期の可能性がある。		
2	宮ノ上	志布志市志布志町安楽台地上 標高約 45 m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺 跡 の 概 要		
					時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物
3	安良	志布志市志布志町安楽 台地上 標高約 30 m	H 28 年度 H 29 年度 終了	H 30 年度 作業中	縄文早・後期		小牧 3 A, 納曽式, 西平式
					弥生中期		山ノロ式, 須玖式
					古墳時代	溝状遺構	成川式土器, 須恵器
					古 代		土師器, 須恵器
					中 世	掘立柱建物跡, 土坑, ビット他	青白磁, 滑石製石鍋, 土師器, 炭化米塊
古墳時代後半期と中世を中心としたの遺跡である。調査区内における両時期の集落構造把握等に向け整理作業を進めている。							
4	小牧古墳群	志布志市志布志町安楽 台地上 標高約 50 m	H 27 年度 H 28 年度 終了	H 30 年度 作業中	旧 石 器	—	ナイフ形石器, 細石刃核, 細石刃
					縄文草創期	集石	土器片, 黒曜石剥片, 磨石, 敲石, 石皿
					縄文早期	集石	吉田式, 妙見・天道ヶ尾式, 塞ノ神A式, 塞ノ神B式, 苔浜式, 耳栓, 石鏃, 磨石, 異形石器
					弥 生	—	弥生土器, 石包丁
起伏のある地形に立地し, 縄文時代早期を中心に旧石器時代, 縄文時代草創期も出土した複合遺跡である。縄文時代早期の集石は検出層によって構成礫の大きさに差が認められる。また, 塞ノ神式土器の壺形土器や, 耳栓, 異形石器, 円盤状石器等が出土している。古墳群として遺跡登録されているが, これまでの調査では痕跡を含め古墳は確認されていない。							
5	次五	志布志市有明町野井倉 台地縁辺部標高約 50 m	H 26 年度 H 27 年度 終了	H 29 年度 終了	旧 石 器	—	畦原型細石刃核, 細石刃, 剥片
					縄文早期	落とし穴, 連穴土坑, 土坑, 集石, 磨石集積	前平式, 加栗山式, 吉田式, 札ノ元Ⅶ類, 石坂式, 中原V式, 下剥峯式, 桑ノ丸式, 押型文, 手向山式, 塞ノ神B式, 打製・磨製石鏃, 石錘, 局部磨製石斧
旧石器時代から縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代は, 細石刃文化期の遺物が出土している。縄文時代早期前葉に該当する遺構や遺物が多く確認された。特に注目されるのは被熱破砕礫が多量に出土した点である。							
6	大代	志布志市有明町野井倉 台地縁辺部 標高約 40 m	文化財課の試掘調査により, 本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため, 本調査を実施せず。				
7	木森	志布志市有明町野井倉 河岸段丘 標高約 30 m	H 26 年度 H 30 年度 終了	H 31 年度以降	縄文早期	集石	前平式, 加栗山式, 吉田式, 下剥峯式, 押型文, 石鏃, 石匙, 磨石, 敲石
					中 世	掘立柱建物跡	須恵器, 土師器, 青磁, 白磁, 滑石製石鍋片, 鉄製品, 鉄洋
縄文時代早期と中世を中心とする遺跡である。遺構では縄文時代早期の集石, 中世の掘立柱建物跡等が発見され, 遺物では縄文時代早期の土器, 石器, 石匙, 磨石・敲石の他, 須恵器, 土師器, 青磁, 白磁, 滑石製石鍋片, 鉄製品等が出土している。鬼界カルデラ噴火による液状化現象(噴砂跡)が確認されている。							
8	春日堀	志布志市有明町蓬原 河岸段丘 標高約 30 m	H 26 年度 H 27 年度 H 28 年度 H 29 年度 H 30 年度 終了	H 30 年度 作業中	縄文早期	堅穴住居跡, 連穴土坑, 集石, 土坑, 土器集中, 炭化物集中, 落とし穴	前平式, 加栗山式, 石坂式, 下剥峯式, 桑ノ丸式, 押型文, 手向山式, 塞ノ神式, 打製石鏃, 打製・環状石斧, トロトロ石器, 磨石, 台石, 石皿, 砥石, 穿孔円礫
					弥 生	堅穴住居跡	山ノロ式
					古 墳	堅穴住居跡, 溝状遺構 土坑, 棒状礫集積遺構	甕(東原式, 笹貫式), 壺, 埴, 高坏, 須恵器高坏, 棒状礫, 磨製石鏃片
					古代～中世	堅穴建物跡, 掘立柱建物跡, 土坑墓, 杭列跡, 焼土跡	土師器
					近 世	土坑, 溝状遺構, 古道, 遺物集中	陶器, 磁器
縄文早期から中世を中心とする遺跡である。遺構は縄文時代早期の堅穴住居跡, 連穴土坑, 集石, 落とし穴, 弥生時代の堅穴住居跡, 古代～中世の掘立柱建物跡が検出され, 遺物は縄文時代早期の土器, 打製石斧, 環状石斧, トロトロ石器等をはじめ, 弥生時代から中近世の遺物が出土している。また鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象(噴砂跡)の痕跡も確認されている。							
9	稲荷堀	曾於郡大崎町菱田 台地上 標高約 50m	文化財課の試掘調査により, 本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため, 本調査を実施せず。				
10	平良上 C	曾於郡大崎町井俣 台地上 標高約 40 m	H 26 年度 H 27 年度 終了	H 28 年度 終了	縄文早期	堅穴住居跡, 連穴土坑, 集石, 埋設土器, チップ集中	吉田式, 石坂式, 下剥峯式, 押型文, 平楕式, 石鏃, 石匙, 打製・磨製石斧, 扁平打製石斧, 磨石, 石皿, 礫石器, 石核, フレーク, チップ
縄文時代早期を中心とする遺跡である。遺構は堅穴住居跡, 連穴土坑, 集石, 土坑が検出されている。遺物は, 縄文時代早期の土器, 石鏃, 石匙, 打製石斧, 磨製石斧等が出土している。また, 鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象(噴砂跡)も確認されている。							
11	宮脇	曾於郡大崎町井俣 台地上 標高約 40 m	H 27 年度 H 28 年度 終了	H 30 年度 作業中	旧 石 器	礫群 2 基	ナイフ形石器, 三稜尖頭器, 台形石器, 細石器, 石核, スクレイパー, 搔器, 使用痕剥片, フレーク, チップ, 磨石, 叩石
					縄文早期	集石, 土坑, 土器集中	加栗山式, 小牧 3 A, 下剥峯式, 桑ノ丸式, 押型文, 平楕式, 塞ノ神式, 打製石鏃, 磨石, チップ
					近 世	—	薩摩焼, 寛永通宝
旧石器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代では, 石器製作に関連すると考えられる石核, フレーク, チップ等が出土している。縄文時代早期では, 集石, 土坑, 土器集中, ビットと土器, 石器等が出土している。鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象(噴砂跡)の痕跡も確認されている。							
12	堂園堀	曾於郡大崎町井俣 台地上 標高約 45 m	文化財課の試掘調査及び埋文センターの確認調査により, 本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため, 本調査を実施せず。				

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺 跡 の 概 要		
					時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物
13	荒園	曾於郡大崎町 仮宿 台地縁辺部 標高約 50 m	H 24 年度 H 25 年度 H 26 年度 H 30 年度 終了 ※H 24 年度は県 埋文センター調 査	H 28 年度 (第 1 地点) 終了 (第 2 地点) 作業中	旧 石 器	—	畦原型細石核・細石刃・水晶剥片
					縄文早期	集石、土坑、剥片・チップ 集中	前平式、吉田式、加栗山式、下剥峯式、押型文、手向山式、 平椀式、塞ノ神式、舌浜式、条痕文、壺形土器、石鏃、 スクレイパー、石匙、耳栓、打製・磨製石斧、磨石、石皿、 フレーク、チップ
					弥生中期	堅穴住居跡、土坑	吉ヶ崎式、山ノロ式、磨製石鏃未製品、砥石
					古 墳	堅穴住居跡	成川式土器、須恵器、砥石
					古代以前	片栗研堀溝状遺構	—
					中 世	掘立柱建物跡、土坑、 溝状遺構、帯状硬化面	土師器、東播系須恵器、陶器、青磁、華南三彩
					近世以降	帯状硬化面	薩摩焼
					縄文時代早期から古墳時代を中心とする遺跡である。遺構は、縄文時代早期の集石、弥生時代・古墳時代の堅穴住居跡、古代以前の片栗研堀、中世の掘立柱建物跡等が検出され、遺物は縄文時代早期の土器、石器、弥生時代・古墳時代の土器、土師器、陶器、磁器等が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象の(噴砂跡)も確認されている。		
14	永吉天神段	曾於郡大崎町 永吉 台地縁辺及び 河岸段丘 標高 30 ～ 50m	H 24 年度 H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 終了 ※H 24 年度は県 埋文センター調 査	H 27 年度 (第 1 地点) 終了 H 28 年度 (第 2 地点 1) 終了 H 29 年度 (第 2 地点 2) 終了 H 30 年度 (第 3 地点) 終了 H 30 年度 (第 2 地点 3) 作業中	旧 石 器	礫群、ブロック	尖頭器、ナイフ形石器、台形石器、剥片
					縄文早期	集石、土器埋設遺構	前平式、加栗山式、吉田式、手向山式、下剥峯式、押型文、 平椀式、塞ノ神式、舌浜式、条痕文、石鏃、石匙、石斧、 磨石、敲石、石皿、フレーク、チップ
					縄文前期	—	曾畑式
					縄文後期	—	岩崎上層式、北久根山式、中岳Ⅱ式
					縄文晩期	堅穴住居跡、落とし穴、土坑	入佐式、黒川式、刻目突帯文、管玉、打製石斧
					弥 生	堅穴住居跡、掘立柱建物跡、 円形周溝墓、土坑墓群、土坑	入来式、山ノロ式、黒髪式、鉄鏃、磨製石鏃、管玉
					古 墳	堅穴住居跡、土坑	成川式、須恵器
					古 代	掘立柱建物跡、土坑	須恵器、土師器
15	京の塚	曾於郡大崎町 西持留 台地上 標高約 95 m	H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 終了	H 26 年度 H 28 年度 H 30 年度 作業中	縄文早期	集石	石坂式、下剥峯式、中原式、押型文、塞ノ神式、打製石鏃、 石核
					縄文前期～ 中期初頭	土坑、土器集中	曾畑式、深浦式、大歳山式、鷹島式、船元式、打製石鏃、石匙、 石鏃、スクレイパー、二次加工剥片、磨石、敲石、石皿、石核、 フレーク
					近世以降	溝状遺構・古道	—
					旧石器時代から近世までの遺跡である。弥生時代中期の円形周溝墓を頂点とする土坑墓群から、国内では最古級となる鉄鏃が出土した。中世では白磁、青磁、瓦質土器、東播系須恵器等が多量に出土した。また、地下式坑と呼ばれる中～近世の大型土坑も発見された。		
					縄文時代前期から中期初頭を中心に、縄文時代早期から近世までを含む遺跡である。縄文中期では 170 基を超える土坑が検出されたほか、在地系土器の深浦式土器、近畿地方の大歳山式土器や鷹島式土器、瀬戸内地方の船元式土器などが出土し、当時の遠隔地交流の一端が明らかとなった。		
16	小牧	鹿屋市串良町 細山田 台地上 標高約 60 m	H 27 年度 H 28 年度 H 29 年度 終了	H 30 年度 作業中	旧 石 器	—	細石刃、フレーク、チップ
					縄文早期	堅穴住居跡、連穴土坑、土坑、 集石	前平式、吉田式、石坂式、下剥峯式、平椀式、条痕文、石匙、 磨石、石皿
					縄文前期	—	曾畑式、深浦式、磨石
					縄文後期	堅穴住居跡、石皿立石遺構、 伏襲、石斧集積遺構、集石、 土坑	阿高式系、岩崎上層式、指宿式、市来式、石鏃、横刃型石器、 打製石斧、磨石、石皿、大珠
					縄文晩期	—	入佐式、黒川式、刻目突帯文
					弥生中期	—	入来式、山ノロ式、砥石
					古 墳	堅穴住居跡、礫集積、 土器溜、土坑	東原式、辻堂原式、布留系土器、須恵器、鉄鏃、鉄製品、敲石、 勾玉、軽石加工品
					古 代	土坑	土師器、須恵器短頸壺
17	川久保	鹿屋市串良町 細山田 河岸段丘 標高 30 ～ 50m	H 26 年度 H 27 年度 H 28 年度 H 29 年度 H 30 年度 調査中	H 27 年度 H 29 年度 H 30 年度 (A 区・B 区) 作業中 (C 区) 終了	旧 石 器	礫群	剥片尖頭器、ナイフ形石器、畝原型細石核
					縄文早期	堅穴住居跡、集石、土坑	前平式、加栗山式、吉田式、倉園 B 式、石坂式、下剥峯式、 押型文、塞ノ神式土器、石鏃、打製石斧、石皿
					縄文前期	集石	轟式、曾畑式、磨製石斧
					縄文晩期	集石	黒川式、刻目突帯文
					弥生中期	堅穴建物跡	高橋式、下城式、山ノロ式
					古 墳	堅穴住居跡、鍛冶関連建物跡、 堅穴状遺構、溝状遺構、道跡	成川式土器、輪羽口、高坪脚転用輪羽口、鉄鏃、鉄滓、勾玉、 管玉
					古 代	掘立柱建物跡	須恵器、土師器
					中 世	掘立柱建物跡、 溝状遺構、道跡	青磁、白磁、瓦器碗
17	川久保				旧石器時代から中世までの遺跡である。特に古墳時代では、集落を構成する多数の堅穴建物跡や鍛冶関連遺物を伴う遺構が発見されているほか、専用の輪の羽口も出土している。古墳時代の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。		

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺 跡 の 概 要						
					時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物				
18	町田堀	鹿屋市串良町 細山田 台地縁辺部 標高約 90 m	H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 H 28 年度 終了	H 27 年度 (1) 終了 H 29 年度 (2) 終了	縄文早期	集石	下剥峯式，平楕式				
					縄文後期	竪穴住居跡，埋設土器， 落とし穴，土坑， 石斧集積遺構	中岳Ⅱ式，石刀，石鏃，打製・磨製石斧，ヒスイ製垂飾，小玉， 勾玉，管玉				
					縄文晩期	—	黒川式土器，刻目突帯文				
					弥生中期	竪穴住居跡	入佐式，山ノロ式土器，土製勾玉				
					古 墳	竪穴建物跡，地下式横穴墓， 円形周溝墓，溝状遺構	成川式土器，人骨，鉄剣，鉄鏃，刀子，ヤリ鉋，異形石器				
					古 代	焼土跡，道跡	土師器，須恵器				
					縄文時代早期から古代までの遺跡である。古墳時代の地下式横穴墓が 92 基発見され，円形周溝を伴う例も初めて確認されている。立小野堀遺跡や下堀遺跡等と類似性が想定され，高塚墳と共存する志布志湾沿岸部の地下式横穴墓との比較が可能になり，大隅半島の古墳時代像解明に必須の遺跡である。このほか，縄文時代後期の竪穴建物跡から，榎原文を施す完全な石刀が出土している。						
19	牧山	鹿屋市串良町 細山田 台地縁辺部 標高約 110m	H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 H 28 年度 H 29 年度 終了	H 28 年度 (A地点 1) 終了 H 30 年度 (A地点 2， B，C，D 地点) 作業中	旧 石 器	—	剥片				
					縄文早期	竪穴住居跡，連穴土坑，土坑， 集石構，石器製作跡	吉田式，石坂式，下剥峯式，辻タイプ，桑ノ丸式，押型文，石鏃， 石匙，スクレイパー，磨石，剥片，チップ				
					縄文前期	埋設土器（轟式）	轟式，条痕文				
					縄文後期	土坑，落とし穴状遺構， 埋設土器，石器集中部	市来式，丸尾式，西平式，太郎迫式，三万田式，中岳Ⅱ式， 打製・磨製石斧，磨石，剥片，石核，台石，石冠				
					縄文晩期	—	入佐式，刻目突帯文				
					弥生中期	竪穴住居跡，掘立柱建物跡， 土坑	山ノロ式，打製・磨製石斧，磨製・打製石鏃，磨石，敲石，石皿， 青銅鑿				
					中・近世	古道跡	青磁，白磁，薩摩焼				
					旧石器時代から中世にかけての遺跡である。特に，縄文時代後期の建物跡を構成していた可能性のある柱穴群が環状に発見されており注目される。また，同時期のものと考えられる複数の埋設土器と石冠が 1 点出土している。						
20	田原迫ノ上	鹿屋市串良町 細山田 台地縁辺部 標高約 120m	H 22 年度 H 23 年度 H 24 年度 H 25 年度 H 26 年度 H 28 年度 H 30 年度 終了 ※H 22 ～ 24 は 県埋文センター 調査	H 26 年度 (1) 終了 H 27 年度 H 28 年度 (2) 終了 H 30 年度 (3) 作業中 ※H 23 ～ 24 は 県埋文センター 作業	縄文早期	竪穴住居跡，連穴土坑，集石， 落とし穴，土坑，石器製作跡	前平式，吉田式，倉園 B 式，石坂式，下剥峯式，辻タイプ， 桑ノ丸式，中原式，押型文，手向山式，平楕式，塞ノ神式， 石槍，石鏃，石匙，磨石，敲石，石皿，打製石斧				
					縄文後期	落とし穴，礫集積	指宿式，市来式，石鏃，磨石				
					縄文晩期	—	黒川式				
					弥生中期	竪穴住居跡，大型建物跡， 掘立柱建物跡，円形・方形 周溝，土坑	山ノロ式・中溝式，擬凹線文系壺，土製勾玉，鉄器，磨製石鏃， 石匙，砥石，敲石，台石				
					古墳時代以降	溝状遺構，畝状遺構	土師器碗，薩摩焼				
					縄文時代早期から弥生時代中期を中心とした遺跡である。弥生時代中期では，ベッド状遺構を伴う方形・円形の大型竪穴住居跡，棟持柱をもつ掘立柱建物跡 2 棟を含む建物跡群，柱穴列や円形・方形の周溝などが検出されており，大隅半島中央部における当該期の集落の様相を知る上で貴重な遺跡である。このほか，縄文時代早期の竪穴住居跡，連穴土坑などの遺構が多数発見されていることも注目される。						
					21	立小野堀	鹿屋市串良町 細山田 台地縁辺部 標高約 125m	H 22 年度 H 23 年度 H 24 年度 H 26 年度 H 27 年度 H 28 年度 (1) 終了 H 30 年度 (2) 作業中 ※H 24 は県埋文 センター作業	H 24 年度 H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 H 28 年度 (1) 終了 H 30 年度 (2) 作業中 ※H 24 は県埋文 センター作業	縄文前・中期	—
縄文後期	—	指宿式，市来式，西平式									
弥生中期	—	山ノロ式									
古 墳	地下式横穴墓，土坑墓， 溝状遺構	成川式，須恵器，鉄器(刀・剣・槍・鉾・刀子・鏃等)，青銅鈴， 人骨									
時期不詳	溝状遺構	—									
縄文時代前期から古墳時代までの遺跡である。特筆すべきは，古墳時代の地下式横穴墓が 190 基発見されたことである。玄室内には鉄鏃や鉄剣等の鉄器，青銅製鈴等の副葬品と人骨が多数残っていたほか，墓周辺から多量の土器や須恵器が出土した。青銅製鈴をはじめ，多種多様な副葬品を伴った地下式横穴墓群の発見は，南九州の古墳時代墓制の様相全体を解明していく上で貴重な資料である。											
22	十三塚	鹿屋市串良町 細山田 台地上 標高約 140m	H 20 年度 H 21 年度 終了 ※県埋文セン ター調査	H 22 年度 終了 ※県埋文セン ター作業	縄文早期	—	石坂式				
					縄文後期	—	凹線文，市来式，三万田式				
					縄文晩期	—	黒川式				
					弥生中期	竪穴住居跡，掘立柱建物跡， 土坑	山ノロ式，土製勾玉，打製・磨製石鏃，棒状敲具，鉄鏃				
					古墳時代	—	成川式				
					中世～近世	道路状遺構	洪武通寶（加治木銭）				
					弥生時代中期を中心とする遺跡である。花卉形・方形・円形を呈する竪穴住居跡が発見された。出土遺物等から，王子遺跡や前畑遺跡等と同時期の集落跡と考えられる。また，集石が竪穴住居跡内から発見されている。7 号住居跡の埋土内から，松木園遺跡や永吉天神段遺跡から出土した鉄鏃と類似する無茎の鉄鏃が出土した。						
23	石楨	鹿屋市串良町 細山田 台地上 標高約 140m	H 20 年度 H 21 年度 終了 ※県埋文セン ター調査	H 22 年度 終了 ※県埋文セン ター作業	縄文早期	集石，土坑	岩本式，前平式，志風頭式，石坂式，平楕式，貝殻条痕文， 鎌石橋式，轟 A 式，打製石鏃，磨石，敲石				
					弥生中期	—	山ノロ式，須玖式土器				
					縄文時代早期前半から早期末を中心とする遺跡である。鎌石橋式土器 1 個体と轟 A 式土器が 2 個体出土し，両型式が同時期に存在した可能性を示唆する遺跡である。						



第2図 東九州自動車道関連遺跡 (志布志 I C～鹿屋串良 J C T 間) 遺跡位置図 (1 : 80, 000)

※本発掘調査を実施した遺跡のみ記載。地図中の番号は表2の番号と一致する。

第Ⅲ章 調査の方法

第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理報告書作成作業について簡潔に述べる。

1 発掘調査の方法

発掘調査は、表面積 2,705 m²を対象として行った。

Ⅱ層中から時期不詳の溝状遺構、Ⅳa層で縄文時代中期の土坑を検出し、慎重に調査を実施した。

また、少量ずつではあるが、Ⅱ、Ⅳa、Ⅶa、Ⅶb、Ⅷb、Ⅸ、Ⅹ、Ⅺa、Ⅺb層の9つの層から遺構を検出した。

本発掘調査の延べ面積は、Ⅱ層とⅣa層、Ⅶa層・Ⅶb層、Ⅷb層からⅪb層までを一つのまとまりとし、それぞれ 900 m²、2,100 m²、2,500 m²の計 5,500 m²であった。

本遺跡の調査区割り（グリッド）は、平成 25 年度に県立埋文センターが調査した際のものを準用し、X = 167230、Y = 8140（世界測地系）を基点に、磁北に合わせて 10 m 単位で設定し、北から南に 1、2、3、…、東から西に A、B、C、… 区とした。

また、用地境界等では安全上の措置として平均で 1 m 程度内側に控えて調査を実施した。

主な調査方法は、重機による表土除去の後、遺物包含層について人力で掘り下げを実施した。出土した遺物は、トータルステーションを用いて取り上げを行い、遺構は検出の都度、写真撮影、移植ごて等による掘り下げ、実測を完掘まで繰り返し行った。なお、Ⅱ層の遺構の平面図はトータルステーションでの実測を行い、断面図は 1/20 で実測した。Ⅳa層の遺構図の縮尺は 1/10 で記録している。

地形測量は、Ⅱ・Ⅳa層の遺構調査ではⅣb層上面で、Ⅶ層の調査ではⅧa層上面で、Ⅸ層以下の調査についてはⅨ層上面でトータルステーションを用いて行った。

また、無遺物層であるⅤ層・Ⅷa層については、重機による掘削を行った。

2 遺構の認定と検出方法について

本遺跡で検出された遺構の認定と検出方法については、以下のとおりである。

(1) 遺構の認定・分類・時期判断

本報告書掲載の遺構は、検出面、埋土の状況・色調、規模等を基に検討し、認定及び時期判断を行ったものである。

Ⅱ層の遺構検出については、土色や火山灰等を基に判断した。時期については、火山灰や出土遺物を基に検討したが、時期の明確な特定には至らなかった。

Ⅳa層の遺構についても埋土の色調や火山灰等を基に検出し、時期については、火山灰を基に認定した。

(2) 遺構の検出方法

遺構は包含層掘削の際に土色及び遺物の出土状況、火山灰などを慎重に観察し、必要に応じて遺構精査を行い、当時の地表面に限りなく近い位置での検出に努めたが、層を欠失している箇所が多く、数基についてのみ当時の地表面を特定し検出することができた。

3 整理報告書作成作業の方法

平成28年度

発掘調査と並行して、出土遺物の水洗い・注記作業を実施し、終了した。

遺物注記は、県立埋文センターと協議し、当調査センター調査分については遺跡名を「ミカ」としている。

合わせて、実測図等の基礎的な整理等も終了している。

平成30年度

整理報告書作成作業を実施した。

遺物の接合作業から始め、遺物実測、遺構・遺物実測図トレース、レイアウト、遺物写真撮影、原稿執筆等を行い、県センターの定める方法で遺物・図面・写真の整理を行った。

土器等については、形態的特徴や施文等から分類し、石器については形態的特徴や使用痕等から分類して掲載した。

第2節 層序

1 見帰遺跡の層序

層序は、確認調査及び平成 25 年度の県立埋文センターによって示された層序に準じて、今年度の成果を加えた。

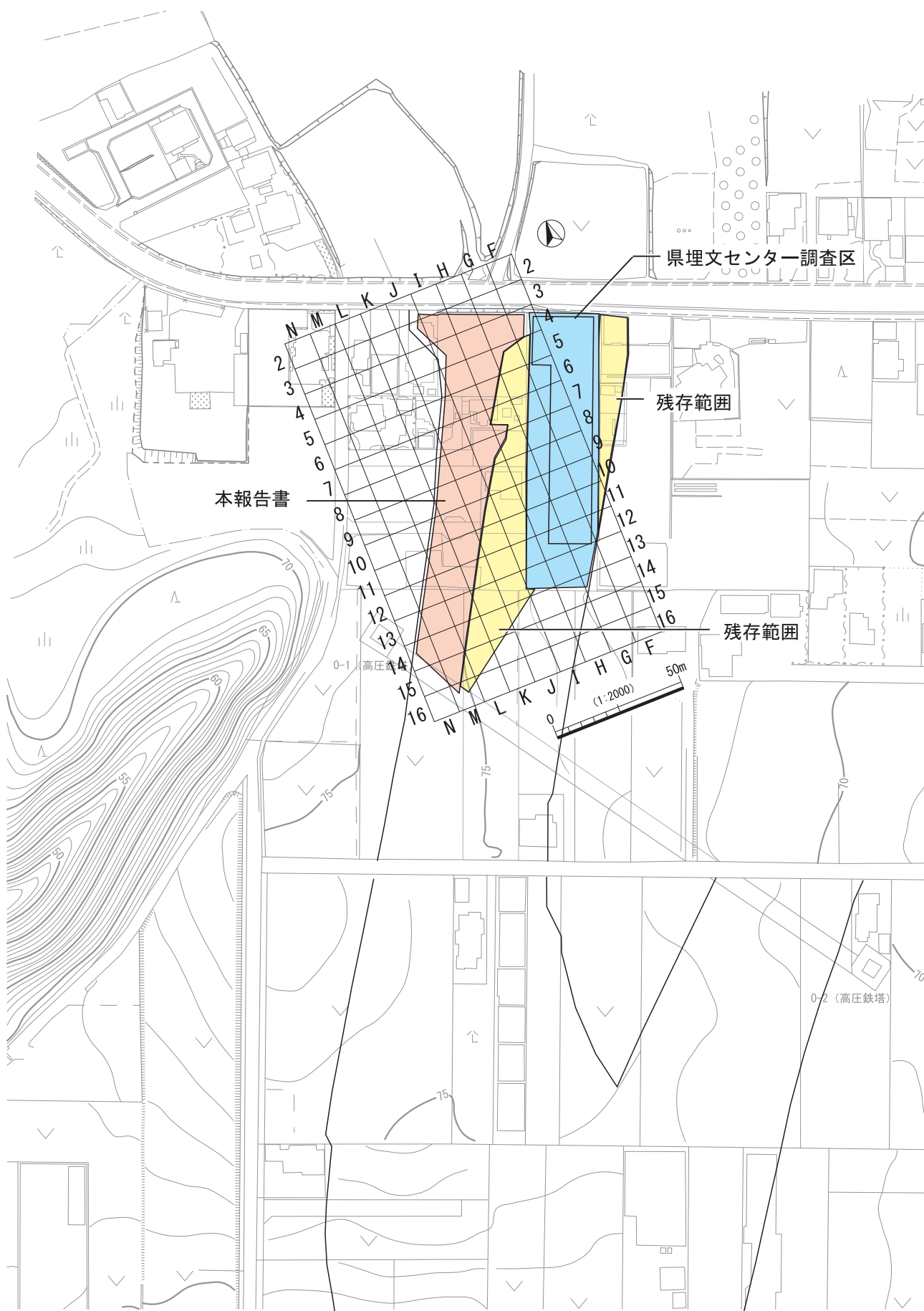
具体的には、サツマ火山灰層であるⅧa層を遺構精査、地形測量等の関係から、Ⅶb層からⅧa層が漸移する部分をⅧa層上とし、サツマ火山灰層をⅧa層下とした。

結果、縄文時代早期の遺構等はなかったが、土層断面図にⅧa層下（サツマ火山灰）を図示した。

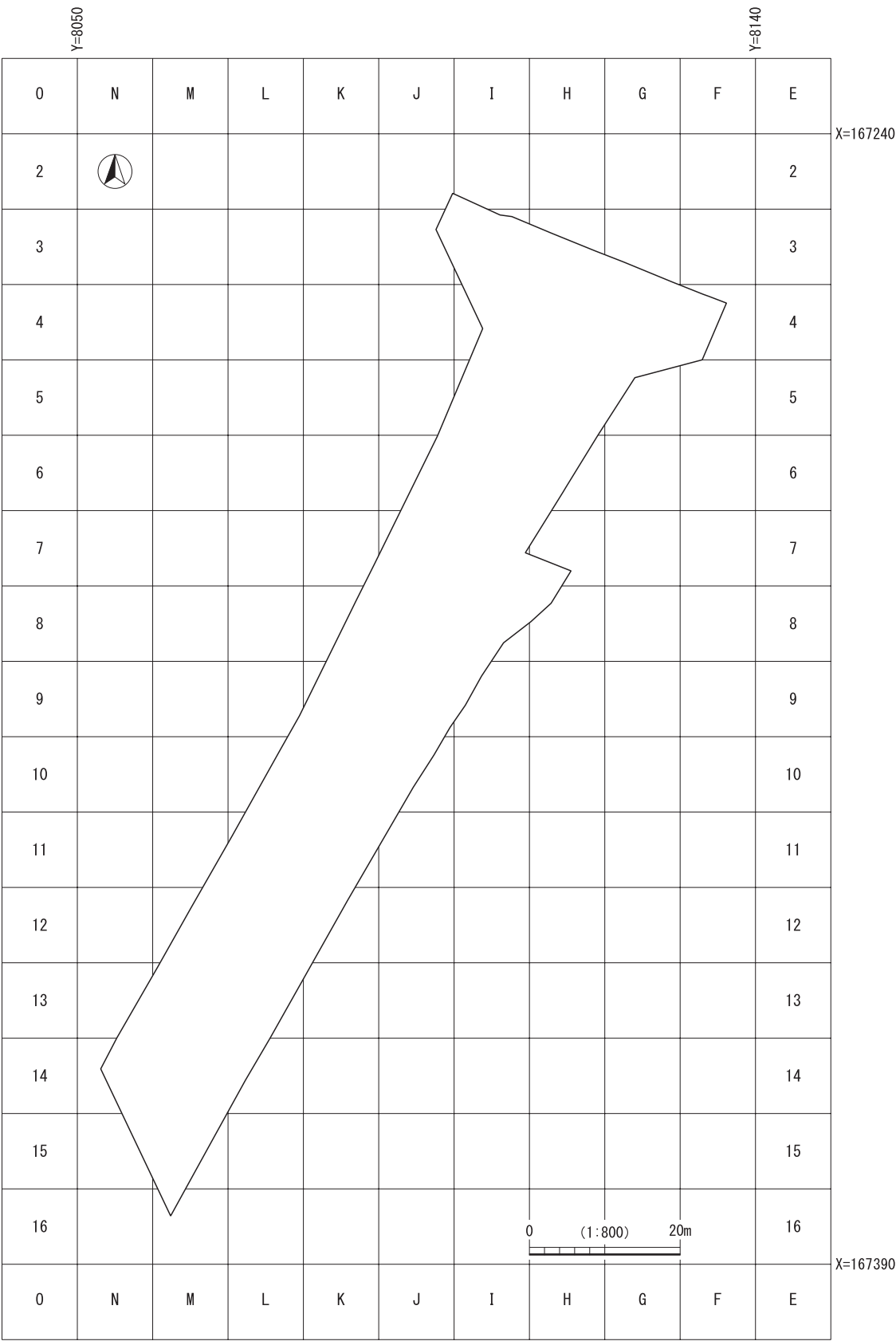
今回調査を行った範囲の地形は、調査区全体を通して東側が高く西側へ下る傾斜地であった。また、平成 25 年度に県立埋文センターが調査を行った箇所は西側が高く、東側へ下る地形であることから、今回の調査区と平成 25 年度の調査区の間緑地帯となる箇所が尾根筋となるようである。

また、調査区内には2つの谷が入っており、旧石器時代から徐々に谷が埋まっていき、Ⅱ層で検出した近代以降と考がえられる溝状遺構の検出状態から、近代には谷地形がほぼなくなり、凹凸の少ない西側が下がる傾斜面となっていたと推察される。

地層は、調査区の東側半分が現代の耕作のための地下げにより削平され、多くを欠失した状況であった。残存



第3図 周辺地形・本調査範囲及び遺跡の残存範囲図



第 4 図 グリッド配置図

部分の東側では表土下は旧石器時代の包含層であり、西側では良好に残存している状況であった。

また、調査期間を通じて降雨後の水はけが非常に良かった。この原因として、調査区全体が傾斜地であることから旧石器時代から近年まで雨水により土砂がよく流れたため、各層の粒状性・空隙率が大きく、粘性・含水率が低いことによる可能性がある。

2 志布志ⅠC～鹿屋串良JCTの層序について

見帰遺跡の層序については、1で述べたが、写真図版2の下段に見帰遺跡の谷部の一番低くなる箇所での地層観察を行ったところ、Ⅷb層、Ⅸ層、Ⅹ層が厚く、Ⅸ層とⅩ層はさらに細分できることが分かった。

この箇所の地層と鹿屋市細山田地区の遺跡の基本層序と比べると、鹿屋市細山田周辺ではアカホヤ火山灰よりも上位の御池火山灰が欠落する。対して池田降下軽石・池田火山灰は鹿屋市細山田周辺のほうが残りが良い。

アカホヤ火山灰からサツマ火山灰までは大きな差はない。(ただし科学的なテフラ分析によらず肉眼観察によるものである。)

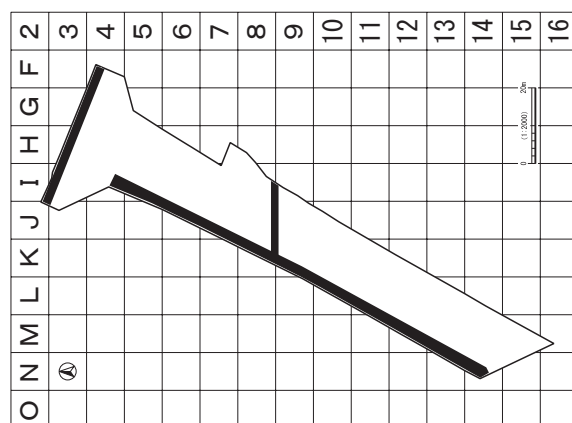
サツマ火山灰の下部はどちらも黒褐色から茶褐色の硬質土で差はないが、鹿屋市細山田周辺はごく薄い堆積である。

サツマ火山灰よりも下位については、鹿屋市細山田周

辺のほうがP17からP15に比定出来る火山灰の残りがよい。

また、大別すると薄色土と濃色土の繰り返し、シラスの上位に見帰遺跡のⅪb層と鹿屋市細山田所在する小牧遺跡のⅫb層に灰褐色の硬質ブロック土がみられることが共通する。

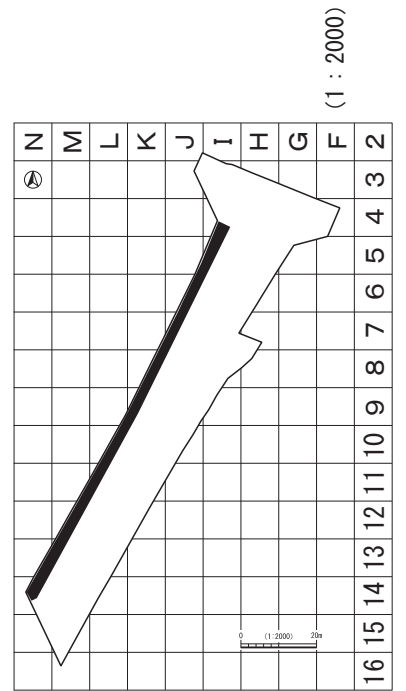
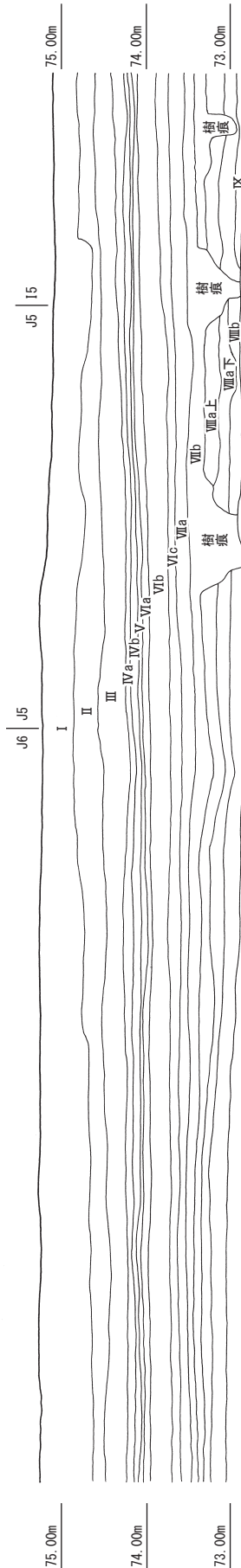
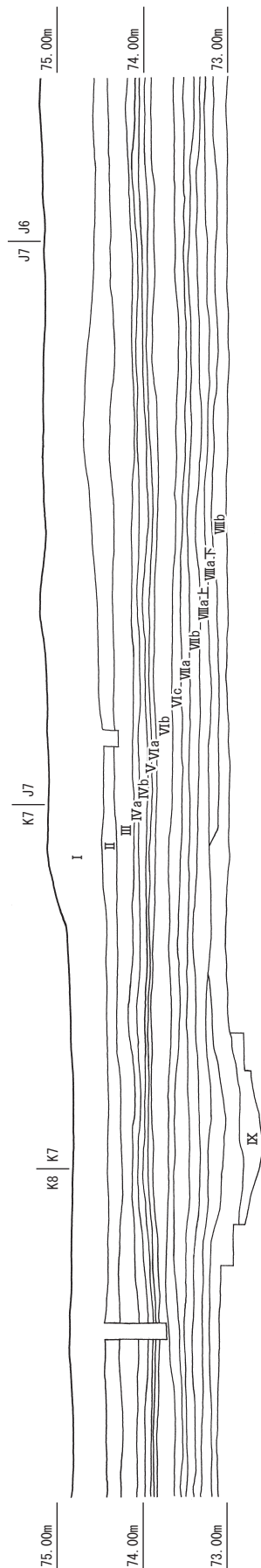
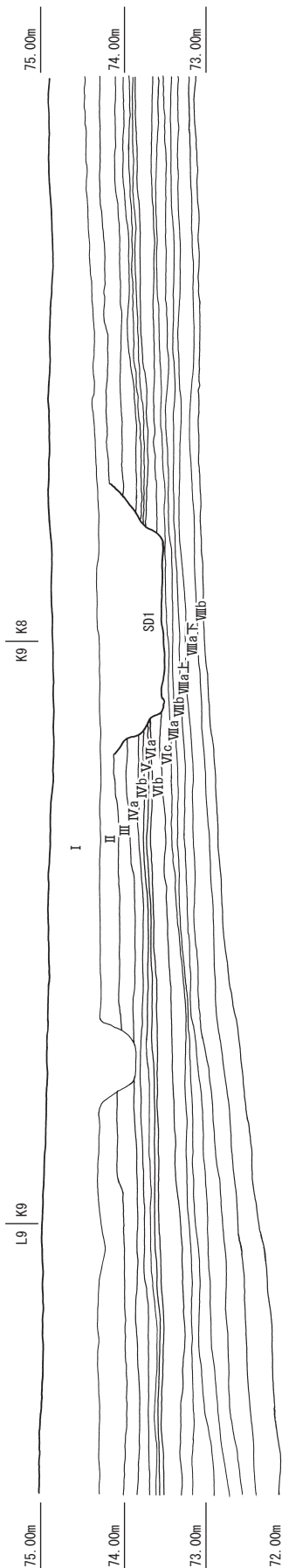
このことから、基本的には「志布志」と「鹿屋市細山田周辺」では層位に大きな差はなく、火山灰の到達と層堆積厚（自然環境における残存度）の差があるのみであると考え、火山灰降下を除く自然環境に大きな差があると認められない。



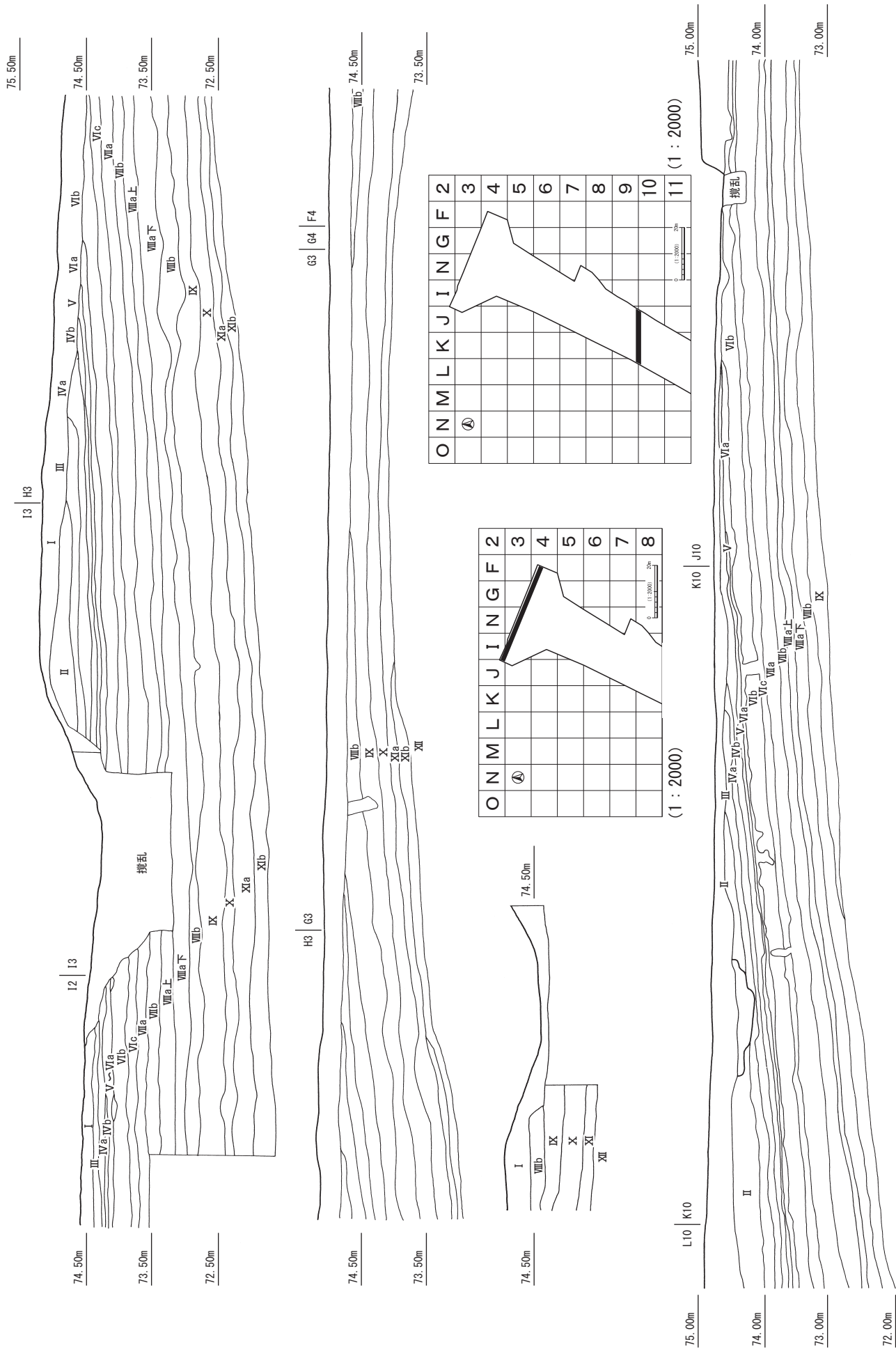
第5図 土層断面図作成位置図 (1:2000)

表3 見帰遺跡基本層序

層	色 調 ・ 特 徴	時 代	平均層厚 (cm)
I	表土		50
II	黒色土	縄文時代後期	15
III	黒褐色土 (御池火山灰を含む)		15
IV a	黒色土	縄文時代中期	10
IV b	軽石混じり黒色土 (径1cm程度の池田降下軽石含む)		10
V	茶褐色土		5
VI a	黄橙色腐植土 (アカホヤ火山灰腐植土)		15
VI b	黄橙色砂質土 (アカホヤ火山灰)		10
VI c	黄橙色パミス (アカホヤ軽石)		10
VII a	黒色土	縄文時代早期	20
VII b	黒褐色硬質土	縄文時代早期	20
VIII	明黄褐色土 (薩摩火山灰) VIII a 層上: サツマ火山灰腐植土 VIII b 層下: サツマ火山灰		30
VIII b	茶褐色硬質土	縄文時代草創期	10
IX	褐色粘質土	細石刃文化期	20
X	暗褐色硬質土	細石刃文化期	15
XI a	黄褐色土	ナイフ形石器文化期	20
XI b	黄褐色土 (硬質ブロック土含む)	ナイフ形石器文化期	15
XII	黄褐色軽石混じり砂質土 (シラス上部)		—



第7图 土层断面 (2) (1:80)



第 8 図 土層断面 (3) (1 : 80)

第Ⅳ章 発掘調査の成果

第1節 旧石器時代の調査

旧石器時代の調査は、調査区東側半分において現代の耕作の地下げにより層を欠失していたが、層序が残存する箇所各層から少量ずつの遺物の出土があった。

1 遺構

Ⅸ層でJ-8区の平坦面に礫が集中して散布する箇所が1箇所みられた。出土した礫には被熱痕があるものと破碎しているものがあつたことから、礫群が雨水等により崩壊し、原位置を保っていないものと判断した。なお、礫同士が接合した例はなかった。その他、Ⅸ層からⅪb層の各層から被熱痕のある礫が出土したが、少量が接合したのみであつた。黒曜石の剥片も少量出土したが、ブロック等を形成することはなかった。礫集中箇所と同じく雨水等により崩壊し、原位置を保っていないものと判断した。

2 遺物（石器）（第9図1～18）

調査区の東側から少量の出土があつた。細石刃・ナイフ形石器等は全点を図化した。その他の磨石・叩石・台石については、明確に石器と判断できるものを全点図化している。また、出土した礫は石器を含め全て珪質の強くない砂岩である。

(1) ナイフ形石器文化期（第9図1～4）

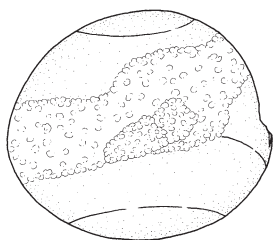
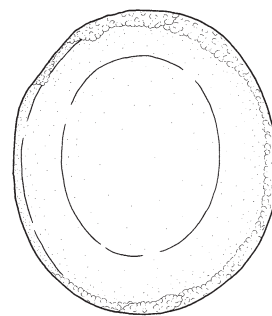
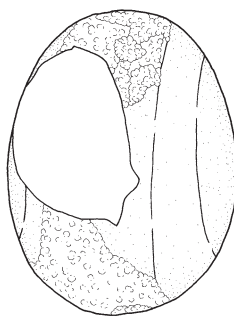
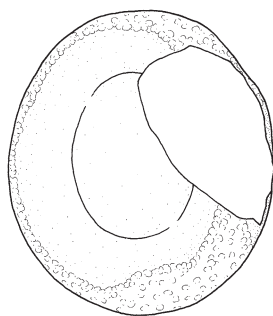
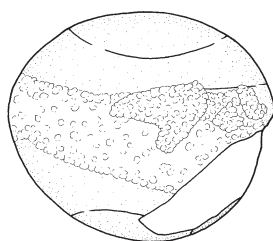
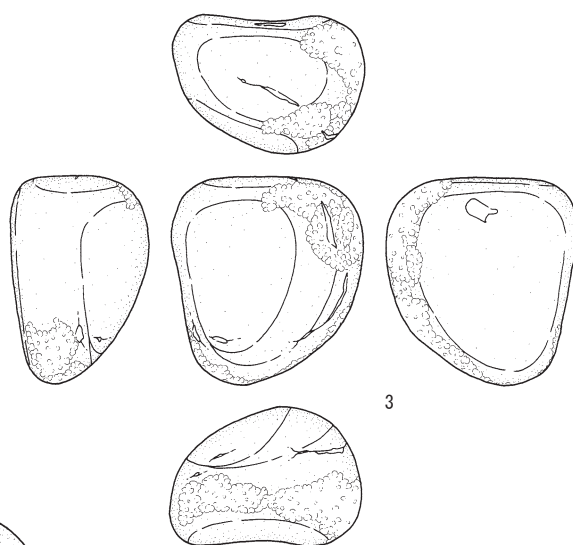
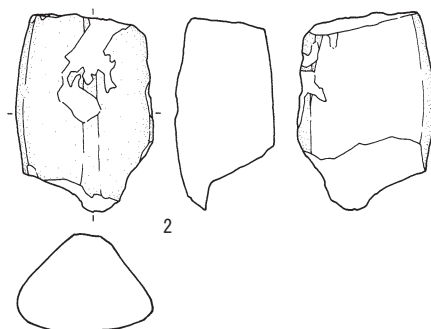
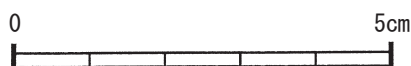
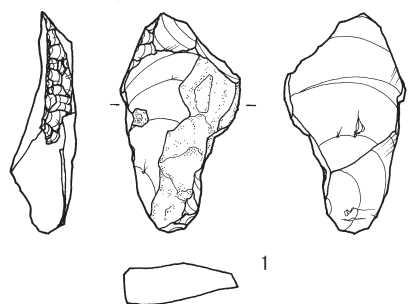
Ⅺa・Ⅺb層から出土した。器種はナイフ形石器と磨石・叩石である。

ナイフ形石器（第9図1）

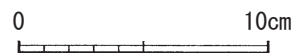
Ⅺa層から黒曜石製のナイフ形石器が1点出土した。背面に自然面を残す不定形剥片を素材としている。基部から背面右側縁と背面左側縁の中位から刃部にかけてブランディング加工が施されており、背面左側縁の中位から基部にかけては加工が施されていない。

磨石（第9図2）

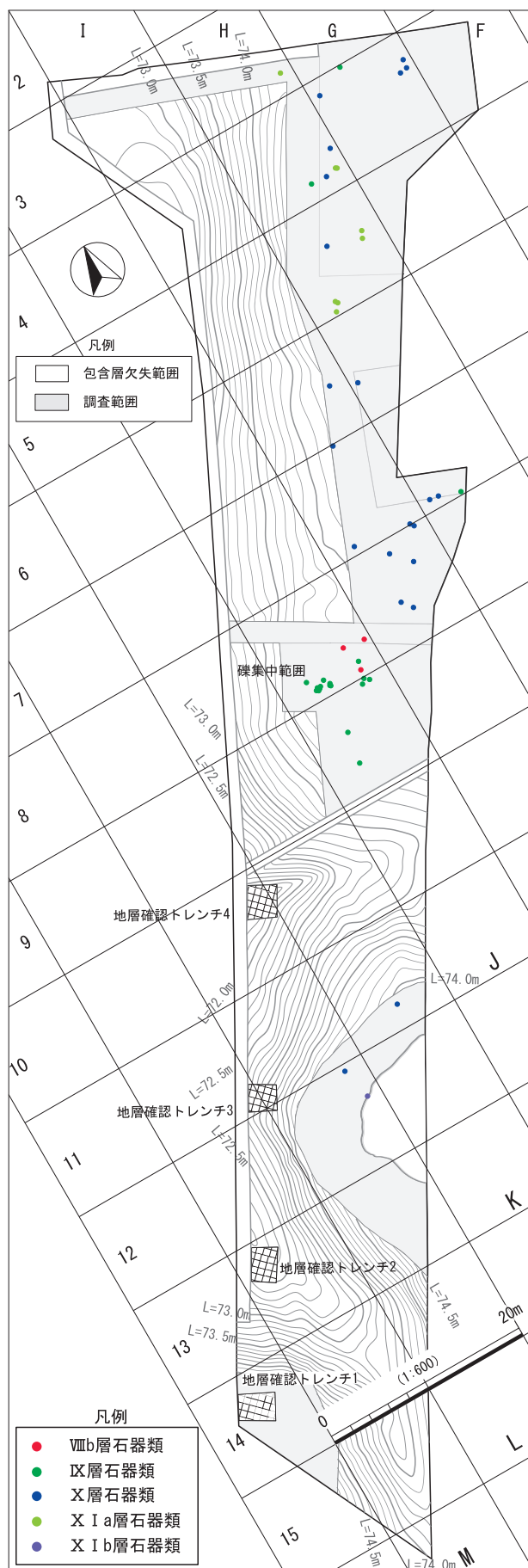
明瞭な磨痕を残し磨石と認めること



4



第9図 旧石器時代出土石器（1）



第 10 図 旧石器時代遺物出土状況

ができる石器の出土は 1 点であった。

2 は横断面が三角形を呈する砂岩礫を素材としている。上部と下部が欠損しているため三角柱状に残存しているが、全体の形状は不明である。敲打痕は認められない。三角柱状の一番広い面を磨面とし、良く磨られている。

叩石 (第 9 図 3・4)

明確な敲打痕を残し叩石と認めることができる石器の出土は 2 点であった。その他、円礫が数点出土している。

3 は不定形な円礫を素材としている。正面右側縁上端部、左側縁下端部及び下端部、裏面左側縁部で礫の稜線を超えてよく敲打している。

4 は一部を欠損しているが、残存している礫の側縁全周でよく敲打し、割口に敲打が認められないことから、欠損部でも敲打していると考えられる、このことから、欠損部は使用時または使用後の欠損であり、素材礫は略球形状を呈していたと考える。

また、敲打痕は幅広く残っており、特に正面右側は正面側でよく敲打し、強く敲打した箇所が数箇所認められる。

(2) 細石刃文化期 (第 11・12 図 5～18)

IX 層、X 層から少量の遺物が出土した。器種は、細石刃、加工痕・使用痕のある剥片及び磨石・叩石である。

細石刃 (第 11 図 5・6)

X 層・IX 層ともに 1 点ずつ出土した。

5 は X 層からの出土である。チャート素材とする。

細石刃剥離の剥片の頭部と尾部を切断し中位を利用した細石刃である。

6 は IX 層からの出土である。黒曜石を素材とする。

長さ 1.12 cm と短い、細石刃剥離の頭部から尾部まですべてを利用した細石刃である。裏面右側縁下部には微細剥離が認められる。

加工痕・使用痕剥片 (第 11 図 7・8)

X 層・IX 層ともに 1 点ずつ出土した。

7 は IX 層から出土した使用痕のある剥片である。黒曜石を素材とする調整剥片で平坦面から剥出し、裏面左側面に使用による小さな剥離が認められる。正面左側縁には自然面が湾曲して残り、正面全体に複数の剥離面があり、頭部には小さな剥離がある。

8 は X 層から出土した加工痕のある剥片である。黒曜石を素材とする調整剥片で正面頭部に自然面を残し、正面右側面に小さな剥離が認められる。また、正面全体に複数の剥離面があり、左側下部を欠損している。

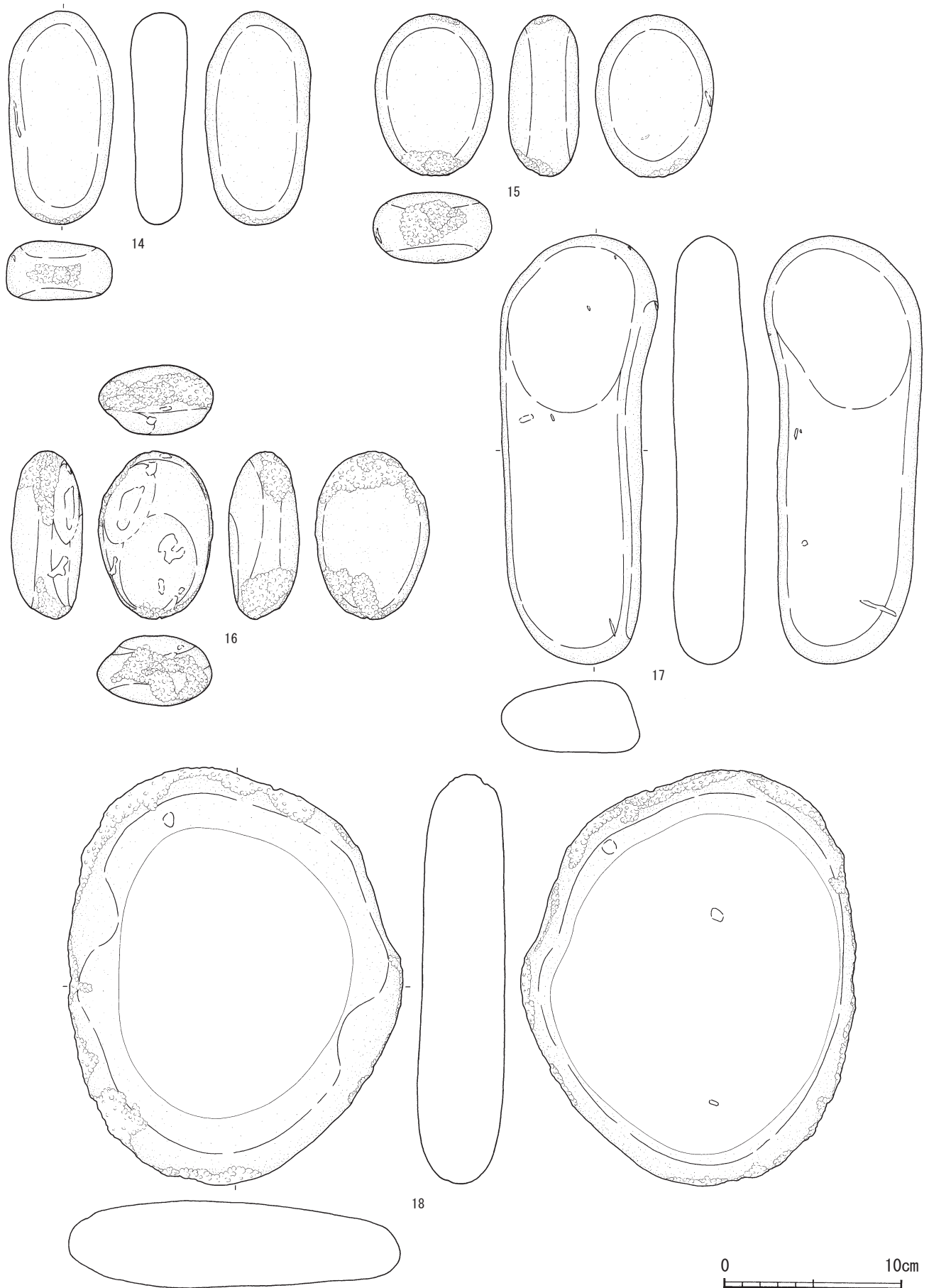
磨石 (第 11 図 9)

明瞭な磨痕を残し磨石と認めることができる石器の出土は 1 点であった。

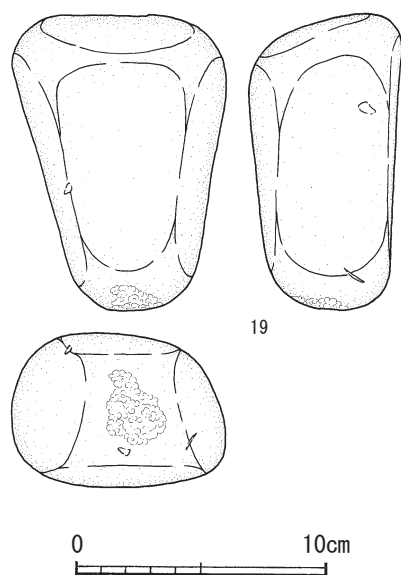
9 は磨石・叩石である。X 層から出土した。縦断面・横断面ともに三角形を呈する砂岩を素材とする。磨痕は平坦面となる裏面のみに認められる。下部と正面右側縁中位から下位に敲打痕が認められる。側縁の敲打痕は



第 11 图 旧石器时代出土石器（2）



第12図 旧石器時代出土石器（3）



第 13 図 縄文時代草創期出土石器

腹面側に寄り、よく敲打している。下部の敲打痕は、礫が窪む程強く行われている。右側縁下部は欠損部があるが、割口に敲打痕跡が認められないため、敲打により剥離が生じたものと考えられる。

叩石（第11・12図10～16）

明瞭な敲打痕を残し叩石と認めることができる石器のみを図化した。他にも磨石・叩石としなかった砂岩の円礫が数点出土している。

10～12は砂岩の円礫を素材としている。礫の側縁全面で礫の稜線を越えてよく敲打し、一部に強く敲打した箇所がある。

13～16は平面長楕円形の砂岩の礫を素材とし、上部と下部のみで敲打しているものである。

14は下部端のみで敲打している。

13・15・16は上下端部で敲打している。特に15の下部端部と16の上下端部は、礫の稜線を越えて強く敲打している。

台石（第12図17・18）

平坦面に磨痕があり長さ20cmを超える扁平な石器を台石として分類した。

17は平面長楕円形の扁平な砂岩を素材とする。正面・裏面ともに磨痕を認め、両面上部には直径9cm程度の良く磨っている箇所がある。

18は略円形の扁平な砂岩を素材とする。正面・裏面ともに磨痕を認め、一部を除く側縁には敲打痕が残る。

第2節 縄文時代草創期の調査

サツマ火山灰層下位のⅧb層からの出土品については、縄文時代草創期の所産として取り扱った。

遺構は検出されず、黒曜石の剥片が数点と19及び数点の礫が出土したのみである。

叩石（第13図19）

平面台形状の砂岩を素材とする。下端部に直径3cmほどの範囲に敲打痕が残る、よく敲打している。

表 4 旧石器時代・縄文時代草創期石器観察表

挿図 番号	レイアウト 番号	器種	出土区	層位	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
9	1	ナイフ	H3	XIa	黒曜石	2.92	1.57	0.55	2.42	1109	
9	2	磨石	H5	XI	砂岩	7.78	5.40	3.95	179	1098	
9	3	叩石	H5	XI	砂岩	8.15	7.60	5.45	395	1093	
9	4	叩石	L12	XIb	砂岩	12.82	10.41	9.05	1185	1078	
11	5	細石刃	G4	X	チャート	1.07	0.74	0.17	0.18	385	乳白色 半透明に黒スジ
11	6	細石刃	H4	IX	黒曜石	1.12	0.62	0.13	0.10	1099	灰褐色のスジ、黒地
11	7	剥片	J9	IX	黒曜石	4.50	2.90	1.38	13.10	1110	
11	8	剥片	I8	X	黒曜石	2.00	1.52	0.39	0.99	1079	
11	9	磨石	G4	X	砂岩	11.28	7.92	3.17	358	1107	
11	10	叩石	H4	X	砂岩	1.06	7.32	4.80	435	1100	
11	11	叩石	I8	X	砂岩	7.22	7.73	5.72	382	1082	
11	12	叩石	H6	X	砂岩	9.02	7.80	6.45	505	1090	
11	13	叩石	I7	X	砂岩	6.27	4.65	3.90	142	1083	
12	14	叩石	J9	IX	砂岩	11.86	5.88	3.20	363	1115	
12	15	叩石	J9	IX	砂岩	8.93	6.11	3.95	312	1113	
12	16	叩石	J9	IX	砂岩	9.30	6.36	3.88	283	1114	
12	17	台石	I8	X	砂岩	23.80	8.76	4.15	1249	1134	
12	18	台石	G4	X	砂岩	23.21	18.60	4.80	2800	1106	
12	19	叩石	J8	VIIIb	砂岩	11.60	8.48	6.02	793	1116	縄文時代草創期

第3節 縄文時代早期の調査

縄文時代早期の調査は、Ⅶa層・Ⅶb層を対象として調査を実施した。

1 遺構

遺構は検出されず、土器や石器が出土したのみであった。

M-12区の傾斜面の一部に被熱破砕礫が集中して散布する箇所が1箇所みられた。集石遺構が雨水等により崩壊し斜面に流れたものと判断し礫の取り上げを行った。

2 遺物

(1) 土器 (第15図20～26)

出土量は多くはなかったが、形態的特徴からⅠ類からⅢ類に分類した。大きく接合するものはなく、径を復元できるものはなかった。

Ⅰ類 (第15図20～22)

口唇部・口縁部に横位の貝殻刺突を巡らし、貝殻条痕・ケズリで器面調整しているものをⅠ類とし、3点を図化した。出土量が少なく、接合するものはなかった。

石坂式土器と考えられるものである。

20は口縁部である。口唇端部を平坦に仕上げ、ナデにより調整した後、外面・口唇部に貝殻刺突を施している。

21・22は胴部である。21は口縁部に近い箇所、22は底部付近と考える。植物を押し当てた箇所が2箇所あるが、胎土中にも植物質の圧痕が若干みられるため、文様であるか不明である。また、胎土には金雲母が多量に含まれている。

器面調整は、21が外面・内面ともに貝殻条痕をよく残しており、22は外面が深い貝殻条痕、内面がケズリで調整されている。

Ⅱ類 (第15図23・24)

外面に横位・斜位の貝殻刺突を連続して施しているものをⅡ類とした。

下剥峯式土器と考えられるものである。出土量が少なく、接合するものはなかったため、2点のみ図化した。

23・24ともに外面・内面ともにナデで仕上げている。

底部 (第15図25)

底部は1点を図化した。底部も出土量が少なく、接合するものはなかった。

25はⅠ類またはⅡ類の底部と考える。若干上げ底となる形状で、外面に貝殻で強く調整した痕を残し、内面は指頭圧・ナデで仕上げている。底面は外周のみを丁寧にナデ調整している。

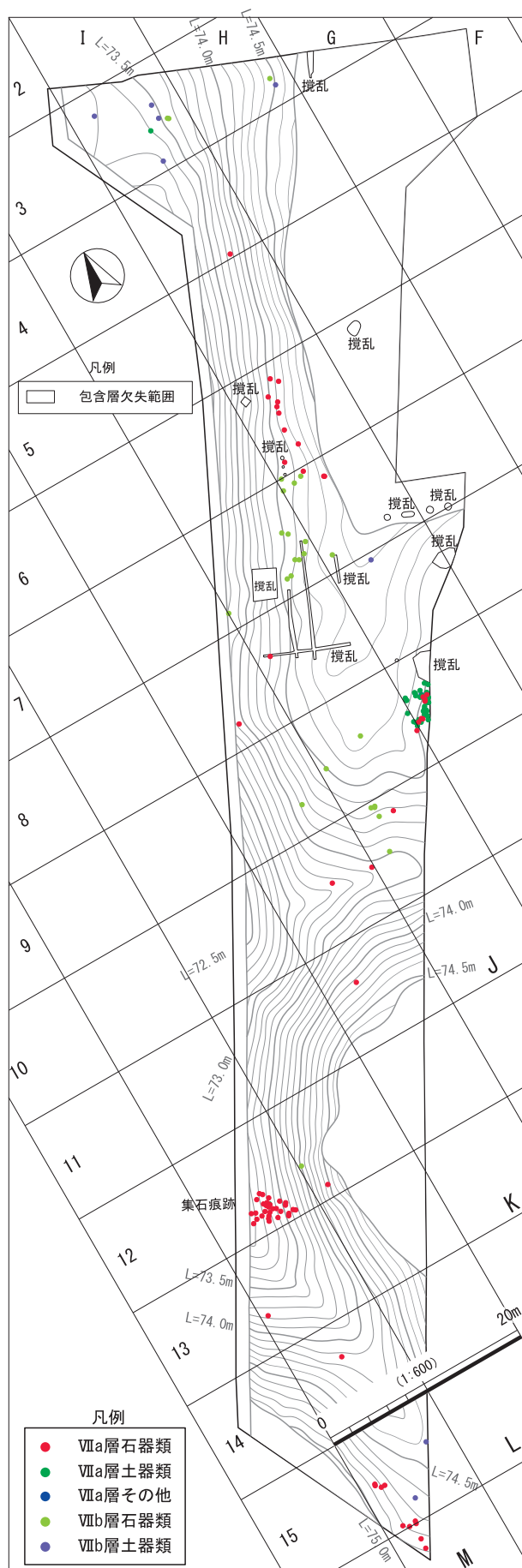
Ⅲ類 (第15図26)

外面に楕円形の押形文を施す土器である。

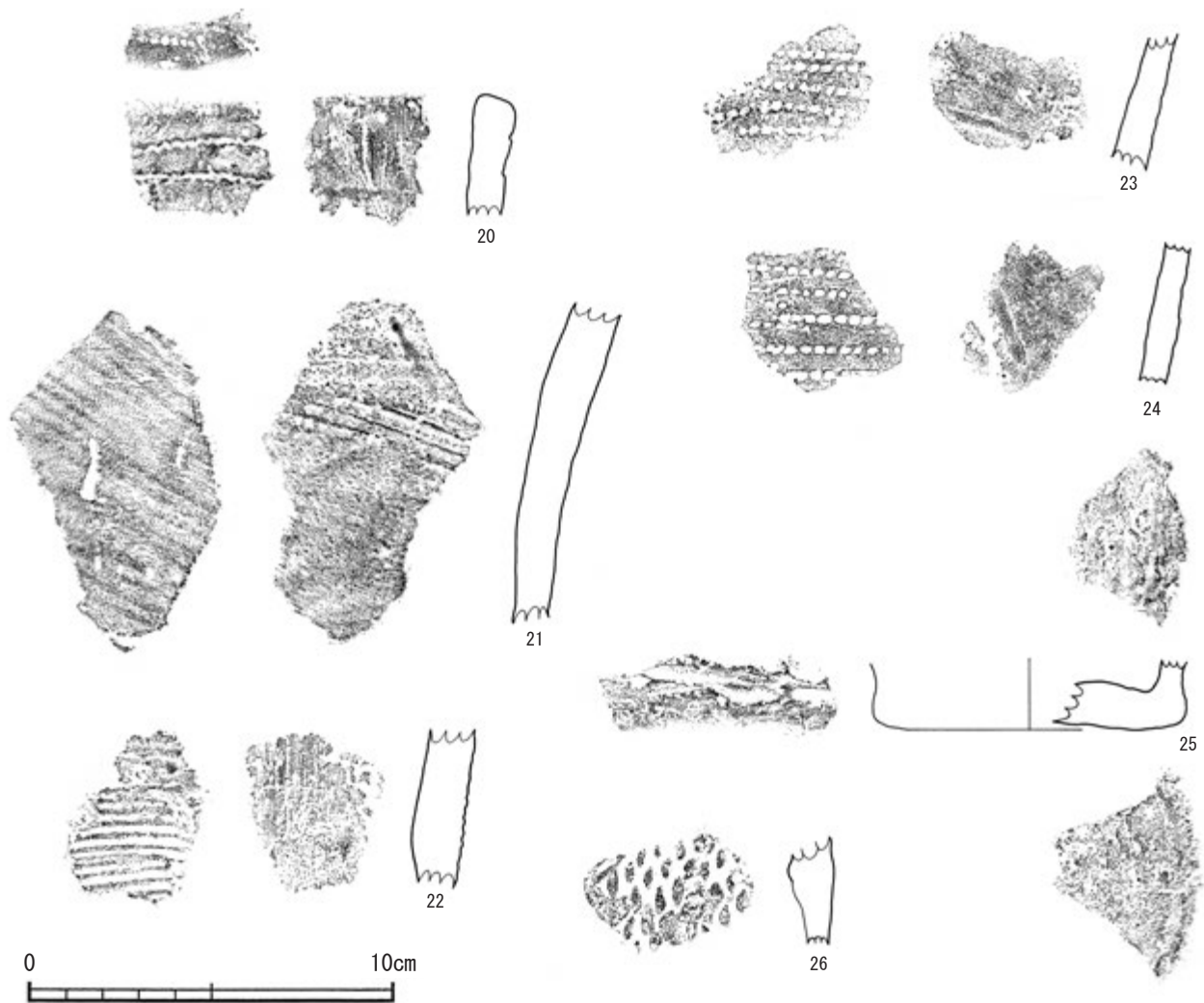
(2) 石器 (第16・17図27～43)

調査区全体から少量の出土があった。石鏃は全点を図化した。その他の石器については、選択し図化している。

器種は、石鏃・磨石・石皿・叩石・礫器・ハンマーが出土している。石鏃以外は全て砂岩である。



第14図 縄文時代早期遺物出土状況



第 15 図 縄文時代早期出土土器

石鏃 (第16図27～35)

27 ～ 35 は石鏃である。全長 1.5 cm 程度のものから 3.5 cm 程度のものまであり、形状も正三角形・二等辺三角形・返しを持つもの、基部も凹基・平基があり、数量は少ないもののバリエーションに富んでいる。

正三角形石鏃 (27～30)

27 ～ 30 は正三角形または略正三角形を呈する凹器の三角形石鏃で、全長が 1.5 cm から 1.9 cm と本報告書の縄文時代早期の石鏃の中では比較的小さいものである。

27 は側縁中位の剥離を大きくして返し状の突起を形成しているものである。基部を大きく陥入させて成形し、脚部端部を丸く成形している。

28 ～ 30 は基部を浅く、脚部端部を丸く成形している。

30 は左側の脚部端部を欠損しているが、その他がよく残存しているため、正三角形石鏃に分類した。切断面に不純物があり、その影響で成形の際に破断したものと考ええる。

二等辺三角形石鏃 (31～35)

31 は平基の石鏃である。全体に丸みを帯びており、下半部で屈曲することから五角形石鏃の可能性もある。

32 ～ 34 は、基部を大きく陥入させて抉るものである。

32 は、先端部と片側を欠損している。切断面の上位に不純物がみられ、その影響で成形の際に破断したものと考ええる。脚部の先端は丸く成形されている。

33 は基部に U 字状の抉りが入り、脚部端部を平面形で斜めに成形し、直線的に仕上げている。

34 は脚部端部を斜めに成形している。先端を欠損している。丁寧に剥離され大きく脚を張り出させて脚部端部を二叉状に成形し、返しのような突起を作出している。

35 は下部を欠損しており、全体の形状が不明である。

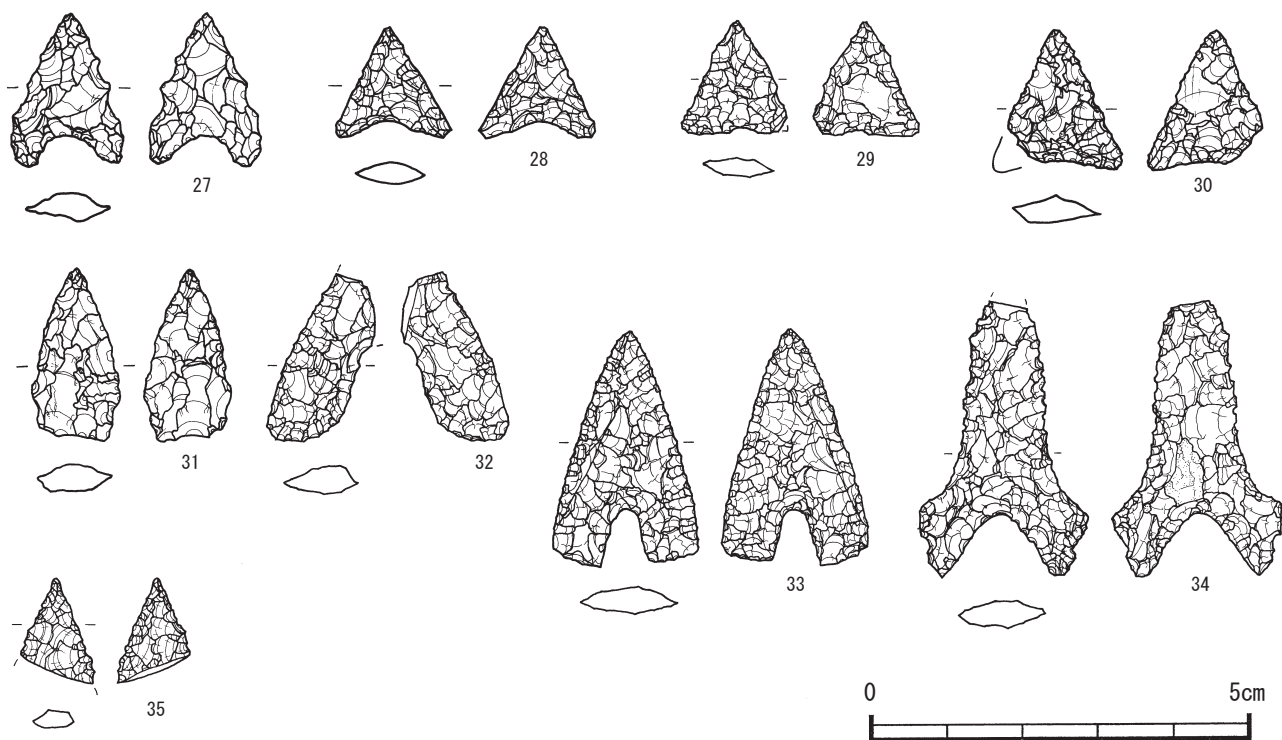
磨石 (第17図36)

大きく欠損しているものが多く、1 点を図化した。

36 は大半を欠損している。正面・裏両面ともよく磨られている。

磨叩石 (第17図37～39)

37 ～ 39 は磨叩石である。



第 16 図 縄文時代早期出土石器（1）

37 は平面形が正円形に近く、断面形が扁平な形状である。正面・裏面ともによく磨られ、側縁全周に敲打痕があり、下部の側辺中央と右側面中央には特に強い敲打痕がみられる。被熱により赤変している。

38 は扁平な平面長楕円形の礫を使用し、上部は割れて欠損している。裏面には磨痕があり、下部の先端には敲打痕が残っている。

39 は不定形な形状である。断面は隅丸三角形を呈する。山形となる正面には磨痕はなく、平坦な裏面のみに磨痕がある。また、側縁の全周に敲打痕がみられ、特に側縁の上下に強い敲打痕を残している。

叩石（第17図40）

断面が半月形の円礫の半分を叩石として利用したものである。

側縁端部の尖った箇所全周と、礫の割口で敲打時に剥離が入るほど強く敲打している。被熱により赤変している。

石皿（第17図41）

3 点が接合したものである。大きく被熱破碎し大半を欠損しているため、全体の形状は不明である。磨面は、若干くぼみ、よく磨られている。下面は、磨面に対して傾斜している。

礫器（第17図42）

扁平かつ平面不定型の礫を利用している。正面の左側は割れているが、遺跡内に搬入した時点で割れている礫を利用したのか、別の用途で利用していた礫が割れたた

め礫器に転用したのか、刃部を成形する際に割れたのか不明である。

ハンマー（第17図43）

扁平で隅丸長方形の石を利用し、側縁の角を利用して敲打している。敲打痕の残る箇所では折れが生じており、断面にも若干の敲打がみられる。折れが敲打により生じたものか、その後再利用されたかについては不明である。



第 17 図 縄文時代早期出土石器（2）

表 5 縄文時代早期土器観察表

挿図 №	レイアウト 番号	器種	類別	型式	出土区	層位	文様・器面調整等		色調		胎土						焼成	取上番号
							内面	外面	内面	外面	状態	石英	長石	顔石	礫石	他		
15	20	深鉢	I	石坂	M15	VIIb	ケズリ(縦)	ナデ・貝殻刺突	10YR4/2灰黄褐色	5YR5/6明赤褐色		○	○	○	○		良好	929
15	21	深鉢	I	石坂	I9	VIIa	ナデ	ナデ	5YR5/6明赤褐色	7.5YR4/3褐色	石粒(多)(花崗岩)	○	○	○	○	金雲母(多)	良好	1004
15	22	深鉢	I	石坂	M15	VIIb	ケズリ	貝殻条痕	5YR4/3灰褐色	5YR4/6赤褐色		○	○	○	○		やや不良	930
15	23	深鉢	II	下剥峯	I3	VIIb	ナデ	貝殻条痕	5YR4/1褐灰色	5YR4/6赤褐色		○	○	○	○	1~2mm金雲母	良好	1044
15	24	深鉢	II	下剥峯	I3	VIIb	ナデ	ナデ→貝殻刺突	7.5YR3/2黒褐色	7.5YR3/1黒褐色	石粒(少)	○	○	○	○	金雲母(少)	良好	1042
15	25	底部	—	—	J9	VIIa	ナデ・指頭痕	強い工具ナデ	2.5YR4/8赤褐色	5YR4/6赤褐色	1~5mm石粒	○	○	○	○		良好	1021
15	26	深鉢	III	楕円押型文	M12	VIIa	剥離	楕円押型文		7.5YR6/6橙色		○	○	○	○		良好	958

表 6 縄文時代早期石器観察表

挿図 番号	レイアウト 番号	器種	出土区	層位	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
16	27	石鏃	M13	VIIa	ハリ質安山岩	1.95	1.40	0.40	0.86	920	
16	28	石鏃	J9	VIIb	ハリ質安山岩	1.43	1.49	0.35	0.36	943	
16	29	石鏃	M14	VIIb	チャート	1.55	—	0.23	0.38	909	
16	30	石鏃	L12	VIIa	黒曜石	2.00	—	0.60	0.75	919	
16	31	石鏃	K9	VIIb	チャート	2.30	1.10	0.35	0.87	1023	黒orグレーのスジ太い
16	32	石鏃	K10	VIIa	チャート	2.20	—	0.38	0.95	926	白いスジ黒地
16	33	石鏃	K11	VIIa	チャート	3.15	2.04	0.35	1.82	928	
16	34	石鏃	M14	VIIa	ハリ質安山岩	3.62	2.30	0.39	1.67	921	
16	35	石鏃	J9	VIIb	黒曜石	—	—	0.29	0.25	1022	透きとおる
17	36	磨石	L12	VIIb	砂岩	7.50	10.00	5.60	506	978	
17	37	磨叩石	I9	VIIa	砂岩	9.00	8.00	4.16	452	1015	
17	38	磨叩石	J10	VIIb	砂岩	10.29	5.92	3.11	240	932	
17	39	磨叩石	I9	VIIa	砂岩	7.45	5.90	4.25	240	1011	
17	40	叩石	I9	VIIa	砂岩	16.10	9.20	6.50	1191	1012	
17	41	石皿	M15	VIIa	砂岩	—	—	—	768	933, 934, 939	
17	42	礫器	I3	VIIb	砂岩	9.53	8.11	2.75	280	1040	
17	43	ハンマー	I9	VIIa	砂岩	9.10	4.10	2.30	132	989	

第 4 節 縄文時代中期の調査

縄文時代中期は、IV a 層が包含層であるが、第Ⅲ章に記したとおり層の大半を欠失しており、遺跡の傾斜地下部にあたる西側半分の調査を行ったのみである。

IV a 層に関する土坑を 5 基検出した。

土坑 1 号は、IV a 層の掘り下げを行っている途中、IV b 層へ漸移していく段階で検出した。土坑 2・3・5 号は IV a 層が削平されていたため、それぞれ VI c 層・VII b 層中で検出したが、埋土や形状の観察から中期のものとした。土坑 4 号は IV b 層中で検出した。

平成 25 年度の県立埋文センターの調査でも当該時期の土坑を検出し、落とし穴として報告していることから、これらの土坑も落とし穴である可能性を考え、全てについて底面観察のための断割り調査を行った。その結果、いずれの土坑からも杭跡等は検出できなかった。

遺物としては、石鏃 2 点が出土したのみである。上層からの落ち込みも考えられるが、どの層に属するか判断できなかったため、出土層に従い掲載した。

1 遺構 (第 20・21 図)

土坑 1 号 (S K 1) (第 20 図)

長軸 1.65 m・短軸 1.45 m の略円形を呈する浅い皿状土坑の中心部を、長軸 1.2 m・短軸 0.85 m の長楕円形にさらに深く掘込む形状をしており、深さは約 1.1 m である。埋土中に IV b 層の池田降下軽石がみられ、VII b 層まで掘り込んでいる。断割を行ったが、杭等の痕跡はなかった。

土坑 2 号 (S K 2) (第 21 図)

長軸 1.1 m・短軸 0.85 m の略円形を呈し、深さは約 0.6 m である。

埋土中に IV b 層の池田降下軽石がみられること、上部

は削平されているが床面から約 0.6 m の平面規格が土坑 1 号と共通することから、土坑 1 号と同様の性格を有する遺構と考えられる。遺構は、Ⅶ b 層まで掘り込んでいる。断割を行ったが、杭等の痕跡はなかった。

土坑 3 号 (SK 3) (第 21 図)

長軸 1.13 m ・ 短軸 0.78 m の略円形を呈し、深さは約 0.65 m である。

上部は削平されているが、埋土・法量が土坑 2 号と同様であるため、土坑 2 号と同様に土坑 1 号と同じ性格を有する遺構と考えられる。遺構はⅦ b 層まで掘り込んでいる。裁割を行ったが、杭等の痕跡はなかった。

土坑 4 号 (SK 4) (第 21 図)

長軸 0.85 m ・ 短軸 0.8 m の略円形を呈し、深さは約 0.4 m でⅥ a 層まで掘り込んでいる。

埋土中にⅣ b 層の池田降下軽石がみられることから、土坑 1 号と同じ縄文時代中期の遺構とした。上部を大きく欠損しているため遺構の性格は不明である。

断割を行ったが、杭等の痕跡はなかった。

土坑 5 号 (SK 5) (第 21 図)

長軸 1.2 m ・ 短軸 1.05 m の略円形を呈し、深さは約 0.4 m でⅧ層まで掘り込んでいる。

埋土中にⅣ b 層の池田降下軽石がみられることから、土坑 1 号と同じ縄文時代中期の遺構とした。上部を大きく欠損しているため遺構の性格は不明である。

断割を行ったが、杭等の痕跡はなかった。

2 遺物 (第 18 図 44・45)

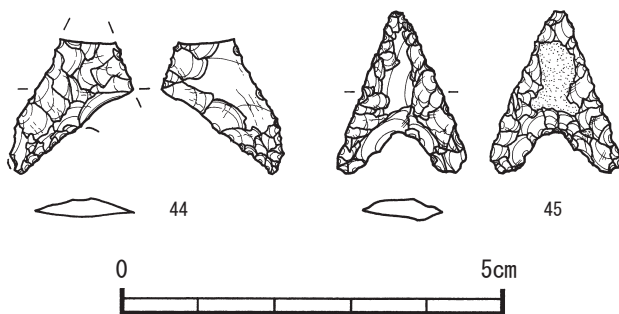
石鏃 2 点が出土したのみである。2 点とも二等辺三角形石鏃である。

44 は長さ 1.80 cm ・ 幅 1.65 cm ・ 厚さ 0.28 cm、重量 0.49 g が残存し、ハリ質安山岩を素材とする。

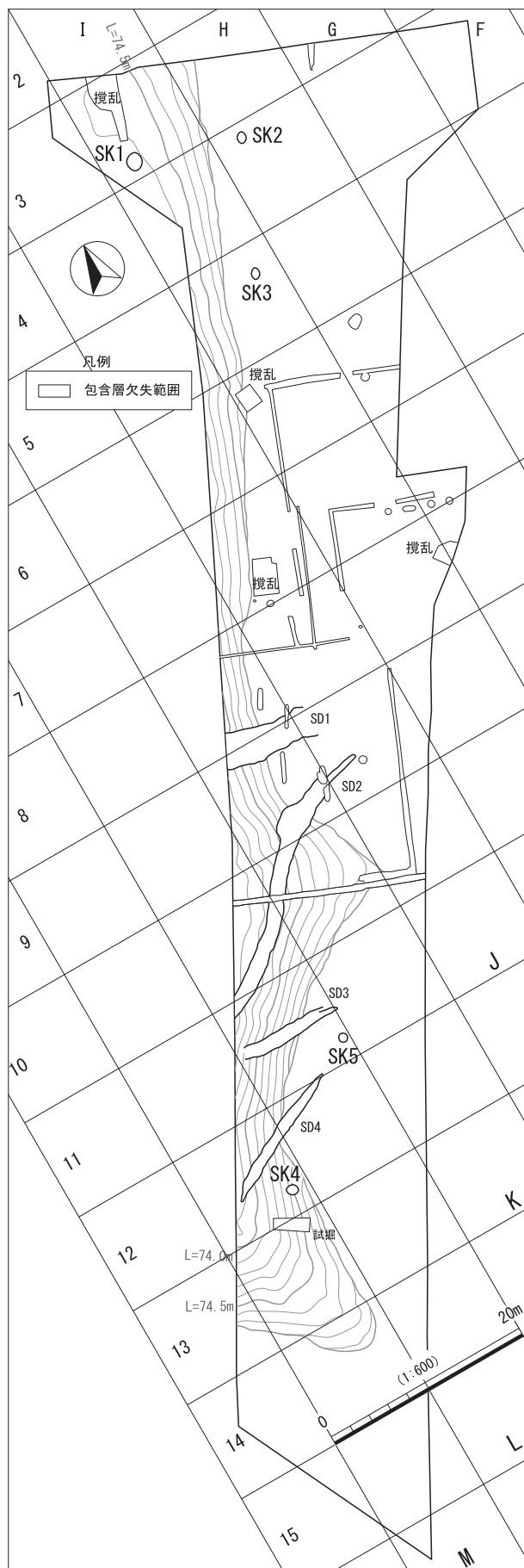
凹基の石鏃で、基部を大きく陥入させて抉るものである。先端部と片側の脚を欠損している。脚部の先端は弧状に成形され不定形な五角形石鏃の可能性もある。

45 は長さ 2.15 cm ・ 幅 1.75 cm ・ 厚さ 0.30 cm、重量 0.70 g を測り、針尾産類似の黒曜石を素材とする。

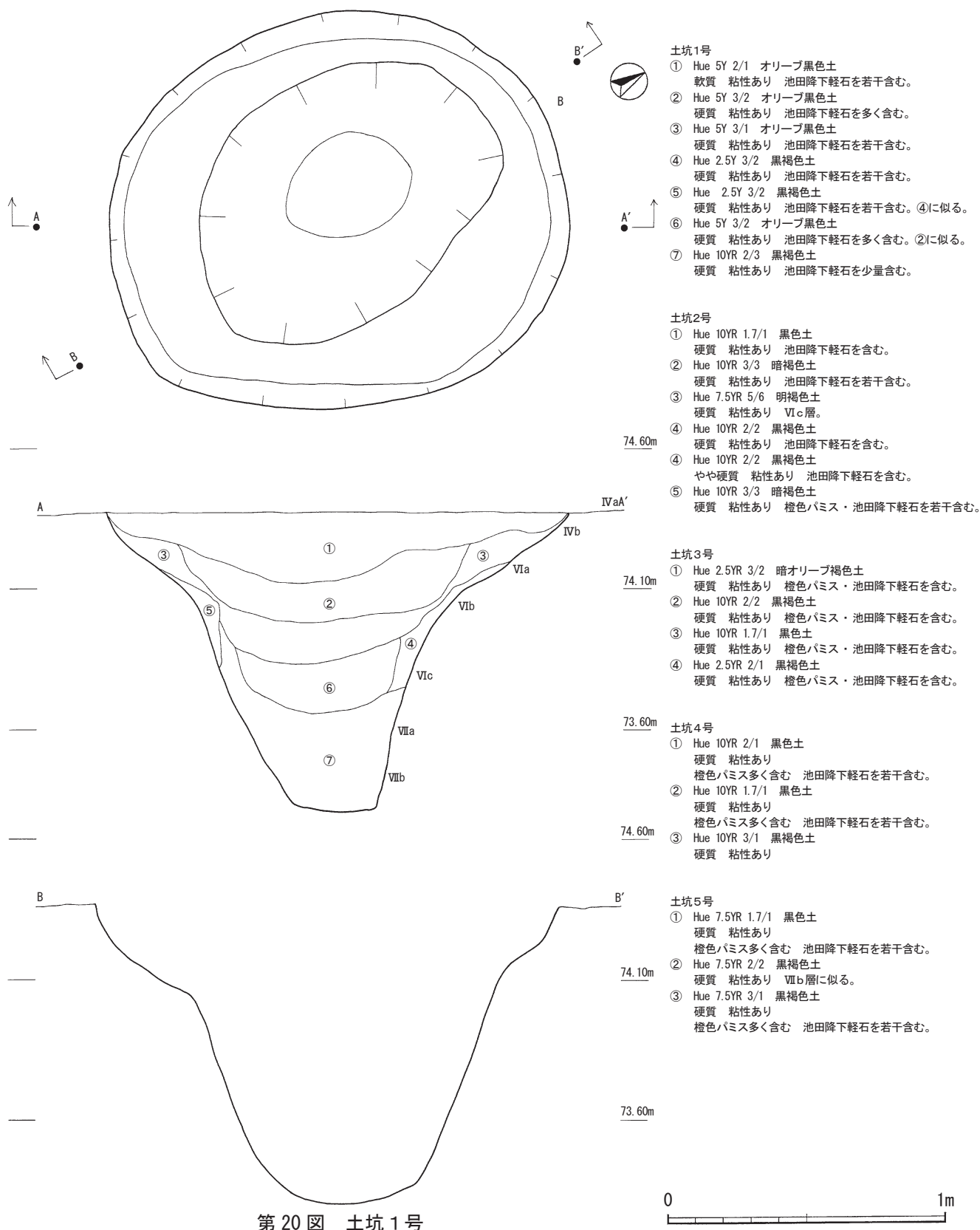
凹基の石鏃で、基部を大きく陥入させて抉るものである。正面には基部の成型の最終段階で大きな剥離を施している。裏側には自然面を残している。



第 18 図 縄文時代中期出土石器



第 19 図 土坑 1 ～ 5 号位置図

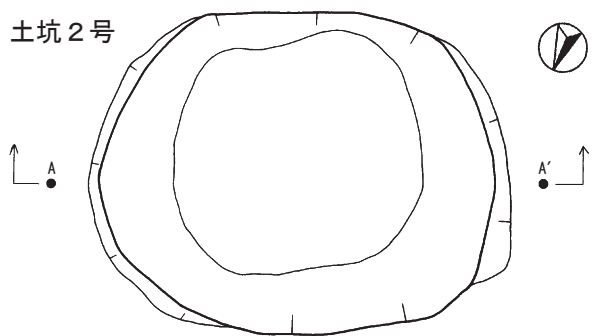


第 20 図 土坑 1 号

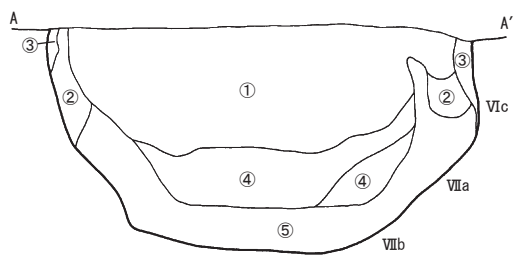
表 7 縄文時代中期石器観察表

挿図 番号	レイアウト 番号	器種	出土区	層位	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
18	44	石鏃	K9	IVa	ハリ質安山岩	—	—	0.28	—	922	
18	45	石鏃	K10	IVa	黒曜石	2.15	1.75	0.30	0.70	840	

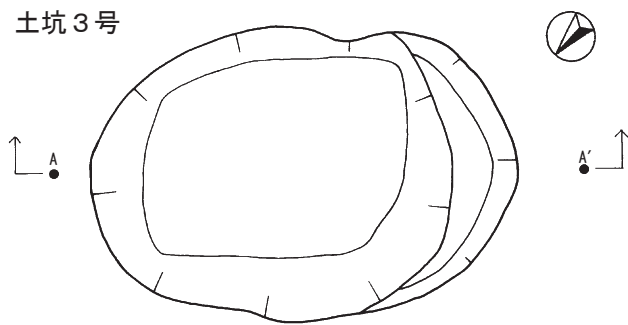
土坑 2 号



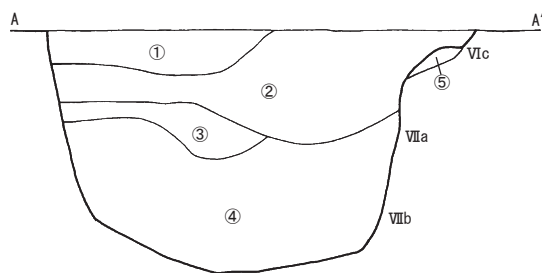
75.00m



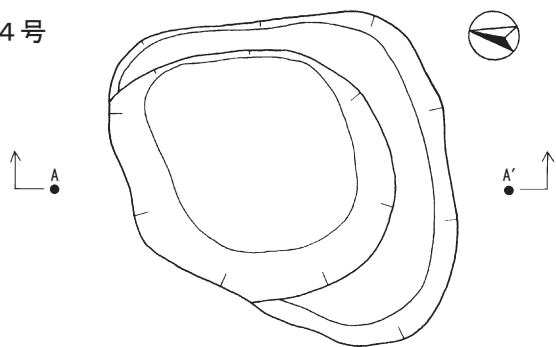
土坑 3 号



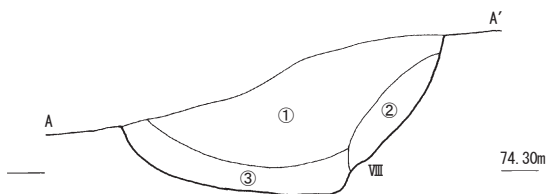
74.80m



土坑 4 号

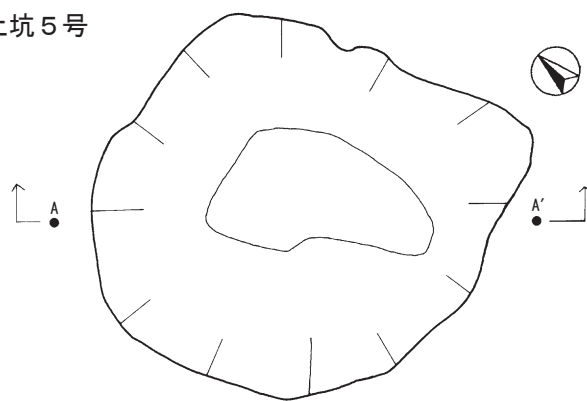


74.80m

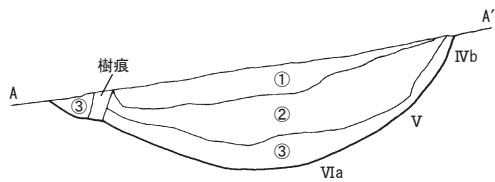


74.30m

土坑 5 号



74.60m



第 21 图 土坑 2 ~ 5 号

第5節 縄文時代後期の調査

縄文時代後期の調査については、前節にも記したように遺物包含層の大半を欠失しているため、遺跡の傾斜面下半にあたる西側部分のみ調査を行った。

1 遺構

縄文時代後期の所産として明確に位置付けられる遺構は検出できなかった。

縄文時代後期の遺構内遺物を有する溝状遺構1号（SD1）を検出しているが、SD1の取り扱いについては次節において触れることとする。

2 遺物

(1) 土器（第23～26図46～77）

形態的特徴をもとにⅣ類からⅧ類の5つに分類した。径を復元できるまで接合するものはなかった。また、Ⅷ類の台付皿形土器以外は全て深鉢形土器である。

Ⅳ類 口縁部のみが出土した。胴部から外傾して内湾し、緩い袋状を呈する形状のものである。口縁部外面には口唇下から沈線を数条巡らし、口唇端部は丸く収められている。

納簞式土器、辛川式土器に該当するものである。

Ⅴ類 頸部から直線的に開いて立ち上がり、口唇部外面に平坦面を作り出す。口唇部には磨消縄文や沈線が施される。口唇端部は平坦に仕上げられるものと丸く収められるものがある。

西平式土器に該当するものである。

Ⅵ類 市来式土器である。小片が数点出土した。2点のみを図化した。

Ⅶ類 口縁部に横位または斜位の貝殻刺突を1から数段施すものである。貝殻刺突の間に沈線を巡らすものもある。

口縁部は外反、直口、屈曲するものなどのバリエーションがある。

器形は、全体を知り得る資料が数点しかないが、底部から開きながら立ち上がり、胴部中位で屈曲して内傾し、胴部最大径がこの屈曲する箇所となるもの、底部から口縁部にかけて開きながら直立するものがある。

丸尾式土器に該当するものである。

Ⅷ類 台付皿形土器である。

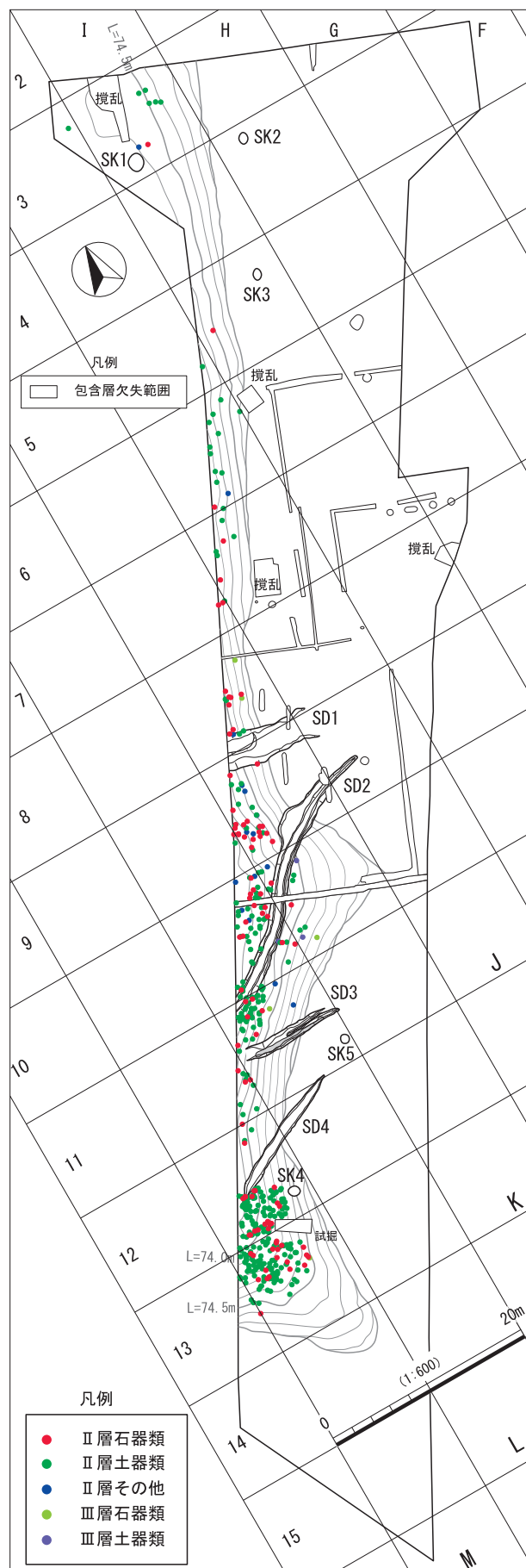
胴部・底部 このほか、数種類の形状の胴部・底部が数点ずつ出土している。

Ⅳ類（第23図46～48）

46は開き気味に直立して立つ胴部からやや外傾した後、わずかに内湾して緩い袋状を呈する口縁部である。

口唇端部は丸く収められ、口縁部外面上位には細い沈線が巡らされている。

47・48は46の袋状を呈する口縁部の膨らみが弱くなっているものとする。口唇端部は丸く収められ、口縁部



第22図 縄文時代後期遺物出土状況

外面に沈線を巡らし、沈線を描く範囲を肥厚させている。

V類 (第23図49～53)

49～52は頸部から直線的に開いて立ち上がり、口唇部外面に作出した平坦面に磨消縄文や沈線が施されている。内外面ともに丁寧なナデで仕上げられている。

また、49・52は波状口縁の山形になる部分であり、49～51は口縁端部を摘み上げて成形している。

53は頸部から肩部である。内面に明瞭な稜線を残しており、90(溝状遺構1)が稜線を持っていないことと対照的である。肩部には縄文を施した後に数条の沈線を巡らしている。

VI類 (第24図54)

54は口縁部端が断面三角形に仕上げられ、外面に工具による1条の連続刺突を巡し、器面調整の貝殻条痕が強く残っている。

VII類 (第24・25図55～67)

口縁部の形状と文様、器形から細分可能である。細分内容の詳細については、第VI章の総括で記す。

56の口縁部外面には口唇下に無文帯を持ち、斜位の貝殻刺突、無文帯、斜位の貝殻刺突、短く成形した貝殻で

の貝殻刺突が施されている。口縁部内面にも口唇下に無文帯を持ち、斜位の貝殻刺突が1段施される。

口唇部は丸く収められ、全体に器面調整の貝殻条痕をよく残している。

55も56と同様のものであると考える。

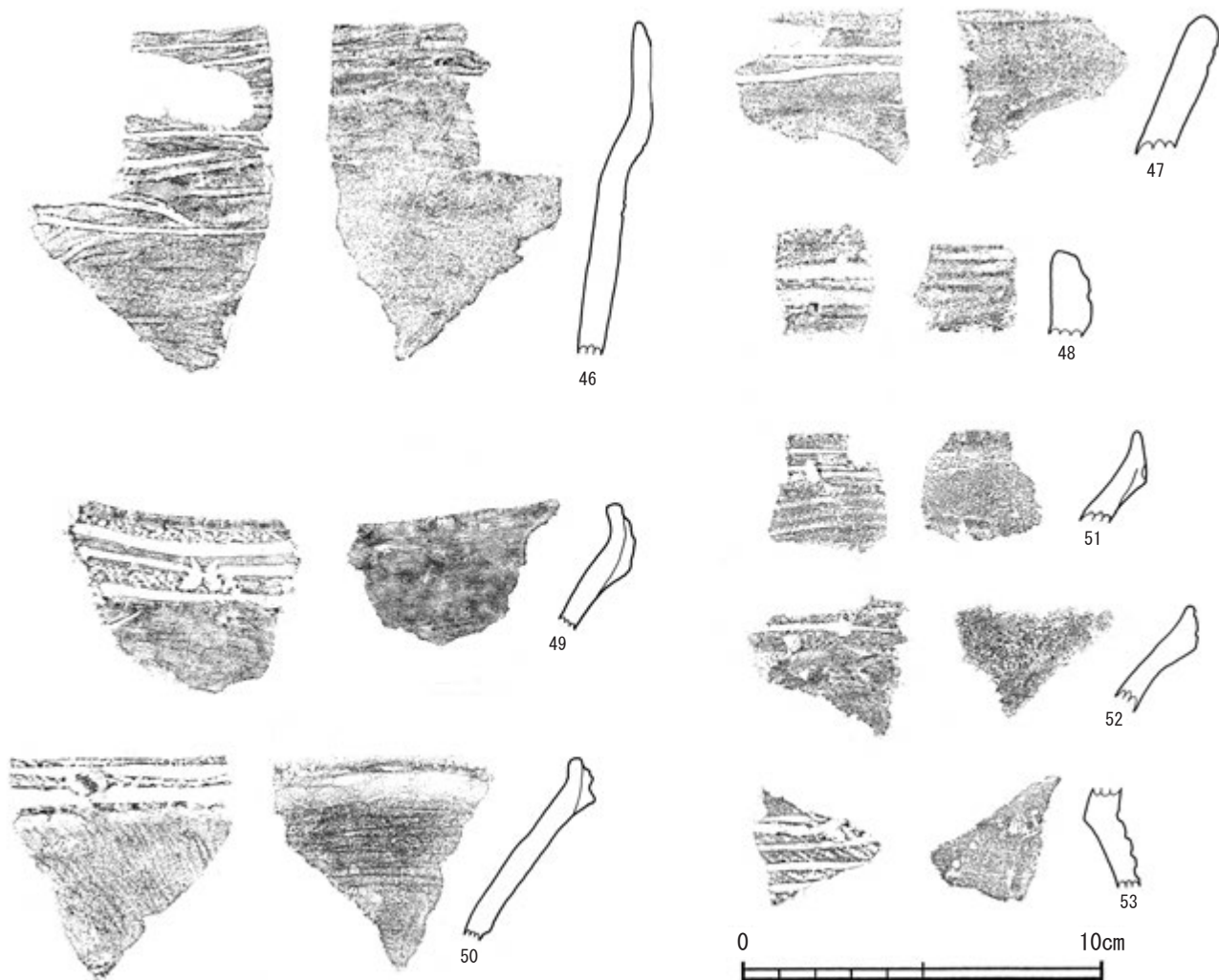
57は口縁部を肥厚させ、断面が緩い三角形の山形になるように貝殻条痕を2段巡らせることで成形している。口唇下にも斜位の貝殻刺突が1段巡らされている。器面調整はナデ・貝殻条痕である。

58～61は口縁部を肥厚させ、若干内湾するものと直口するものがある。外面の口唇下には、横位の貝殻刺突を1段巡らし無文帯を経て斜位の貝殻刺突が施される。58はこの貝殻刺突の下に横位の貝殻刺突が施されている。器面調整は内外面ともに貝殻条痕をよく残している。

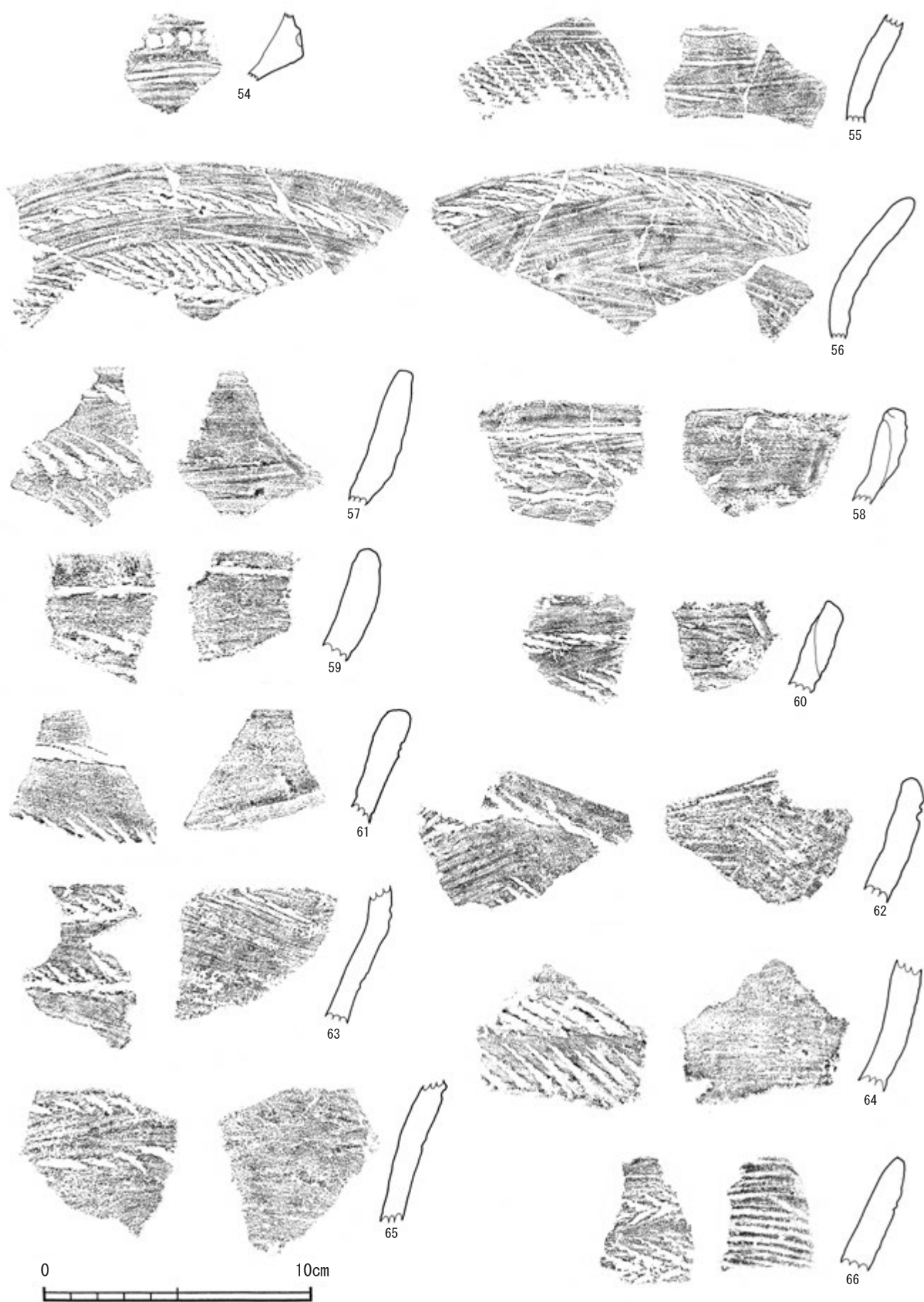
62は、波状口縁の頂部である。

63・64は、口縁部が外反したのち内側へ屈曲するものである。

63は、横位の貝殻刺突を1段巡らし、その下位に貝殻腹縁による横位の貝殻刺突を沈線状に施している。無文帯を経て上記と同様な貝殻刺突を施している。



第23図 縄文時代後期出土土器 (1)



第 24 図 縄文時代後期出土土器 (2)

64 は 57 に類似した貝殻刺突を施している。

65 はやや外反する口縁部で、外面に貝殻腹縁による刺突が巡らされる。貝殻の弧状の形状が分かり、その他のものより小さい貝殻を使用したものとする。

66 は直線的な口縁部で、外面に斜位の刺突とその逆方向に短く成形した貝殻刺突を羽状に組み合わせたものを 1 単位として、2 段巡らしている。

67 は無文の土器である。口縁部は若干外反し、内外面ともに貝殻条痕の後をよく残している。

底部（第25図68～71）

68～71 は底部である。いずれも輪積技法の粘土紐の継目がよく観察できる。

Ⅷ類（第26図72）

台付皿形土器の口縁部である。1 点のみ出土した。

外面の左上には、素材とした貝殻の形状がわかる細い横位の刺突とその右端からの逆 L 字状の斜位刺突を 1 単位とし、これを右下がりに数回繰り返すことで、刺突の単位ごとに挟まれた部分が、「」と見えるように施文している。

外面は丁寧にナデ上げられ、内面は口唇付近にケズリ調整で段をつくり帯を巡らしている。この帯には沈線を巡らす。単位の先端が隣り合う箇所は、一つは外向きに線を曲げ逆 L 字状に施し、一つは内向きに線を曲げて描き、「」字状に施すことで、沈線と沈線の間が「」と見えるように施文している。

これは、外面の貝殻刺突と共通し、「」を強く意識して模様を描いているようである。

また、内面外面ともに赤色顔料の塗布がみられる。痕

跡を残すのみで、肉眼で一瞥してよくわからない程度しか残存していない。分析結果を第 V 章に記載する。

その他の土器（第26図73）

口縁部外面の貝殻刺突は深鉢形土器と類似するが、口唇部内面に 1 条の沈線となるように貝殻条痕による器面調整を行っていること、精製粘土の使用が他の深鉢形土器に見られないこと、口縁部の傾き等が不明であることなどから、台付皿形土器の可能性も考え、器種不明の土器として掲載する。

(2) 円盤状土製品（第26図74～77）

74～77 は円盤状土製品である。側縁を打ち欠いて成形し、さらに磨りあげている。

全てⅡ層からの出土である。

(3) 石器（第27図78～86）

調査区全体から少量の石器が出土している。主な資料を選択して図化した。器種は磨石・叩石・石錘のみで、その他の器種は出土していない。

また、素材は全て砂岩である。

磨石（第27図78・79）

78・79 は表裏両面ともよく磨られている。扁平に近い丸みを帯びた断面で、平面形が略円形の礫を用いている。

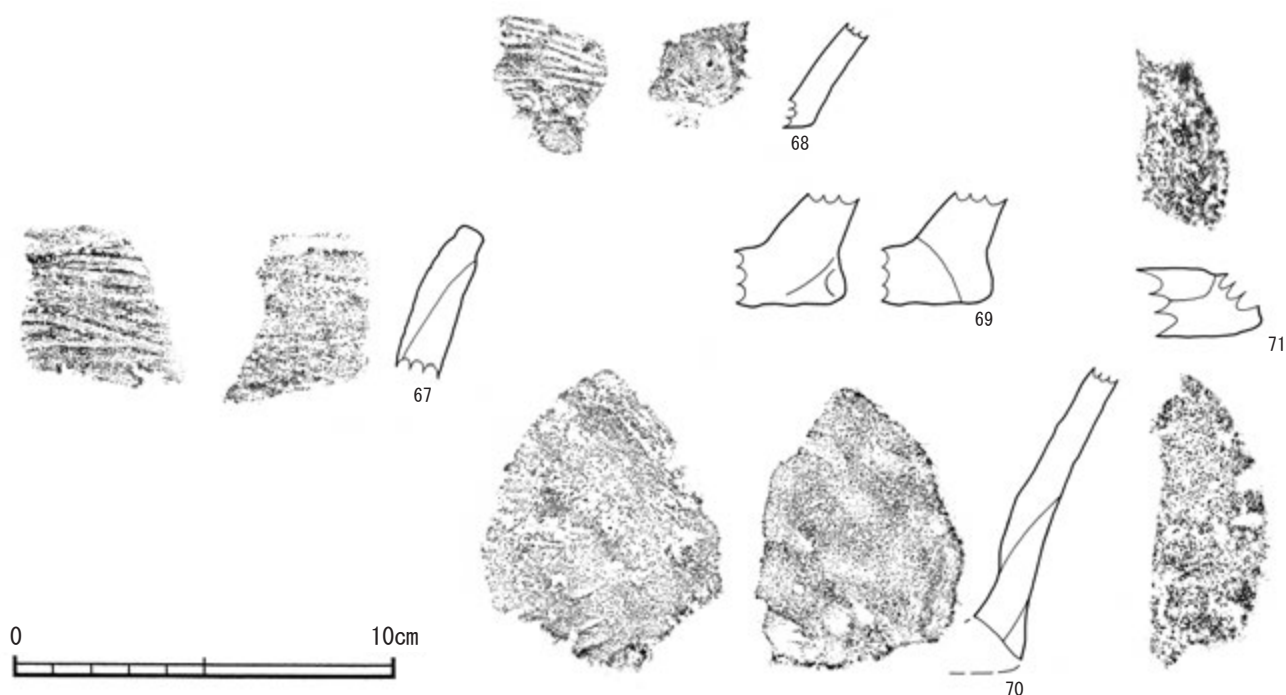
78 は側縁の一部に敲打痕がみられる。

79 は裏側の中央に別の使用痕がみられる。

叩石（第27図80～84）

80～84 は部分的に敲打痕や敲打に伴うと考えられる剥離がみられることから叩石に分類した。楕円形や円形等の定形の礫は使用していない。

80～82 は砂岩ではあるが、珪質が強く硬質な礫を使



第 25 図 縄文時代後期出土土器（3）

用しており、見帰遺跡の他の石器と比べると石材が特徴的である。叩石への使用を目的に搬入した可能性がある。

80は平面形が不定形で、縦の断面形状が「P」字状の礫を使用している。成形・断面は見られない。上部の「D」字状の丸みを帯びた部分に人差し指から小指をかけて握り、親指で側面を抑え、下部の先端を利用して敲打したことが想呈される。敲打は剥離が起きるほど強く、側辺の一部まで及んでいる。

81は平面形状が隅丸方形で、横断面形状が台形の礫を用いている。成形は見られないが、一部に断面がある。敲打の頻度は異なるが、礫の稜となる箇所全てで敲打が行われている。下面が特に強く敲打しており、敲打による稜のつぶれが生じている。

82は亜角礫で自然面はあまり残っていない。断面が半

月形の礫を叩石として利用したものである。下面端部の尖った箇所を剥離が入るほど強く敲打している。その他礫の割口の尖った箇所でも敲打している。

83は下面の先端の一部でのみ敲打している。ハンマーの可能性はあるが叩石として分類した。

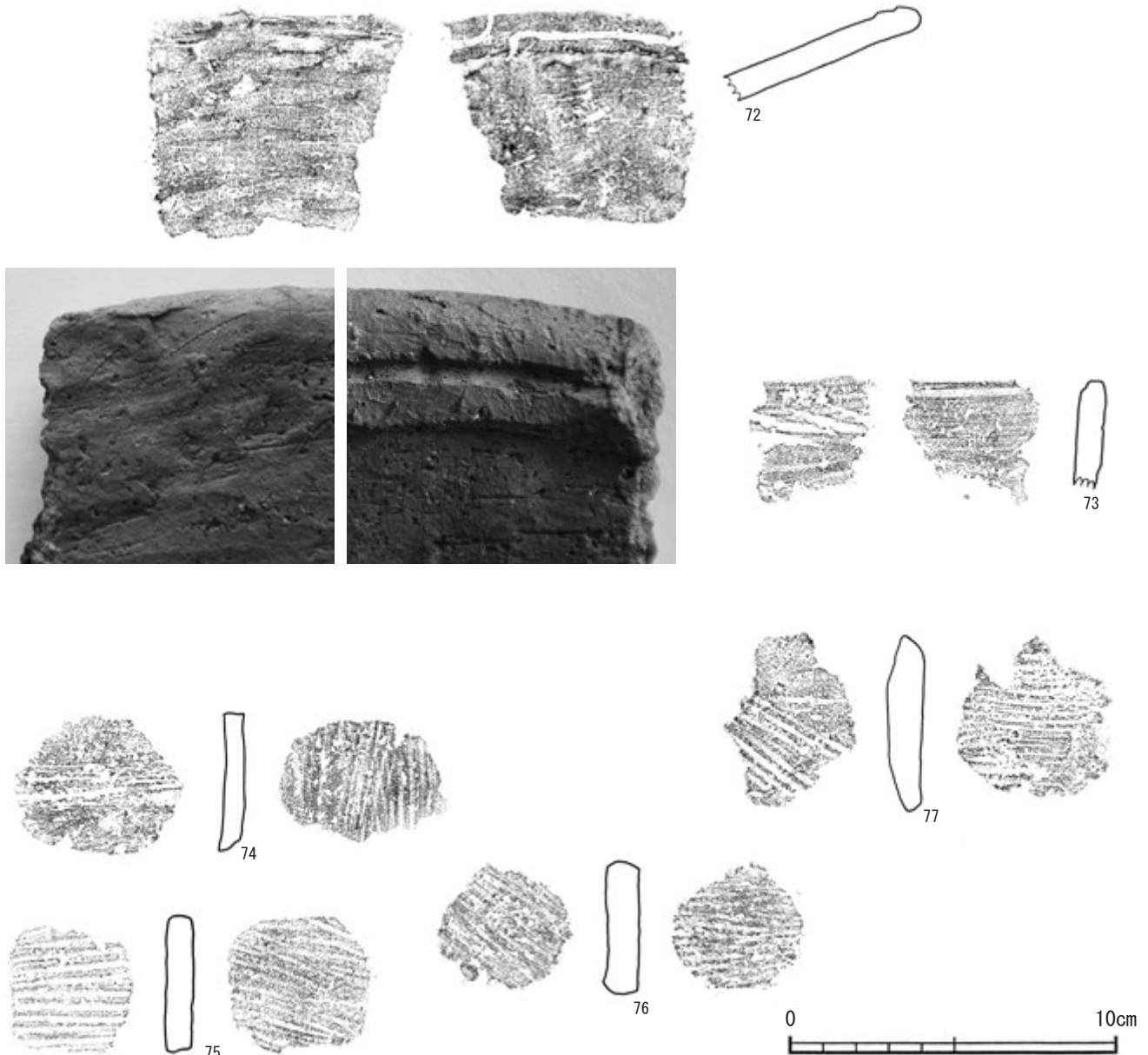
84はその他と比べて一回り小さく、円礫を素材としている。上端部でよく敲打し、礫の稜線を越えて敲打している。

側縁部での敲打は少ない。

石錘（第27図85・86）

打ち欠きを有する石錘と考えられる資料が数点出土している。2点を図化した。

85は楕円形の扁平な円礫を使用している。欠けた部分がなく、完全形である。上下端部を打欠き、挟りを成形



第 26 図 縄文時代後期出土土器（4）・円盤状土製品



第 27 図 縄文時代後期出土石器

している。また、上下の挾部はともに剥離によりできた鋭利な箇所を敲打により潰し、加工を施している。また、一部に敲打痕がみられる。

86 は扁平な円礫を使用している。割れており、挟りは

小さく残っているのみである。石錘として使用していたものが割れたため、割れ口の鋭利な箇所を利用して敲打具として転用している。石錘で分類した。

表 8 縄文時代後期土器観察表

挿図 No.	レイアウト 番号	器種	類別	型式	出土区	層位	文様・器面調整等		色調		胎土						焼成	取上番号
							内面	外面	内面	外面	状態	石英	長石	緑石	燐石	他		
23	46	深鉢	IV	納管・幸川	M12	II	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→ナデ	5YR3/1黒褐色	5YR4/4にぶい赤褐色		○	○	○	○	～1mm 金雲母(多)	良好	38, 57, 67
23	47	深鉢	IV	納管・幸川	K10	III	ナデ	ナデ 沈線	5YR4/6赤褐色	5YR4/6赤褐色	～2mm石粒 (花崗岩?)	○	○	○	○	金雲母	良好	842
23	48	深鉢	IV	納管・幸川	M13	II	ナデ	ナデ	5YR4/4にぶい赤褐色	5YR4/4にぶい赤褐色	～2mm石粒	○	○	○	○	～1mm 金雲母	良好	226
23	49	深鉢	V	西平	L11	II	ヘラナデ	沈線3条, 刺突, 縄文, ヘラナデ	7. 5YR2/2黒褐色	7. 5YR2/2黒褐色	～3mmごく少	○	○	△	△		良好	370
23	50	深鉢	V	西平	M12	II	ナデ	沈線2条, 刺突, 縄文, ナデ	10YR2/3黒褐色	5YR5/4にぶい赤褐色	～1mm石粒	○	○	○	△		良好	64
23	51	深鉢	V	西平	N13	II	ナデ	沈線, 刺突, 縄文, ナデ	7. 5YR5/3にぶい褐色	7. 5YR7/4にぶい褐色	0. 5mm以下石粒	○	○	◎	◎		良好	233
23	52	深鉢	V	西平	N13	II	ナデ	沈線2条, 縄文, ナデ	5YR3/4暗赤褐色	7. 5YR2/3暗褐色	～1mm石粒	○	○	○	○		良好	203
23	53	深鉢	V	西平	L11	II	ナデ	沈線, 縄文, ナデ	7. 5YR7/6褐色	7. 5YR7/6褐色	精製?0. 5～2mm以下 赤色石粒	△	△	○	○	赤色石粒	良好	379
24	54	深鉢	VI	市来	K7	II	ナデ	刺突, ナデ, 貝殻条痕	5YR4/6赤褐色	5YR4/6赤褐色		○	○	○	○	金雲母	良好	244
24	55	深鉢	VII	丸尾	M12	II	貝殻条痕	貝殻条痕	5YR4/6赤褐色	5YR3/1黒褐色		○	○	○	○		良好	35 37
24	56	深鉢	VII	丸尾	M13	II	貝殻条痕	貝殻条痕	5YR6/6褐色	7. 5YR5/4にぶい褐色		○	○	○	○		良好	101, 106, 159
24	57	深鉢	VII	丸尾	I9	VIIa	貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ	5YR5/6明赤褐色	5YR5/6明赤褐色	～2mm石粒	○	○	○	○		良好	1006
24	58	深鉢	VII	丸尾	I9	VIIa	ナデ	貝殻条痕	5YR4/6赤褐色	5YR4/6赤褐色	～5mm石粒	○	○	○	○		良好	999
24	59	深鉢	VII	丸尾	L10	II	ナデ	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	10YR5/2灰黄褐色	～2mm石粒	○	○	○	○	金雲母	良好	877
24	60	深鉢	VII	丸尾	L11	II	貝殻条痕	貝殻条痕	5YR4/2灰褐色	5YR4/6赤褐色	白色石粒	○	○	○	○		良好	834
24	61	深鉢	VII	丸尾	M12	II	ナデ	ナデ	5YR5/6明赤褐色	5YR5/6明赤褐色	～1mm石粒	○	○	○	○		良好	44
24	62	深鉢	VII	丸尾	M12	II	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→ナデ	5YR5/6明赤褐色	5YR4/6赤褐色		○	○	○	○	金雲母	良好	117
24	63	深鉢	VII	丸尾	M11	II	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→ナデ	7. 5YR5/4にぶい褐色	5YR3/1黒褐色	～3mm石粒 (花崗岩)	○	○	○	○		良好	280
24	64	深鉢	VII	丸尾	K9	II	貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ	5YR5/6明赤褐色	5YR5/6明赤褐色		○	○	○	○		良好	317
24	65	深鉢	VII	丸尾	L11	II	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→ナデ	5YR5/6明赤褐色	5YR5/6明赤褐色	～2mm石粒(少)	○	○	○	○		良好	374
24	66	深鉢	VII	丸尾	M13	II	貝殻条痕	羽状の刺突, 貝殻条痕	5YR4/6赤褐色	5YR5/4にぶい赤褐色		○	○	○	○		良好	151
25	67	深鉢	VII	丸尾	K9	II	貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕	5YR5/6明赤褐色	2. 5Y3/2黒褐色		○	○	○	○	金雲母	良好	329
25	68	底部	VII		M12	II	ナデ	貝殻条痕, ナデ	2. 5YR5/8明赤褐色	10YR4/1褐灰色		○	○	○	○		良好	69
25	69	底部	VII		M13	II	摩耗	摩耗	2. 5YR6/6褐色	2. 5YR6/6褐色	石粒	○	○	○	○		良好	163
25	70	底部	VII		M13	II	ナデ 指頭痕	ナデ・ケズリ	5YR4/2灰褐色	5YR4/6赤褐色	～3mm 石粒・花崗岩	○	○	○	○	金雲母	良好	142
25	71	底部	VII		M13	II	ナデ 指頭痕	ナデ	5YR5/8明赤褐色	5YR5/8明赤褐色		○	○	○	○	金雲母	良好	139
26	72	台付皿	VIII		M12	II	ケズリ・ナデ	指頭痕, 貝殻腹縁	5YR5/6明赤褐色	2. 5YR5/6明赤褐色	石粒	○	○	○	○		良好	85
26	73	不明			L11	II	貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ	2. 5YR6/6褐色	2. 5YR6/6褐色	～1mm石粒	○	○	○	○		良好	828
26	74	円盤状土製品			M12	II	貝殻条痕	貝殻条痕	5YR5/4にぶい赤褐色	5YR5/4にぶい赤褐色	～2mm石粒	○	○	○	○		良好	113
26	75				M11	II	貝殻条痕	貝殻条痕	5YR5/4にぶい赤褐色	5YR5/4にぶい赤褐色		○	○	○	○		良好	281
26	76				M13	II	貝殻条痕	貝殻条痕	5YR5/6明赤褐色	7. 5YR3/2黒褐色	～1mm石粒	○	○	○	○		良好	227
26	77				I3	II	貝殻条痕	貝殻条痕	5YR5/6明赤褐色	5YR3/1黒褐色	1～2mm 石粒わずか	○	○	○	○		良好	6

表 9 縄文時代後期石器観察表

挿図 番号	レイアウト 番号	器種	出土区	層位	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
27	78	磨石	M13	II	砂岩	7. 20	6. 40	2. 90	192	209	
27	79	磨石	L11	II	砂岩	8. 60	6. 65	2. 15	182	711	
27	80	叩石	M12	II	砂岩(珪質)	8. 50	6. 30	6. 02	368	82	
27	81	叩石	M13	II	砂岩(珪質)	6. 39	5. 80	4. 33	204	137	
27	82	叩石	M13	II	砂岩(珪質)	8. 18	9. 43	4. 70	325	172	
27	83	叩石	M12	II	砂岩	11. 80	6. 61	5. 40	624	41	
27	84	叩石	K7	II	砂岩	4. 58	4. 69	3. 70	97	246	
27	85	石錘	M11	II	砂岩	4. 80	5. 50	1. 90	79	278	
27	86	石錘	M13	II	砂岩	7. 32	7. 33	2. 97	199	154	

第6節 その他の時代の調査

その他の時代の遺構の調査では、Ⅱ層から少量の遺物に伴い溝状遺構4条を検出した。溝状遺構は、いずれも時代を特定する遺物が乏しかったため、時期の特定は困難であった。

1 遺構

溝状遺構（第29～35図）

その他の時代の溝を4条検出した。調査区の西側には谷が形成されており、いずれも地形に合わせて緩やかな勾配がみられた。後世の土地改良により傾斜地を水平に削っているため、東側の層が安定しておらず、西より東が深い地形であったかは不明である。

(1) 溝状遺構1号（SD1）（第29図）

K・J-8・9区で、グリッドに沿うように西から東にかけて浅くなるように検出された。調査区外の西側の谷へ続いていると考えられる。

削平を受けているため、Ⅲ～Ⅵ層で検出した。底面は西側端で段を有している。底面となる層は一定ではなく、西側はⅥ層（アカホヤ火山灰）まで掘り込んでいるが、東側はⅦ層まで掘り込んでいる。しかし、上部の層を欠損しているため、尾根筋となる調査区東側でより深く掘り込まれているのか、調査区東側が尾根筋であるため、斜面側の西側より層が薄く一定の深さで掘り込んでも底面となる層が異なったのかは不明である。

形状は幅3.2m、深さは検出面からの最大深度0.62mである。埋土は3つに分層でき、池田降下軽石はほとんど見られない。断面形は逆台形をなし、底面は平坦である。

出土遺物は前節で示したように、縄文時代後期の遺物のみが出土している。欠損部分が多く、平成25年度の県埋文センターの調査でも同様の溝状遺構を検出しており、同一遺構である可能性が高いと考えられる。

出土遺物（第29～32図87～116）

遺物は、埋土中から土器片163点、石器54点、総計192点が出土した。土器は小片が多く接合しなかったため、比較的残存状況の良い土器23点と石器7点を図化し掲載した。前述したが、縄文時代後期の土器とそれに伴うと考えられる石器のみの出土である。以下、第4章第5節の分類に従い記していく。

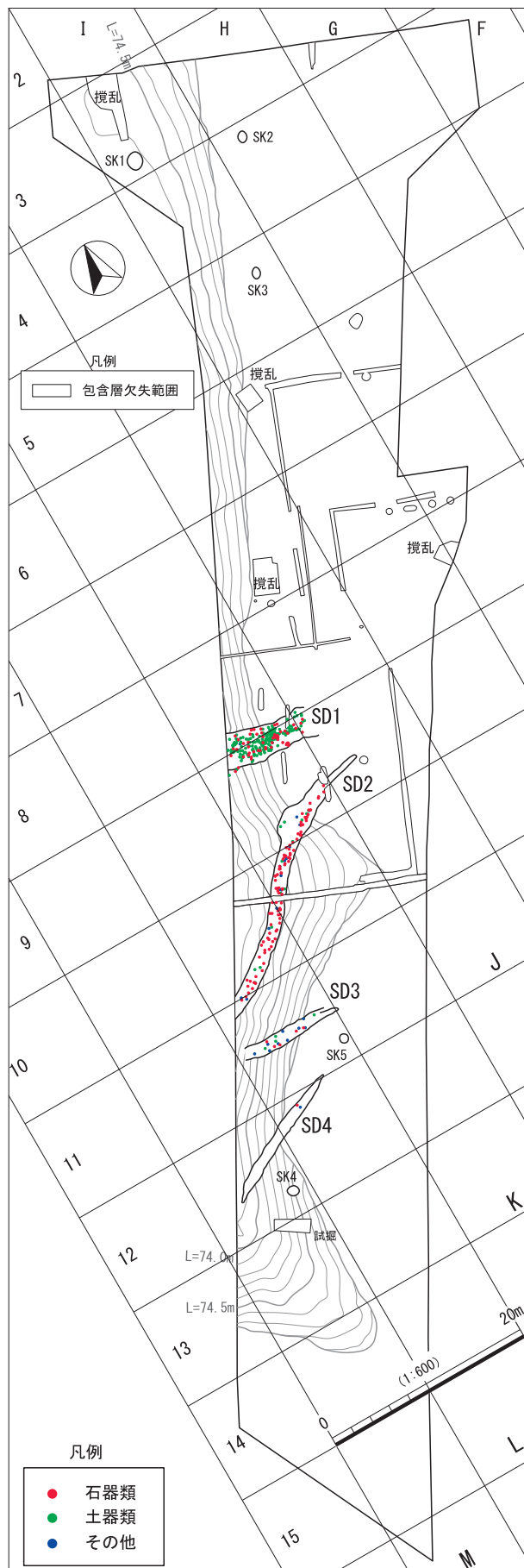
土器（第29～31図87～109）

Ⅳ類～Ⅶ類が出土した。Ⅱ層出土の土器よりもよく接合した。深鉢形土器以外は出土していない。

Ⅳ類（第29図87～89）

87はやや内湾する口縁部である。口唇端部を丸く収め、外面上位に沈線を巡らせている。46と比較すると口縁部の膨らみが弱く、沈線が施される口縁部文様帯の幅が狭い。また、87は沈線を描く範囲を肥厚させている。

88は、87と同様のものであるが、87より沈線を描く



第28図 溝状遺構配置図及び
溝状遺構1～4号遺物出土状況

範囲を太く肥厚させている。

89 はやや膨らみのある胴部片である。外面には数条の沈線を巡らし、上部に刺突を施している。

V 類 (第29図90, 91)

90 は頸部から直線的に開いて立ち上がり、「く」の字状に内側へ屈曲する口縁端部に磨消縄文や沈線を施したものである。内外面ともに丁寧なナデで仕上げられている。

91 はやや上げ底を呈する底部である。接地面となる部分は平坦面を作り出し丁寧に仕上げ、上げ底部分は成形時の圧痕を残したままである。上部を欠損しているが、これまでの出土事例から V 類に分類した。

VI 類 (第29図92)

92 は口縁部外面に 2 段の刺突を巡らし、器面調整の貝殻条痕が強く残っている。VI 類に分類したが、VII 類の可能性もある。

VII 類 (第30図93～102)

93 ～ 95 は口縁部外面の口唇下に斜位の貝殻刺突を巡らし、その下位に横位の沈線と縦位の沈線、横位の貝殻刺突、無文帯、斜位の貝殻刺突を巡らせている。口唇部はやや平坦に仕上げられている。全体的に器面調整の貝殻条痕をよく残している。

96 は口唇部付近を欠損している。緩く外反する口縁部で、斜位の貝殻刺突が巡らされ、下位に沈線を 2 条巡らしている。

97 は、胴部から口縁部までの形状を知ることができる唯一の資料である。底部から開きながら湾曲して立ち上がり、胴部下位で屈曲して内傾し、胴部最大径がこの屈曲する箇所となる。口縁部は外反し、口唇部は丸く収めている。口唇下の内面には斜位の貝殻刺突が 1 段、外面には頸部に羽状を呈する貝殻刺突が 1 段施される。また、この貝殻刺突の上下には沈線に見えるように横位の貝殻条痕を施している。全体的に器面調整の貝殻条痕をよく残している。

98・99 は口縁部をわずかに肥厚させ、断面三角形を呈する仕上げを行っている。口縁部外面には、2 段の貝殻刺突が施されている。

100 は口縁部をわずかに肥厚させ、若干内湾する。外面の口唇下には横位の貝殻刺突を沈線状に 1 段巡らし、無文帯を経て斜位の貝殻刺突を施している。

101・102 は口縁部が外反したのち内側へ屈曲するものである。口縁部はわずかに肥厚させ、外面には斜位の貝殻刺突を 1 段巡らし、無文帯を経て斜位の貝殻刺突が施される。

102 は口縁部屈曲部下位にある貝殻刺突の下部に横位の貝殻刺突が施される。

胴部 (第31図103～105)

103 ～ 105 は胴部である。胴部が接合し図化できたも

のは、溝状遺構 1 号出土土器のみである。口縁部と接合するものがなかったため、口縁部と胴部の関係は不明である。

103 は、底部から直線的に開く胴部片である。上部には斜位の貝殻刺突を巡らし、その下位に 2 段の横位の貝殻刺突を巡らしている。内外面ともに貝殻条痕をよく残している。

104・105 は、底部から丸みを帯びて立ち上がる胴部片である。97 の胴部形状と類似している。小片が多く、詳細は不明確であるが、器形・胎土・色調・器面調整等から VII 類土器の可能性が高い。

底部 (第31図106～109)

106 ～ 109 は底部である。

出土量も少なく、小片のため、詳細は不明である。

輪積技法の粘土紐の継目がよく観察できる。

石器 (第32図110～116)

土器が縄文時代後期のもののみ出土していることから、石器も縄文時代後期のものである可能性が高い。小片等も出土しているが、接合しなかった。叩石・石錘に分類したが、転用品もある。

叩石 (第32図110～116)

110 ～ 115 は叩石である。

110 は扁平な円礫が半分程度に割れたものを叩石として使用したものである。鋭角になる割口の端部で敲打し、よく使用している。磨面もしくは抉りが不明であるため、何かを転用したものであるかは不明である。

111 は 80 ～ 82 と同様に珪質の強い硬質の砂岩を使用している。平面形状が不定形で、断面形状が扁平な礫を用いている。成形・割面は見られない。敲打は下部の礫の稜となる箇所の片側で敲打している。強く敲打しており、剥離が見られる。

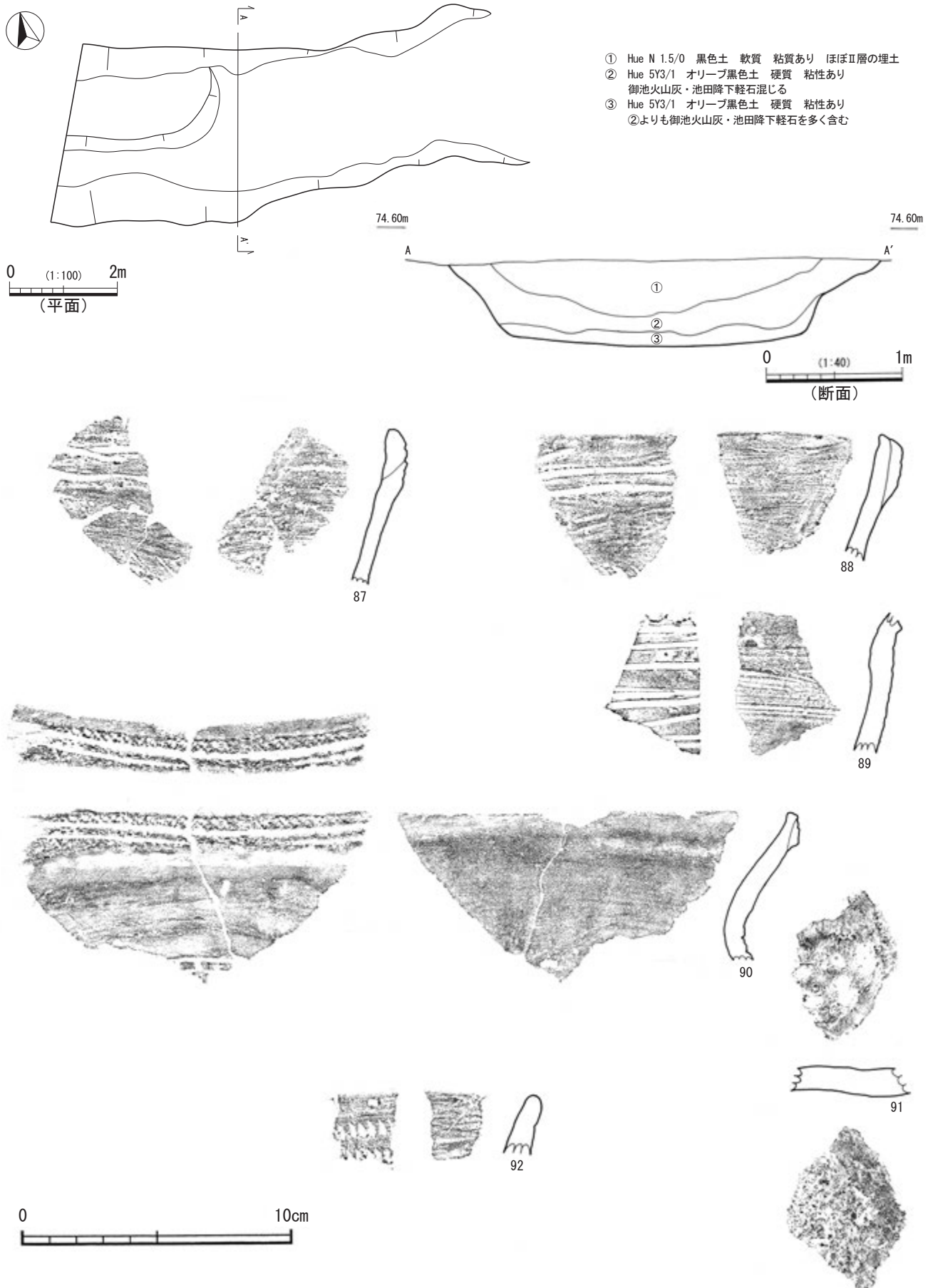
112 は磨石から叩石への転用である。磨石が割れたのち、割れ面の鋭角な稜を持つ箇所の多くで敲打している。

113 は 3 点による接合資料である。磨石からの転用である。表裏両面ともによく使用された磨石を使用し、縁側の全てを原形が無くなるほど強く敲打している。

114 は球形に近い礫である。若干の使用痕が見られる程度である。

115 は礫器からの転用である。長さ 10 cm 以上、厚さ 5 cm 以上のやや扁平な亜円形礫器の一端を腹面から打ち欠き刃部に成形している。刃部と刃部形成時の剥離面の稜で敲打している。特に刃部の使用頻度が高く、裏面に剥離ができるほど強く叩いている。

116 は石錘である。背面と腹面に向けて敲打することで、抉りを成形している。また、抉部は剥離によりできた鋭利な箇所を敲打により刃潰し加工を施している。半欠品であるが全体的な特徴から石錘であると判断した。



第 29 図 溝状遺構 1 号及び溝状遺構 1 号出土土器 (1)



第 30 図 溝状遺構 1 号出土土器 (2)

(2) 溝状遺構 2 号 (SD 2) (第33図)

L～J-9～11 区のⅡ～Ⅵ層で検出した。長さ約 26 m・幅約 1.55 m・深さ約 0.3 m を測り、検出した長さでは 4 条の溝状遺構のうち最長のものである。平面形状は緩やかに蛇行し、断面形状は浅い半円形を呈する。東端は後世の削平により消失している。埋土は 3 層に分けることができ、上部の 2 層は硬化している。溝状遺構 1 号 (SD 1) と同様、調査区外の谷へ続いていると考えられる。

出土遺物 (第33・34図117～130)

土器・陶磁器 (第33図117～122)

遺物は、土器・陶磁器 26 点、石器 94 点が出土した。うち土器 6 点、石器 8 点を図化し掲載した。

117 は縄文時代後期の土器で深鉢形土器の口縁部であるが、口唇部分が欠落している。内外面ともにナデで仕上げられている。中岳Ⅱ式土器にあたるものと考えられる。

118・119 は陶器である。118 は口縁部で無釉のものである。口縁端部は折り返して成形し、前面にロクロによるナデ成形の痕跡をよく残している。

119 は土瓶の底部である。

120 は磁器の碗で、121・122 は染付である。

121 は碗または杯の底部付近である。内面のみに呉須の絵付がある。

122 は皿の底部である。内面のみに絵付がある。外面には重ね焼き時の砂の跡が残っている。

石器 (第34図123～130)

縄文時代後晩期と考えられる石器が数点出土している。

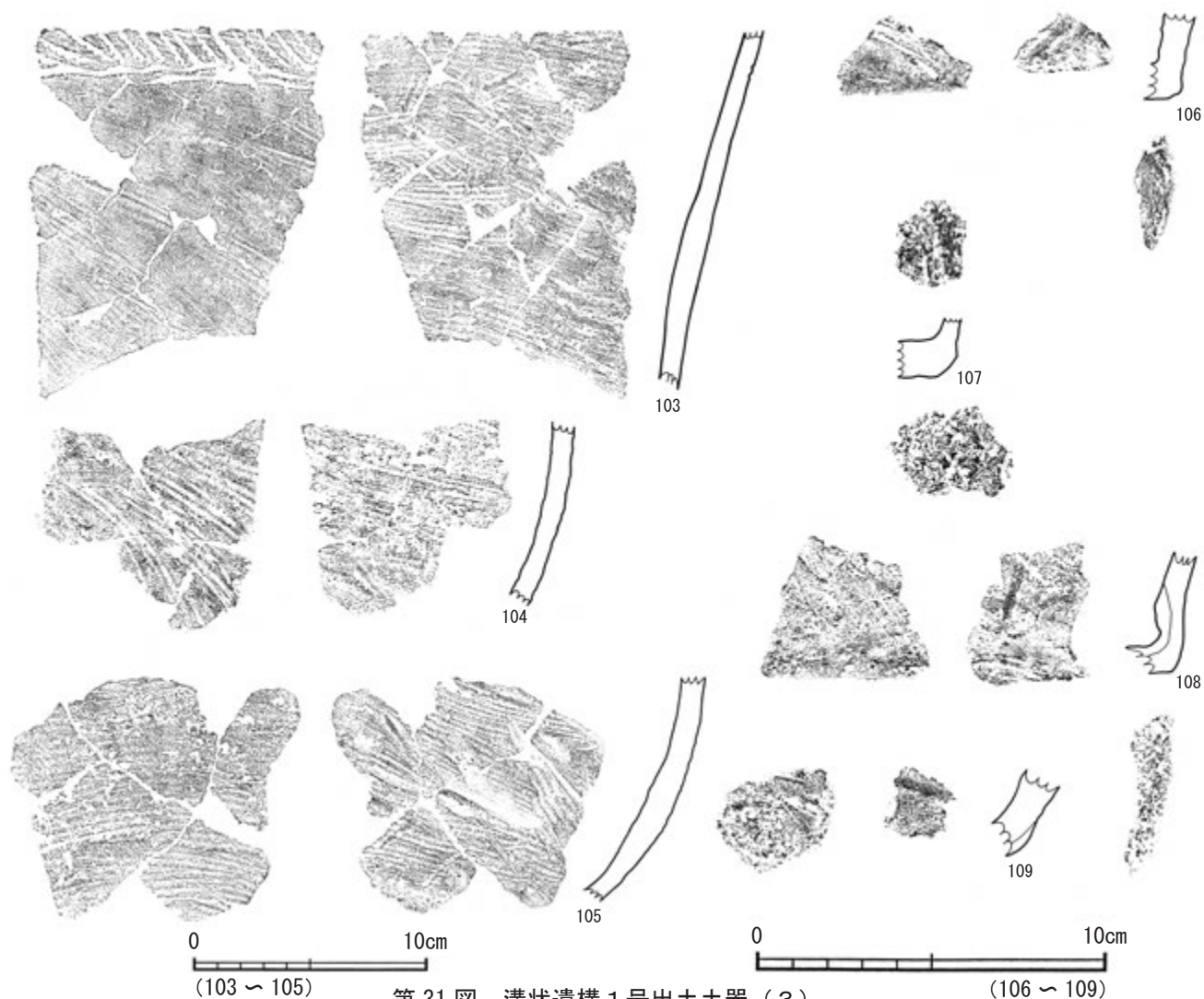
磨石 (第34図123)

123 は直径 5 cm 以下、最大厚 1.3 cm の小型磨石である。平面円形の扁平な礫を使用している。成形・加工等は見られない。側縁部の使用頻度が高い。通常の磨石とは異なる使用方法であることが考えられる。

叩石 (第34図124～127)

124 は大きさ等は 123 と同じ小型であるが、叩石として使用している。敲打は下半分のみで行い、側縁に偏りを持たない。使用頻度が高く、強く敲打しているため大きく欠損し、下半分は原形を保っていない。

125 は磨石または石錘の転用品である。4 分の 1 程度に割れたものの一端を利用して敲打し、敲打痕は割れ口にも及んでいる。



第 31 図 溝状遺構 1 号出土土器 (3)

126 は球形の礫が割れたものを叩石としている。自然面が残った箇所と割れによりできた鋭角な部分でよく敲打している。

127 は小型の叩石である。形状や特徴等は 83 に似ている。長さ・厚みは、ともに 83 の半分ほどである。

ハンマー（第34図128）

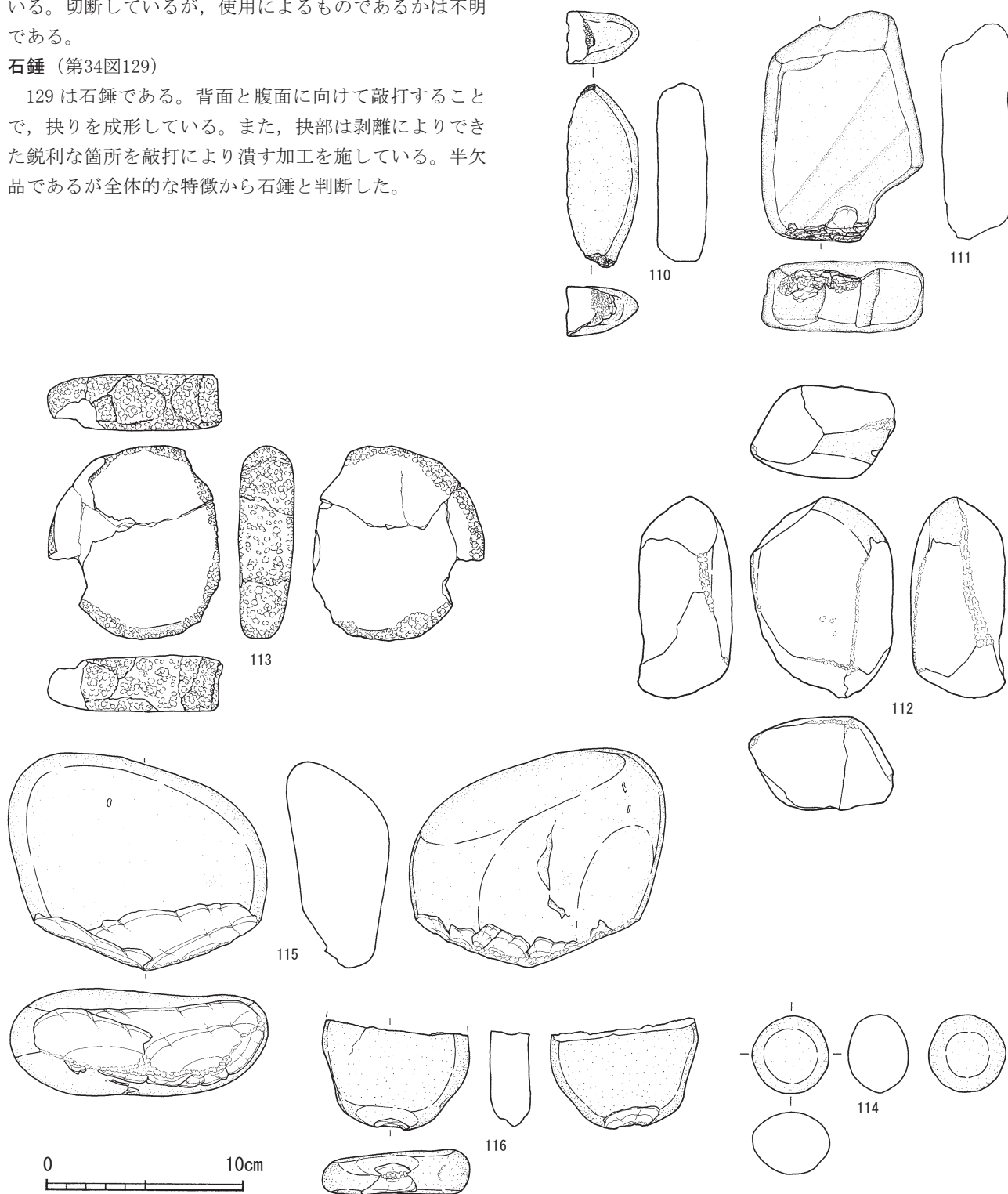
128 はハンマーとして扱った。叩きは一部に限られている。切断しているが、使用によるものであるかは不明である。

石錘（第34図129）

129 は石錘である。背面と腹面に向けて敲打することで、袂りを成形している。また、袂部は剥離によりできた鋭利な箇所を敲打により潰す加工を施している。半欠品であるが全体的な特徴から石錘と判断した。

打製石斧（第34図130）

130 は打製石斧の基部である。先端と刃部を欠損している。断面は低い台形状で、縁側は剥離により加工されている。裏面は平坦で、着柄部分と考える。また、全面が摩滅しており、顕微鏡観察を行うと、摩滅が明瞭に見られる。基部の上面にも摩滅が見られる。



第 32 図 溝状遺構 1 号出土石器

(3) 溝状遺構 3 号 (SD 3) (第35図)

L-11 区で検出した。長さ約 9.5 m・幅約 1.3 m・検出面からの深さ約 0.20 m を測る。検出面はⅢ～Ⅵ層である。断面は浅い弧状を呈し、埋土は 3 層に分かれる。①層に大正 3 年の桜島火山灰 (P 1) を含んでいるため、それ以前の遺構と考えられる。形状は、東側が二股に分かれ、西側に向かって消失していく。

出土遺物 (第35図131～134)

出土遺物は少なく接合等もしなかったため、陶磁器 3 点と石器 1 点のみを図化し掲載した。

131 は染付である。碗か坏の底部であり、高台外面、胴部外面、見込みの端となる箇所絵付けがある。

132 は薩摩焼の土瓶・急須の脚である。釉薬が施されているが底面には施されていない。

133 は薩摩焼の壺の耳の付け根部分を転用したものである。縄文時代の円盤状土製品に似る。

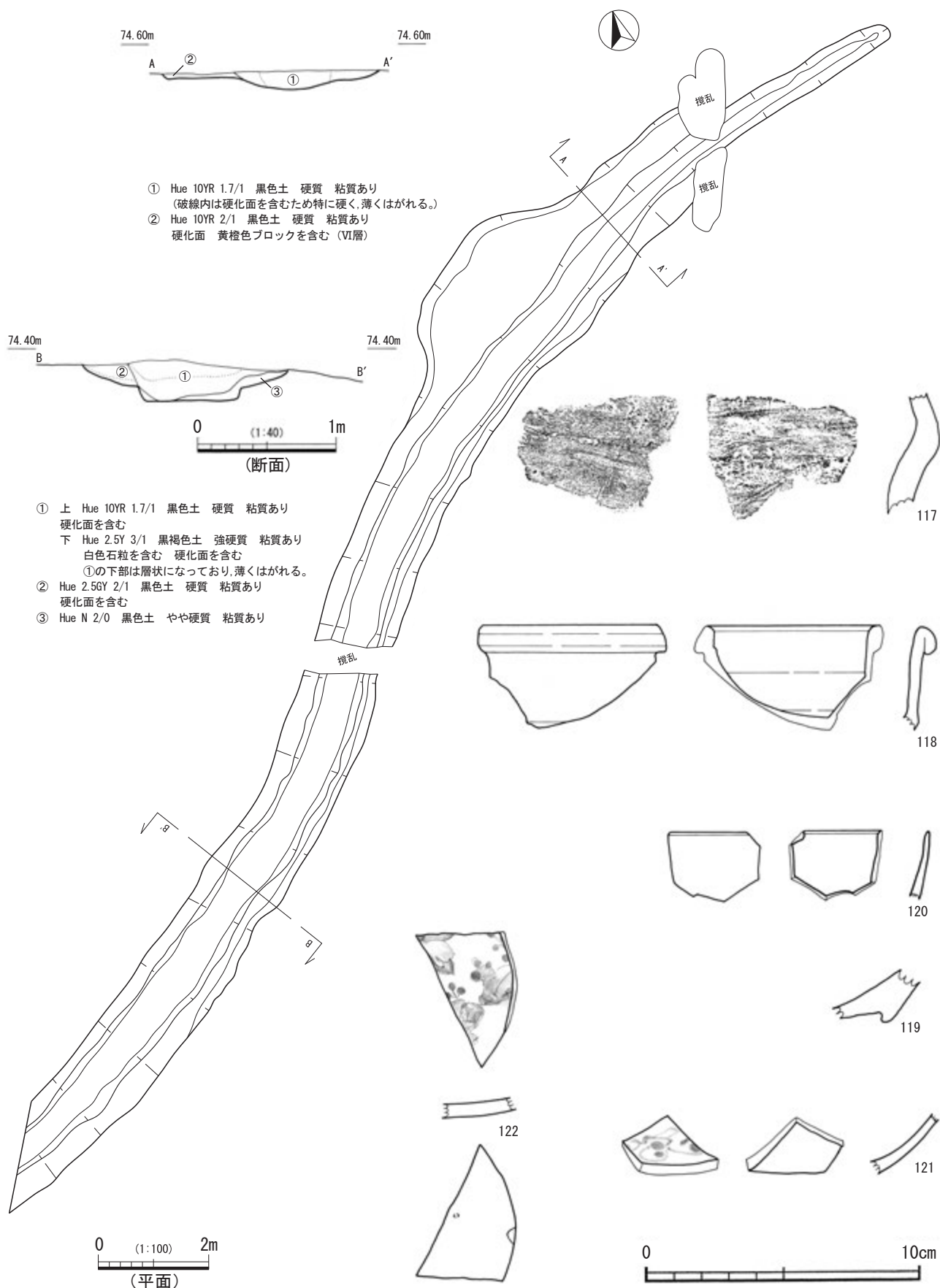
134 は砂岩を素材とする金床石である。裏面は割れており、一部に敲打痕がある。表面には、煤が多く付着しており、強く焼けて赤色に変色している。

表 10 溝状遺構 1 号土器観察表

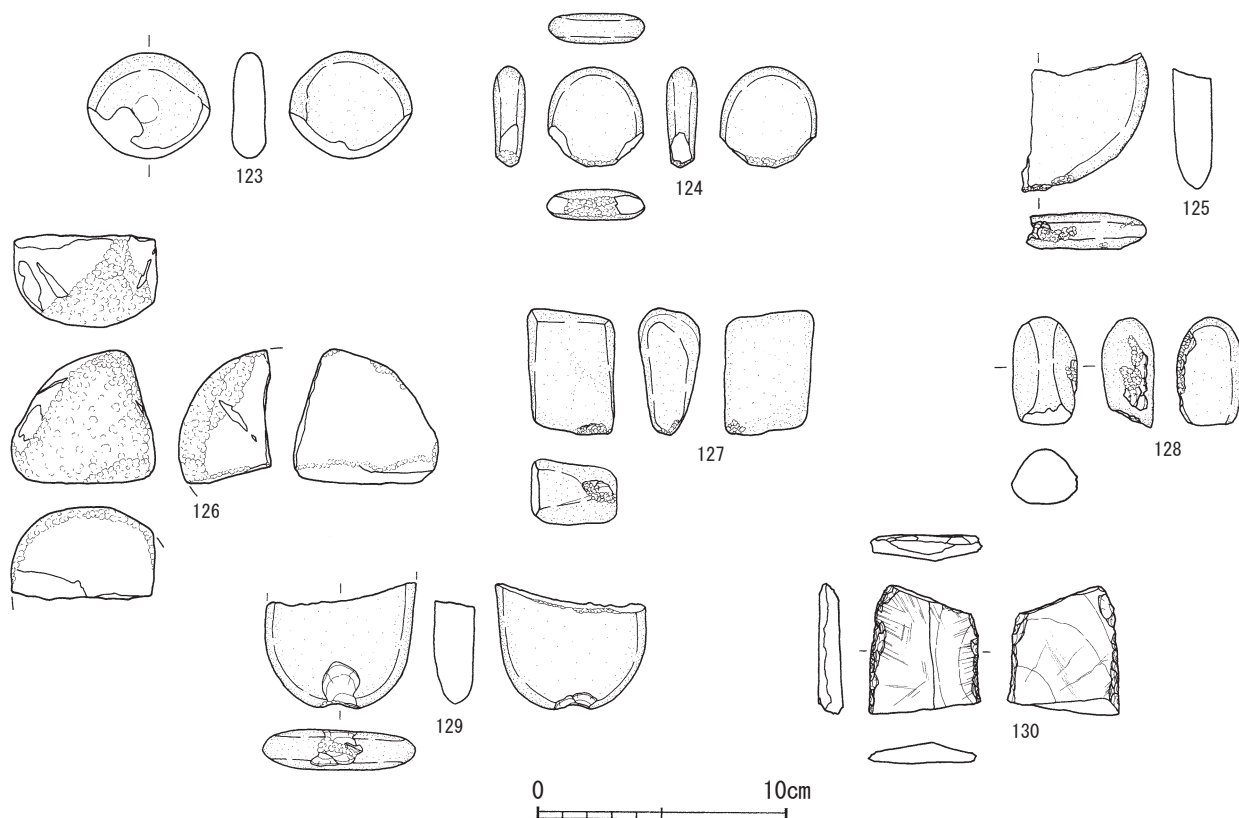
挿図 No.	レイアウト 番号	器種	類別	型式	出土区	層位	文様・器面調整等		色調		胎土						焼成	取上番号
							内面	外面	内面	外面	状態	石英	長石	燐石	輝石	他		
29	87	深鉢	Ⅳ	納管・辛川	K9	SD1	貝殻条痕	貝殻条痕	10YR5/1褐灰色	10YR5/2灰黄褐色		○	○	○	○		良好	593,744,776
29	88	深鉢	Ⅳ	納管・辛川	K9	SD1	ナデ	貝殻条痕	10YR4/4にぶい赤褐色	10YR3/1黒褐色	石粒(少)	○	○	○	○		良好	588
29	89	深鉢	Ⅳ	納管・辛川	K9	SD1	ナデ	貝殻条痕	7.5YR5/3にぶい褐色	5YR4/3にぶい赤褐色	石粒	△	△	△	△		良好	485
29	90	深鉢	Ⅴ	西平	K8	SD1	ナデ	沈線, 縄文, ナデ	10YR6/4 にぶい黄褐色	5YR/6明赤褐色	ほぼ0.5mm以下	○	○	○	○		良好	630,631
29	91	底部	Ⅴ	西平	K9	SD1	指頭痕	ナデ	2.5YR4/8赤褐色	2.5YR4/8赤褐色		○	○	○	○		良好	446
29	92	深鉢	Ⅵ	市来	J9	SD1	ナデ	ナデ	5YR5/6明赤褐色	5YR5/6明赤褐色	～1mm赤色石粒	○	○	○	○		良好	719
30	93	深鉢	Ⅶ	丸尾	J8	SD1	ナデ	ナデ	5YR4/6赤褐色	7.5YR3/1黒褐色	～2mm石粒	○	○	○	○		良好	723
30	94	深鉢	Ⅶ	丸尾	K9	SD1	ナデ	貝殻条痕	5YR5/6明赤褐色	7.5YR4/3褐色		○	○				良好	422,608
30	95	深鉢	Ⅶ	丸尾	K8	SD1	ナデ	貝殻条痕	5YR5/6明赤褐色	7.5YR4/3褐色	1mm以下	○	○				良好	399,629,674
30	96	深鉢	Ⅶ	丸尾	K9	SD1	貝殻条痕	貝殻条痕	10YR3/1黒褐色	10YR4/1褐灰色		○	○	△	△		良好	594,734
30	97	深鉢	Ⅶ	丸尾	K8	SD1	貝殻刺突・条痕	貝殻条痕	10YR3/1黒褐色	2.5YR4/4にぶい赤褐色	石粒	○	○	△	△		良好	626,692,623, 621,414
30	98	深鉢	Ⅶ	丸尾	K8	SD1	貝殻条痕	貝殻条痕	5YR6/6橙色	7.5YR5/4にぶい褐色	鉱物石粒が多い	○	○				良好	632,408
30	99	深鉢	Ⅶ	丸尾	K8	SD1	貝殻条痕	貝殻条痕	5YR5/4にぶい赤褐色	5YR4/3にぶい赤褐色		○	○				良好	694,789
30	100	深鉢	Ⅶ	丸尾	K9	SD1	貝殻条痕	貝殻条痕	7.5YR6/6橙色	7.5YR6/6橙色	～3mm石粒	△	△	△			良好	468
30	101	深鉢	Ⅶ	丸尾	K9	SD1	貝殻条痕	貝殻条痕	5YR4/6赤褐色	5YR4/3にぶい赤褐色	～0.5mm	○	○	△	△		良好	438
30	102	深鉢	Ⅶ	丸尾	K9	SD1	貝殻条痕	貝殻条痕	5YR5/6明赤褐色	5YR4/4にぶい赤褐色	～2mm白色花崗岩	○	○	○	○	金雲母	良好	443
31	103	深鉢	Ⅶ	丸尾	K9	SD1	貝殻条痕	貝殻条痕→ナデ	5YR5/6明赤褐色	5YR5/6明赤褐色	1～3mm その他の石粒	○	○	○	○		良好	401,405,481,11,635, 670,742,740,751,752, 753,755,756,786
31	104	深鉢	Ⅶ	丸尾	K9	SD1	貝殻条痕	貝殻条痕	5YR5/4にぶい赤褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	石粒多量, 大きい	○	○	○	○	金雲母	良好	780,769,764,757
31	105	深鉢	Ⅶ	丸尾	K9	SD1	貝殻条痕	貝殻条痕	5YR4/6赤褐色	5YR5/6明赤褐色	～2mm石粒	○	○	○	○		良好	475,480,590, 592,758
31	106	底部			K9	SD1	ナデ	貝殻条痕, ナデ	2.5YR4/8赤褐色	2.5YR4/8赤褐色		○	○	△	△		良好	597
31	107	底部			K9	SD1	ナデ	荒いナデ	7.5YR5/8明褐色	7.5YR5/8明褐色		○	◎	○	○		良好	774
31	108	底部			K9	SD1	ケズリーナデ	ナデ	5YR5/6赤褐色	5YR5/4にぶい赤褐色	石粒	○	○	○	○		良好	690
31	109	底部			K9	SD1	ナデ	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	7.5YR6/6橙色		○	○	○	○		良好	591

表 11 溝状遺構 1 号石器観察表

挿図 番号	レイアウト 番号	器種	出土区	層位	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
32	110	叩石	K9	SD1	砂岩	9.20	3.70	2.50	110	596	
32	111	叩石	K8	SD1	砂岩 (珪質)	11.75	8.17	3.59	543	461	
32	112	叩石	K9	SD1	砂岩	1.10	7.22	4.61	440	451	
32	113	叩石	K9	SD1	砂岩	9.80	8.70	2.80	383	486 488 595	
32	114	叩石	K9	SD1	砂岩	3.90	3.90	3.10	59	740	
32	115	叩石	K9	SD1	砂岩	10.98	12.95	5.40	990	457	
32	116	石錘	K8	SD1	砂岩	—	7.50	2.35	138	699	



第 33 図 溝状遺構 2 号及び溝状遺構 2 号出土遺物



第 34 図 溝状遺構 2 号出土石器

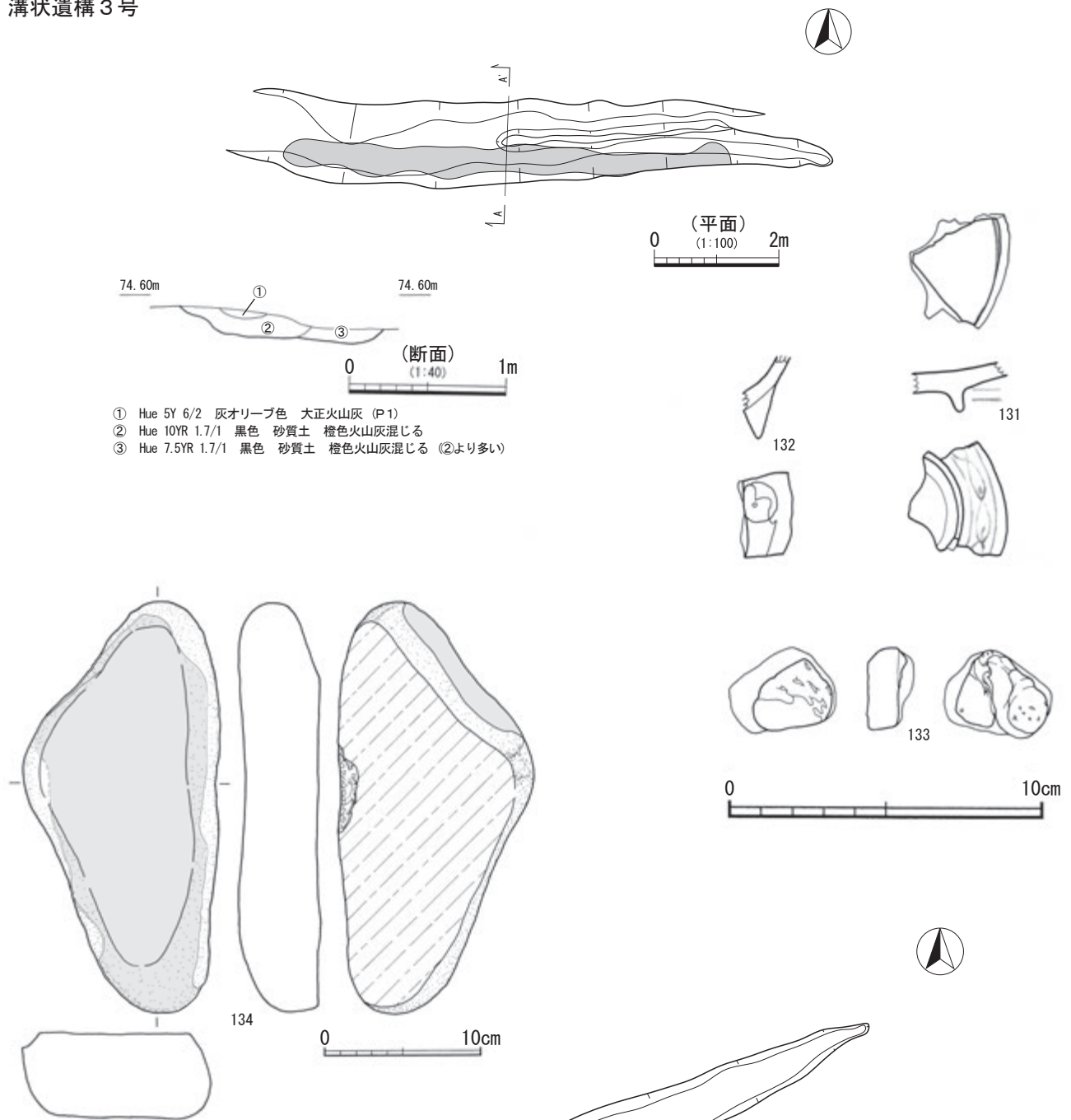
表 12 溝状遺構 2 号土器・陶磁器観察表

挿図 No.	レイアウト 番号	器種	型式	出土区	層位	文様・器面調整等		色調		胎土						焼成	取上番号
						内面	外面	内面	外面	状態	石英	長石	燧石	輝石	他		
33	117	深鉢	中岳	K10	SD2	ナデ	ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐色	5YR5/6 明黄褐色		○	○	○		石粒	良好	710
33	118	陶器壺	薩摩焼	K9	SD2		施釉と釉刺で線を表現	2. 5YR5/6 明赤褐色	7. 5YR3/2 黒褐色							良好	509
33	119	底部	唐津焼?	K10	SD2				灰オリーブ～暗オリーブの釉 明黄褐色の釉で横縞							良好	647
33	120	碗	白磁	L10	SD2			2. 5GY8/1 明オリーブ灰色	2. 5GY7/ 1 明オリーブ灰色	胎土白色						堅緻	541
33	121	碗	染付	K10	SD2	呉須		7. 5GY8/1 明緑灰色	7. 5GY8/1 明緑灰色	胎土白色						堅緻	516
33	122	皿底部	染付	K10	SD2	呉須		2. 5GY8/1 灰白色	2. 5GY8/1 灰白色	胎土白色						堅緻	799

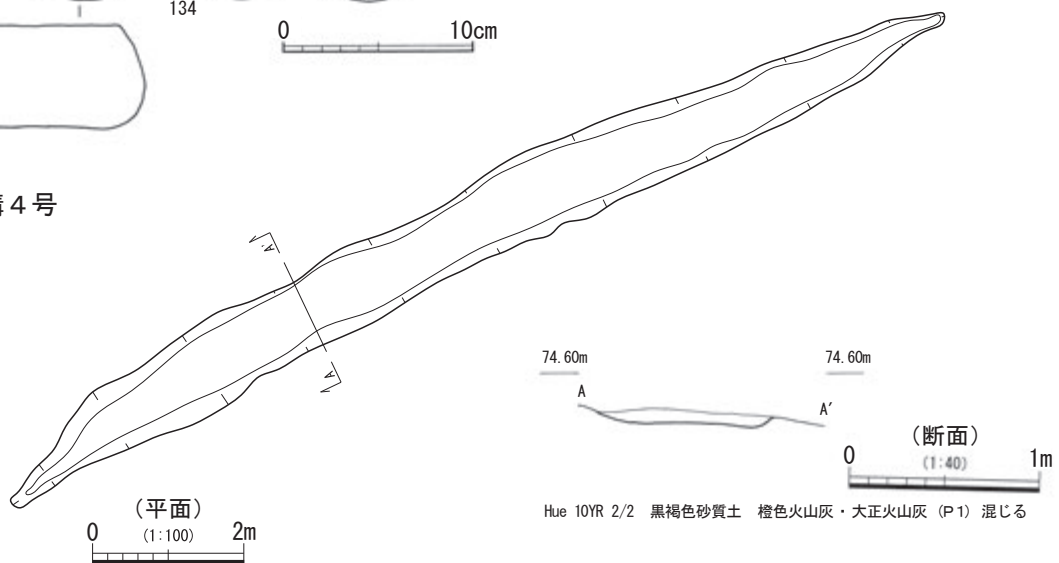
表 13 溝状遺構 2 号石器観察表

挿図 番号	レイアウト 番号	器種	出土区	層位	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
34	123	磨石	K9	SD2	砂岩	4. 20	4. 80	1. 30	39	730	
34	124	叩石	L10	SD2	砂岩	3. 90	3. 80	1. 23	25	724	
34	125	叩石	L10	SD2	砂岩	5. 50	5. 05	1. 60	48	552	
34	126	叩石	K10	SD2	砂岩	5. 00	5. 69	3. 68	130	529	
34	127	叩石	L10	SD2	砂岩	4. 95	3. 50	2. 50	65	536	
34	128	ハンマー	L10	SD2	砂岩	4. 30	2. 60	2. 10	30	548	
34	129	石錘	K10	SD2	砂岩	—	5. 96	1. 62	68	801	
34	130	打製石斧	L10	SD2	ホルンフェルス	—	4. 45	1. 00	29	656	

溝状遺構 3 号



溝状遺構 4 号



第 35 図 溝状遺構 3 号及び溝状遺構 3 号出土遺物・溝状遺構 4 号

表 14 溝状遺構 3 号土器・陶磁器観察表

挿図 №	レイアウト 番号	器種	類別	出土区	層位	文様・器面調整等		色調		胎土					焼成	取上番号
						内面	外面	内面	外面	状態	石英	長石	燐石	輝石		
35	131	碗	染付	L11	SD3	呉須									堅緻	562
35	132	急須	薩摩焼	L11	SD3	釉	釉	2. 5YR3/3 暗赤褐色	2. 5YR3/3 暗赤褐色						堅緻	680
35	133	メンコ	薩摩焼	L11	SD3	摺	摺	5Y3/2 オリーブ黒色	5Y3/2 オリーブ黒色	2. 5YR5/4 にぶい赤褐色胎土の色	○	○	○	○	堅緻	572

表 15 溝状遺構 3 号石器観察表

挿図 番号	レイアウト 番号	器種	出土区	層位	石材	計測値				取上番号	備考
						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
35	134	金床石	L11	SD3	砂岩	26. 4	12. 6	5. 4	2600	563	

(4) 溝状遺構 4 号 (SD4) (第35図)

L・M-12 区で検出した。長さ約 14 m・幅約 0.9 m・深さ約 0.07 m を測り、断面形は浅い半月状を呈する。埋土は単一層で、溝状遺構 3 号 (SD3) と同様に P1 と想定される火山灰が含まれていることに加え、細かいシラスも含まれていることから、土地改良が行われた後である可能性も考えられる。遺構内遺物は出土していない。

2 出土遺物 (第 36 図)

小片がⅡ層からわずかに出土したのみである。

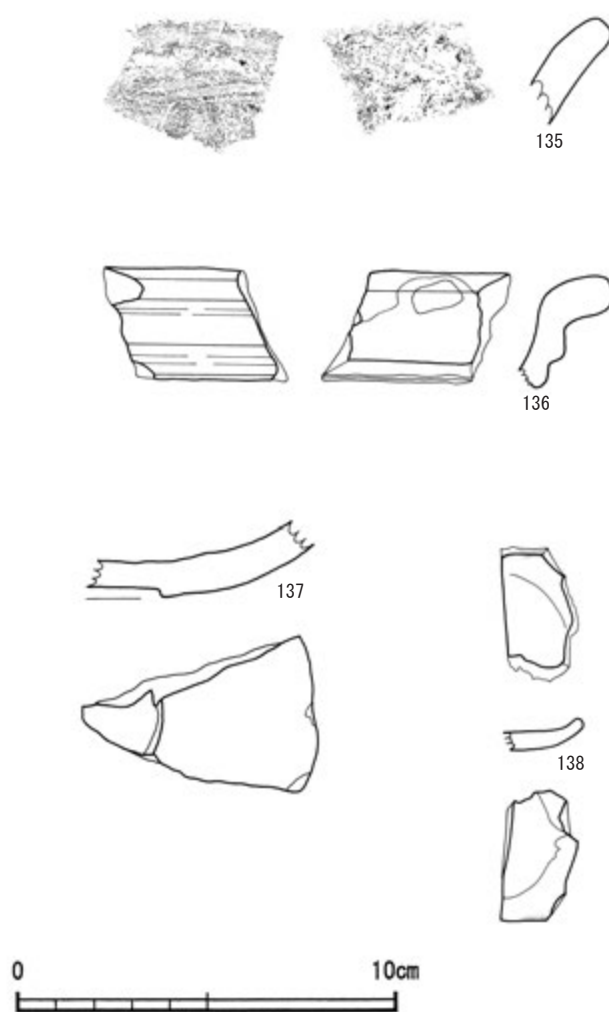
4 点を図化した。このほか、小片のため図化していないが、弥生時代・古墳時代の土器も見られた。

135 は土師器の甕形土器である。口縁端部を丸く収め、内外面ともにナデで調整されている。

136 は薩摩焼の甕である。口縁部内面に重ね焼きの貝目の痕跡がよく残っている。

137 は薩摩焼の土瓶の底部である。

138 は土師器もしくはカワラケの灯明皿である。口縁部を欠損しており、割口に煤の付着がある。割れた皿の転用であるのか、芯を置く箇所を成形したものであるのかは不明である。



第 36 図 その他の出土遺物

表 16 その他の時代の土器・陶器観察表

挿図 №	レイアウト 番号	器種	型式	出土区	層位	文様・器面調整等		色調		胎土					焼成	取上番号
						内面	外面	内面	外面	状態	石英	長石	燐石	輝石		
36	135	甕	土師器	M12	Ⅱ	剥落	ナデ	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	～1.5mm 赤色石粒・石粒	○	○	○	○	良好	99
36	136	甕	薩摩焼	L11	Ⅱ	貝目 ロクロ	ロクロ	7.5YR 3/2 黒褐色	7.5YR 3/3 オリーブ黒色		○	○	○		堅緻	384
36	137	土瓶	薩摩焼	L10	Ⅱ	ロクロ	ロクロ ヘラ調整	7.5YR 3/4 オリーブ黒色			○	○	○		堅緻	
36	138	灯明皿	土師器・カワラケ	K9	Ⅱ	ロクロ回転ナデ	ロクロ ヘラナデ	10YR8/4 浅黄橙色	10YR8/4 浅黄橙色	スス付着	○	○			良好	335

第Ⅴ章 自然科学分析

見帰遺跡出土の赤色粒子について

鹿児島県立埋蔵文化財センター 中村幸一郎

1 試料

土器表面に塗布または付着している赤色粒子

2 観察・分析方法

(1) 形状観察

以下の2つの機器を使用して、形状を観察し撮影を行った。

ア 双眼実体顕微鏡（ニコン製 SMZ1000）による 8 ～ 60 倍観察

イ 金属顕微鏡（ニコン製 ECLIPSE L150）による 100 ～ 200 倍観察

(2) 成分分析

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（堀場製作所製

XGT-1000，X線管球ターゲット：ロジウム，X線照射径 100 μ m）を使用し，次の条件により分析を行った。

X線管電圧：15/50kV 電流：自動設定

測定時間：200 秒 X線フィルタ：なし

試料セル：なし パルス処理時間：P3

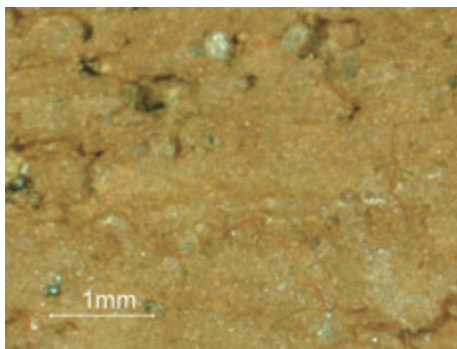
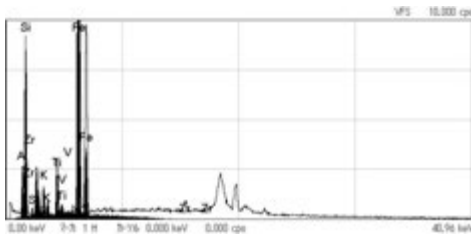
定量補正法：スタンダードレス

赤色顔料の付着している部分と付着していない部分の分析を行い，比較した。

3 結果

試料の蛍光X線分析スペクトルチャート（成分分析）と FPM 定量結果，双眼実体顕微鏡および金属顕微鏡による形状観察結果の1例を下に示す。

赤色粒子が付着している部分
スペクトルチャート



形状観察結果（双眼実体顕微鏡）

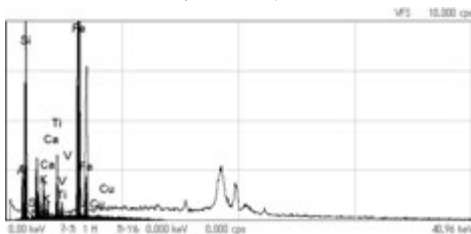
FPM定量結果

元素	ライン	強度(cps/mA)	質量濃度(%)
アルミニウム	K	23.10	20.26
ケイ素	K	90.58	48.55
硫黄	K	3.36	0.59
カリウム	K	16.90	3.32
チタン	K	58.71	2.28
バナジウム	K	0.98	0.03
鉄	K	1319.19	24.82
ジルコニウム	K	14.83	0.15

FPM定量結果

元素	ライン	強度(cps/mA)	質量濃度(%)
アルミニウム	K	18.60	19.58
ケイ素	K	80.40	53.51
硫黄	K	2.20	0.52
カリウム	K	15.67	4.14
カルシウム	K	4.82	1.06
チタン	K	46.03	2.52
バナジウム	K	0.97	0.04
鉄	K	745.61	18.57
銅	K	2.58	0.06

赤色粒子が付着していない部分
スペクトルチャート



4 考察

蛍光X線分析の結果から，赤色粒子付着の有無で比較すると，付着有の部分の方がわずかではあるが鉄の濃度が高い。このため，赤色粒子は鉄を主成分とする赤色顔

料（ベンガラ）の可能性がある。双眼実体顕微鏡および金属顕微鏡による形状観察では，針状結晶は見られなかったもので，パイプ状ベンガラではないと考えられる。

第Ⅵ章 総括

第 1 節 旧石器時代

ナイフ形石器文化期と細石刃文化期の 2 つの文化期の遺物がⅪ b 層とⅨ層から出土した。

1 遺構

(1) ナイフ形石器文化期

遺物の集中部や礫群などの遺構は検出されず、遺物が散在する状況で出土した石器や礫は、厳密には原位置を保っていないものとする。

(2) 細石刃文化期

ナイフ形石器文化期と同様であるが、Ⅸ層で J－8 区の平坦面に礫の集中が見られた。礫群が雨水等により崩壊し、原位置を保っていないものと判断した。

2 遺物

遺物については、2 つの文化層ともに、少量の剥片石器と砂岩を素材とする礫石器が出土した。

磨石・叩石等は加工を施さず、自然礫をそのまま用いている。また、礫石器の全てが砂岩を素材としている。

第 2 節 縄文時代早期

平成 25 年度に県埋文センターが実施した発掘調査では縄文時代早期の土坑が検出されているが、本調査区では、縄文時代早期については、旧石器時代と同様に遺物の集中部や集石などの遺構は検出されなかった。

遺物は、遺物包含層であるⅦ a 層とⅦ b 層から出土した。遺物は散在的に出土しており、遺構の構成礫や遺物が原位置を保っていないものとする。

1 遺構

M－12 区で、集石遺構の構成礫が崩れた状態と考えられる場所を 1 箇所検出したのみである。良好に包含層が残存している範囲は西側半分のみであり、調査範囲全域から礫が出土していることから、当時は数基程度の集石遺構が築かれていた可能性がある。

2 遺物

(1) 土器

石坂式土器・下剥峯式土器・押型文土器が少量ずつ出土した。

(2) 石器

石器についても器種・出土量ともに少なく、複数型式の土器と同一包含層からの出土であるため、時期の特定は困難である。

磨石・叩石等は加工を施さず、自然礫をそのまま用いている。また、礫石器の全てが砂岩を素材としている。

掲載番号 40 は、その他の石器と異なり珪質がやや強く、やや硬質であり、割礫の割口でも敲打している点が他の叩石と異なっている。また、42 は礫器が割れた後、刃部を利用して敲打に用いている。

第 3 節 縄文時代中期

縄文時代中期の調査では、土坑 5 基を検出した。遺物は石鏃 2 点が出土したのみである。

1 遺構

検出した土坑全てⅣ a 層を中心とする埋土にⅣ b 層の池田降下軽石が混じるものである。土坑は、全て遺跡西側にある大きな谷へ向かう傾斜面で検出した。調査区の東側半分は遺構が存在する層を現代の耕作等により欠失していた箇所が多くこれらの箇所にも土坑が存在していた可能性があるため、本来の分布状況は不明である。

また、土坑 1 号を除いて上半部を欠いているため、全体の形状は不明である。土坑 2～5 号については、残存している部分の形状と法量が、欠損する部分のない土坑 1 号と同じであるため、同時期・同用途の可能性が高い土坑と考えた。

土坑 1 号は、Ⅳ a 層からⅣ b 層へ漸移するほぼ当時の地表面と考えられる層位で検出できた。長楕円形の底面から立ち上がり朝顔形の形状を呈し、これまでの調査事例から落とし穴であると考えられる。

土坑は、全て断割を行い杭痕跡等の有無について検証したが、杭痕等は確認できなかった。平成 25 年度に県埋文センターが実施した高規格道路部分の調査でも、縄文時代中期の土坑が検出されている。県埋文センターの調査が完結していないため、形状や遺跡全体での土坑の位置や谷・傾斜等に関する考察については県埋文センターの報告に委ねたい。

2 遺物

石鏃 2 点が出土したのみである。上層からの落ち込みも考えられるが、どの層に属するか判断できなかったため、出土層に従い記載した。

第 4 節 縄文時代後期

1 遺構

縄文時代後期の調査では、集石などの遺構は検出されなかった。散在する状況で出土した礫等については、集石の構成礫等が原位置を保っていないものとする。

2 遺物

遺物は、包含層であるⅡ層・Ⅲ層と溝状遺構 1 号（SD 1）の埋土中から出土した。

土器、石器ともに出土量が少なく、縄文時代後期の遺物の概観について、各節で記すことができなかったため、本節で記すことにする。

(1) 土器

第Ⅳ章第 5 節で、縄文時代後期の土器を第Ⅳ類～第Ⅷ類に分類した。分類・掲載順は、同時期の遺物の出土量



第 37 図 縄文時代後期土器（１）

が多い『干迫遺跡』の報告書を参考に行った。

再度、各類について略記し、口縁部のみではあるが、第 37・39 図に包含層出土土器と溝状遺構 1 号出土土器を合わせて掲載する。

Ⅳ類：納曽式土器，辛川式土器

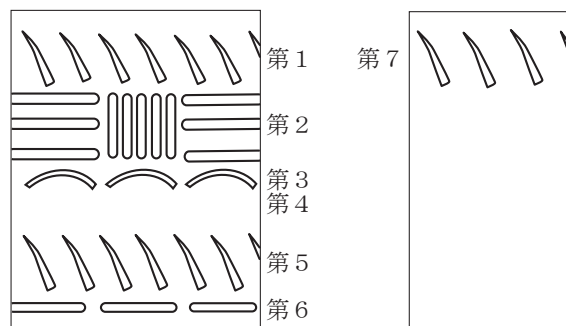
Ⅴ類：西平式土器

Ⅵ類：市来式土器

Ⅶ類：丸尾式土器

Ⅷ類：台付皿形土器

※ 台付皿形土器は丸尾式土器の時期のものである可能性が高いが、時期の特定はできなかった。



第 38 図 第Ⅶ類文様帯模式図

VII類口縁部



第 39 図 縄文時代後期土器 (2)

縄文時代後期の土器を概観すると、見帰遺跡のⅣ類～Ⅷ類土器は、出土量が少ないものの干迫遺跡の4・77・137号土坑出土土器の組合せに類似する。

Ⅳ類は、口縁部形態に他と差異が認められるものを含むが、出土点数が少ないため細分は行わなかった。

Ⅴ類については、頸部の屈曲部内面に明瞭な稜を持つもの(53)と稜が不明瞭で丸みを帯びているもの(90)がみられるが、Ⅳ類と同様に出土点数が少ないため細分は行わなかった。

Ⅵ類は、図化できるものは2点のみの出土である。

Ⅶ類について、本節ではその細分を試みたい。

Ⅶ類は、口縁部と胴部・底部の関係が不明瞭であることから、口縁部についてのみ細分を行った。

Ⅶ類は、口縁部外面の口唇下位から最大で6～7cm程度の範囲に文様帯を有する。貝殻刺突・沈線等による施文を主体とし、無文部を設けることを特徴としている。

また、口縁部から胴部にかけての形態も、直線的・外反・内湾・屈曲するものなど数種類みられる。

これらについて、貝殻刺突・沈線・無文部の位置や方向・口縁部形態等の違いから細分を試みた。

以下に細分の方法について記す。

① 文様

94・95を基準に刺突・沈線の有無、施される位置と方向等から第1文様帯～第7文様帯(第38図)に分け、各文様帯ごとに施文の特徴等から細分した。

第1～第6が外面、第7が内面の文様帯である。また第4文様帯については無文部であるが、便宜上、文様部と同等の扱いとした。

第1文様帯

ア：右下がりの貝殻刺突

イ：横位の貝殻刺突

ウ：棒状工具による短い沈線の連続

第2文様帯

ア：棒状工具による縦位・横位の沈線

イ：無文部

第3文様帯

ア：横位の貝殻刺突

イ：右下がりの貝殻刺突

ウ：棒状工具による短い沈線の連続

エ：羽状の貝殻刺突

第4文様帯

ア：無文 第3文様と第5文様の施文により断面形が山形を呈する

イ：無文 山形を呈しない

第5文様帯

ア：右下がりの貝殻刺突

イ：羽状の貝殻刺突

第6文様帯

ア：左下がりの貝殻刺突 第5文様と組合わさり羽状を呈する。切断した貝殻を使用。

イ：左下がりの貝殻刺突 第5文様と組合わさり羽状を呈する。第5文様と同じ貝殻を使用。

ウ：棒状工具による短い1条の沈線の連続

エ：棒状工具による短い2条の沈線の連続

第7文様帯

右下がりの貝殻刺突

② 口縁部形態

形状と肥厚の有無等で分けた。

〈形状〉

A：直口からやや外反するもの

B：外反するもの

C：内湾するもの

D：屈曲するもの

〈肥厚〉

口縁部上位を肥厚させる仕上げの有無

以上のような「文様」と「口縁部形態」の分類を基に、文様と口縁部形態の各要素の組合せをまとめ分析した結果、Ⅶ類をⅦa～Ⅶfの7つに細分した。以下に各類の特徴について記したい。

Ⅶa類(93～95)

口縁部形状 直口からやや外反

第1文様 口唇下に斜位の貝殻刺突を巡らす

第2文様 下位に横位の沈線と縦位の沈線

第3文様 横位の貝殻刺突

第4文様 無文部、山形を呈さない

第5文様 斜位の貝殻刺突

第6文様 なし

第7文様 なし

その他 口唇部はやや平坦から丸く仕上げられ、全体に器面調整の貝殻条痕をよく残す。

Ⅶb類(55, 56, 96)

口縁部形状 直口からやや外反

第1文様 なし } Ⅶa類よりも口唇部から文様までの間隔を広く開ける。

第2文様 なし

第3文様 斜位の貝殻刺突を巡らす。

第4文様 無文部、山形を呈さない。

第5文様 斜位の貝殻刺突

第6文様 56：切断した貝殻での羽状となる刺突
96：棒状工具による短い2条の沈線の連続

第7文様 56のみ右下がりの貝殻刺突

その他 全体に器面調整の貝殻条痕をよく残す。

Ⅶc類(97)

口縁部形状 外反

- 第1文様 沈線に見えるように貝殻条痕を残して器面調整を行っている
- 第2文様 無文部
- 第3文様 羽状の貝殻刺突
- 第4文様 なし
- 第5文様 なし
- 第6文様 2条の沈線に見えるように貝殻条痕を残して器面調整を行っている
- 第7文様 右下がりの貝殻刺突
- その他 口唇部はやや平坦から丸く仕上げられ、全体に器面調整の貝殻条痕をよく残す。

VII d 類 (99・98・57)

口縁部形状 直口

- 第1文様 98・99：なし，57：右下がりの貝殻刺突
- 第2文様 98・99：なし，57：無文部
- 第3文様 斜位の貝殻刺突を巡らす。
- 第4文様 無文部，山形を呈さない。
- 第5文様 斜位の貝殻刺突
- 第6文様 なし
- 第7文様 なし
- その他 口唇部はやや平坦から丸く仕上げられ，内外面ともにナデ調整で仕上げる。

VII e 類 (58, 59, 100, 60, 61)

口縁部形状 直口

- 第1文様 58・59・100：棒状工具による短い1条の沈線の連続
60・61：横位の貝殻刺突
- 第2文様 無文部
- 第3文様 斜位の貝殻刺突
- 第4文様 58：無文部，山形を呈さない，59：なし
- 第5文様 不明
- 第6文様 58：棒状工具による短い1条の沈線の連続
- 第7文様 なし
- その他 口唇部はやや平坦から丸く仕上げられ，全体を貝殻条痕で仕上げる。

VII f 類 (101, 63, 102, 62)

口縁部形状 101・63：屈曲，102・62内湾

- 第1文様 101：斜位の貝殻刺突
62：羽状の貝殻刺突
- 第2文様 101：無文部
- 第3文様 101：斜位の貝殻刺突
- 第4文様 101, 63：屈曲にある。
102：無文部，山形を呈さない。
- 第5文様 63・102：斜位の貝殻刺突
- 第6文様 63：棒状工具による短い1条の沈線の連続
102：羽状の貝殻刺突
- 第7文様 なし
- その他 口唇部はやや平坦から丸く仕上げられ，全

体を貝殻条痕で仕上げる。

以上，VII a 類からVII f 類の分類方法・各類の特徴について記したが，64～67については分類できなかった。64はVII f 類の文様の異なるもの，65・66はVII b 類の文様の異なるものである可能性が高いと考える。67は，VII a～VII c 類の無文のものである可能性が高い。

このように，縄文時代後期土器の一部について細分することはできたが，II 層・III 層・溝状遺構1号からの出土遺物が少なく，層位により分別できないため，時間的な考察は行えない。

(2) 石器

調査区全体から少量の出土があり，選択して図化した。

器種は，磨石・叩石・石錘である。その他の器種は出土していない。材質は，全て砂岩である。

掲載番号80～82の石材は，他よりも珪質が強く，硬質である。81・82は，礫の稜を持つ箇所によく敲打している。また，86は珪質は強くないが，石錘が割れた後に割口で敲打をしている。これらは縄文時代早期の40・42と共通する特徴である。

溝状遺構1号内出土石器については，周辺の出土遺物が縄文時代後期のもののみであることから，同時期のものである可能性が高い。

111は，80～82と同様に珪質が強く硬質な素材で，礫の稜となる箇所強く敲打し，形状は異なるが80に似る。

110・112は，礫の割口で敲打しており，82に似る。

115は，礫器の刃部で強く敲打しており，縄文時代早期の42と同様である。

その他の磨石・叩石については，旧石器時代・縄文時代早期のものと石材・形状・使用部位について差が認められない。

また，石錘が数点出土しているが，見帰遺跡の西側を流れる安楽川上流に所在する中原遺跡（『中原遺跡』志布志町埋蔵文化財報告書(9)）で多くの石錘が出土していることから，関連が注目される。

その他，溝状遺構2号内出土の石器については，周辺から縄文時代晩期と近世の遺物が出土しているため，時期の特定はできなかった。しかし，123・124は扁平な砂岩の小円礫を素材とする磨石・叩石で，明瞭な使用痕が見られない。同様の石材が縄文時代後期の遺物とともに出土し，周辺遺跡からも同様のものが出土しているため，特定の使用法にこの形状が必要であったことがうかがえること，127は，83の小型のものである可能性があることを記しておきたい。

第5節 本遺跡出土石器の特徴について

前節まで，旧石器時代から縄文時代後期までの礫石器について記してきた。本節では，これらの石材・形状・

使用部位に着眼してみたい。

礫石器の石材について、見帰遺跡では旧石器時代・縄文時代早期・縄文時代後期の各時期において砂岩のみが選択されている。ここでは、見帰遺跡周辺の遺跡及びその他の東九州自動車道建設に伴う遺跡について、見帰遺跡の所在する志布志市から路線に沿って追い、市町村ごとに大崎町、鹿屋市、曾於市の順で分けてみていきたい。

志布志市の次五遺跡では、石器の石材としては砂岩が多数を占め、一部安山岩やホルンフェルス等が選択されている。大崎町の平良上C遺跡も同様で、この2遺跡での砂岩以外の石材の割合は、他の見帰遺跡周辺の遺跡より多いようである。

大崎町・鹿屋市では、報告書未刊行の遺跡を含め砂岩を中心に安山岩・ホルンフェルス等が素材として選択されていることに変わりはないが、砂岩以外の石材の割合が高くなり、硬質の凝灰岩を素材とする礫石器・自然礫が目立つようになることが特筆できる。

曾於市でも同様に、砂岩を中心としながら砂岩以外の石材の割合が高くなり、硬質の凝灰岩を素材とする礫石器・自然礫が目立つようになることが特筆できる。

比較した遺跡全てにおいて、円礫や亜円礫を素材とすること、使用前に加工は施さず、使用目的に応じた自然礫を使用していること、敲打の箇所が側縁や上面・下面を中心であることは共通している。また、旧石器時代において明瞭な石斧が出土していないことも共通する。

このことは、縄文時代早期・縄文時代後期についても同じであり、時代が新しくなるに従い、各地域での安山岩・ホルンフェルス・凝灰岩の占める割合が高くなる傾向にある。

石材について、見帰遺跡から東九州自動車道の路線に沿い曾於市までを概観すると、見帰遺跡周辺では砂岩が大半を占めるものが、見帰遺跡から離れるにつれ徐々に安山岩・ホルンフェルス等が増え、更に硬質の凝灰岩を用いるようになる傾向がうかがえる。硬質の凝灰岩は、様々な礫石器に利用されており、意図的に選択して用いていると考える。また、国道220号建設に伴い実施された白水B遺跡周辺の発掘調査でも、硬質の凝灰岩の使用が確認できる。これらは、遺跡付近で採取できる石材を使用していると考えられる。

このことから、見帰遺跡の縄文時代早期・後期で出土している珪質の強い砂岩は、凝灰岩と同様に硬質である礫を選択して使用していると考ええる。

また、見帰遺跡以外の遺跡では花崗岩の使用もみられるが、花崗岩については付近では産出しないため、他地域からの搬入品であると考ええる。

今後、東九州自動車道建設に伴う発掘調査の成果として、多くの遺跡の報告がなされる中で、志布志湾沿岸から大隅半島中域における旧石器時代～縄文時代の石器の

形状・組成と石材選択について考察が進むと考えられる。見帰遺跡の出土石器は、その解明の一助となる貴重な資料であると考ええる。

このような分析は、見帰遺跡では出土数が少ないため容易に行うことができたが、出土数量が多い遺跡においても必要であると考ええる。

遺跡内で出土する遺構の構成礫以外の礫についても、何らかの使用目的があつて集落外から持ち込まれたものであり、製作と一次使用・破損箇所の補修後の復次使用・転用使用・破損後の転用使用・破棄・未使用などの結果であることを考え、調査時から石材等に着目して調査にあたる必要があると考ええる。

第6節 科学分析

1 簡易型デジタルマイクロスコープを使用した分析

(1) 赤色顔料

72の台付皿形土器には、赤色顔料の塗布らしい痕跡が見られたことから、科学分析を実施し、結果を第V章に記した。鉄を主成分とすることから、ベンガラであると考ええる。

赤色顔料は、土器表面に明瞭には残っておらず、肉眼観察では塗布してあることは確認できるものの、塗布範囲の特定はできなかった。

そのため、簡易型のデジタルマイクロスコープで観察したところ、土器表面ではなく、ヒビや石粒等の隙間に残存していた。また、外面・内面ともに口唇付近には塗布されず、そのほかの右半分と下半分程度に塗布されていることが分かった。塗布範囲と塗布が観察できなかった範囲との境も、かすかに残る赤色顔料の破片試料での観察結果であるため、断定できなかった。

今回、赤色顔料の塗布範囲について、室内での操作が難易な機器を使用せずとも、簡易的な機器による観察でも相応の結果を得られることが分かった。

(2) 石斧摩滅光沢

130の打製石斧について、県埋文センター刊行の「芝原遺跡」報告書で廣氏が行っている打製石斧の使用痕分析を参考に、簡易型デジタルマイクロスコープで観察を行った。その結果、下部の切断面と側縁の剥離の深部以外全てに摩滅光沢を観察した。

当初、上部は整えられておらず、側縁と直角でないため、上部・下部が使用により破断したものと捉えていたが、観察により上部にも破断した後の断面に摩滅光沢が確認できたことから、130は尾部を残す基部と判明した。

摩滅光沢は、植物との摩擦によりできる使用痕であることが様々な使用実験により論考されていることから、130の石斧の着柄方法は、植物質の素材で基部のみでなく尾部をも覆い、緊縛して使用されたことが想起できる。

また、130の石斧の断面形は三角形であることから、

三角形の底辺となる平坦面が着柄部分と考えられるが、ここにも摩滅光沢が観察できることから、柄に緊縛する前に石斧自体を植物質の素材で覆った後に柄に緊縛したことも想起できる。

更に、柄が木質であったために着柄の箇所にも摩滅光沢が生じたとも考えられる。

使用痕の分析は、残存箇所や石器一点一点の使用頻度に左右される。そのため、これまで打製石斧の尾部の摩滅光沢・使用痕について詳細に観察・分析した報告例が少ない。今回、1点のみの観察であるが、石器の形状・柄の着柄部分の形状・着柄方法に時期差・地域差・個人差があり、多様性が想定されることから可能性の指摘に過ぎないが、示唆的な結果を得たと考える。

2 簡易型デジタルマイクロスコープの有用性

上記のことから、遺物観察において、赤色顔料の塗布と石器の使用法・使用痕分析では簡易型のデジタルマイクロスコープが有用であることが分かった。

科学分析室にあるような高倍率で詳細分析が可能な大型顕微鏡は、多量な出土遺物を一点一点観察するには場所が狭く、扱いに習熟が必要である。その反面、簡易型のマイクロスコープは扱いが平易で整理作業室の一角で観察を行うことができる利点がある。ただし、画像の鮮明さと拡大率を求めた時の正確さはなく、大型の顕微鏡で分析を行う前段階の分析とした扱いに止めることが望ましいといえる。

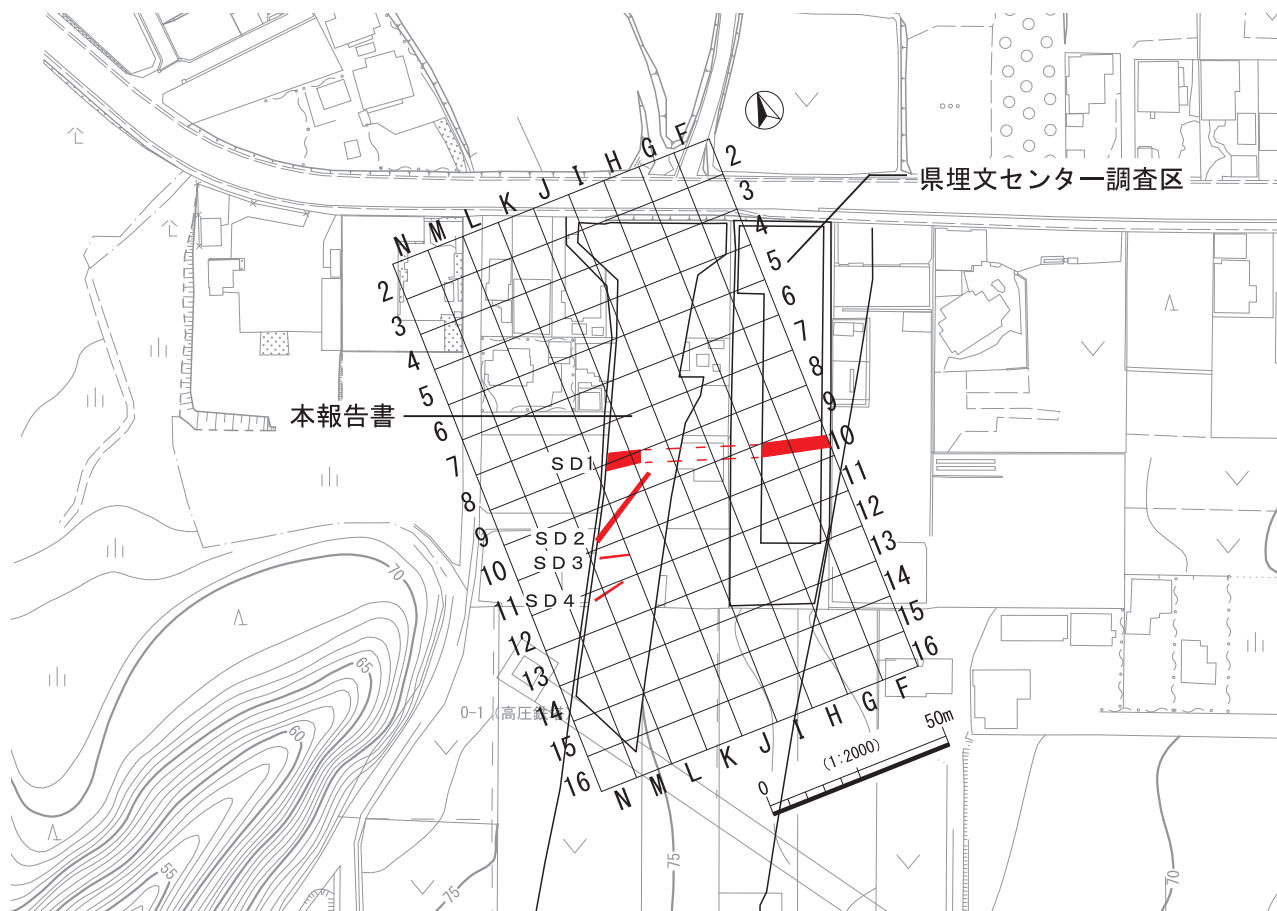
第7節 溝状遺構

溝状遺構を4条検出した（第IV章第6節）。

これらは全て東西の方向に延び、西は調査区外にある谷へ、東は県埋文センター調査区へ向かっている。平成25年度に県埋文センターが調査した際にも溝状遺構を検出しており、本報告のものと位置関係を第40図に示した。特筆すべきは溝状遺構1号で、平成25年の調査時のものと直線的につながる可能性が出てきたことである。両調査区の境となる当調査区東側が大きく層を欠失しているため、溝状遺構1号は遺構の大半が失われている。県埋文センターの調査が完結していないため詳細は不明であるが、規模もほぼ同様なことから、これらは連続する遺構である可能性が高いと考えられる。

溝状遺構1号は欠失部分が大きいため第IV章第6節では次期不詳の遺構として扱ったが、埋土中の納曽式土器・丸尾式土器等の出土から縄文時代後期の遺構である可能性もある。

溝状遺構1号の残存部分からの想定では、幅4m、深さ0.8mを超える溝状遺構が最低でも長さ60～80mにわたり構築されていたことになる。縄文時代後期に比定される同様の遺構の検出例は少なく、見帰遺跡が所在する志布志市周辺では知られていない。見帰遺跡検出の溝状遺構1号の時期比定は慎重に検討する必要がある。



第40図 溝状遺構位置図

圖 版



空中写真 高隈山を望む



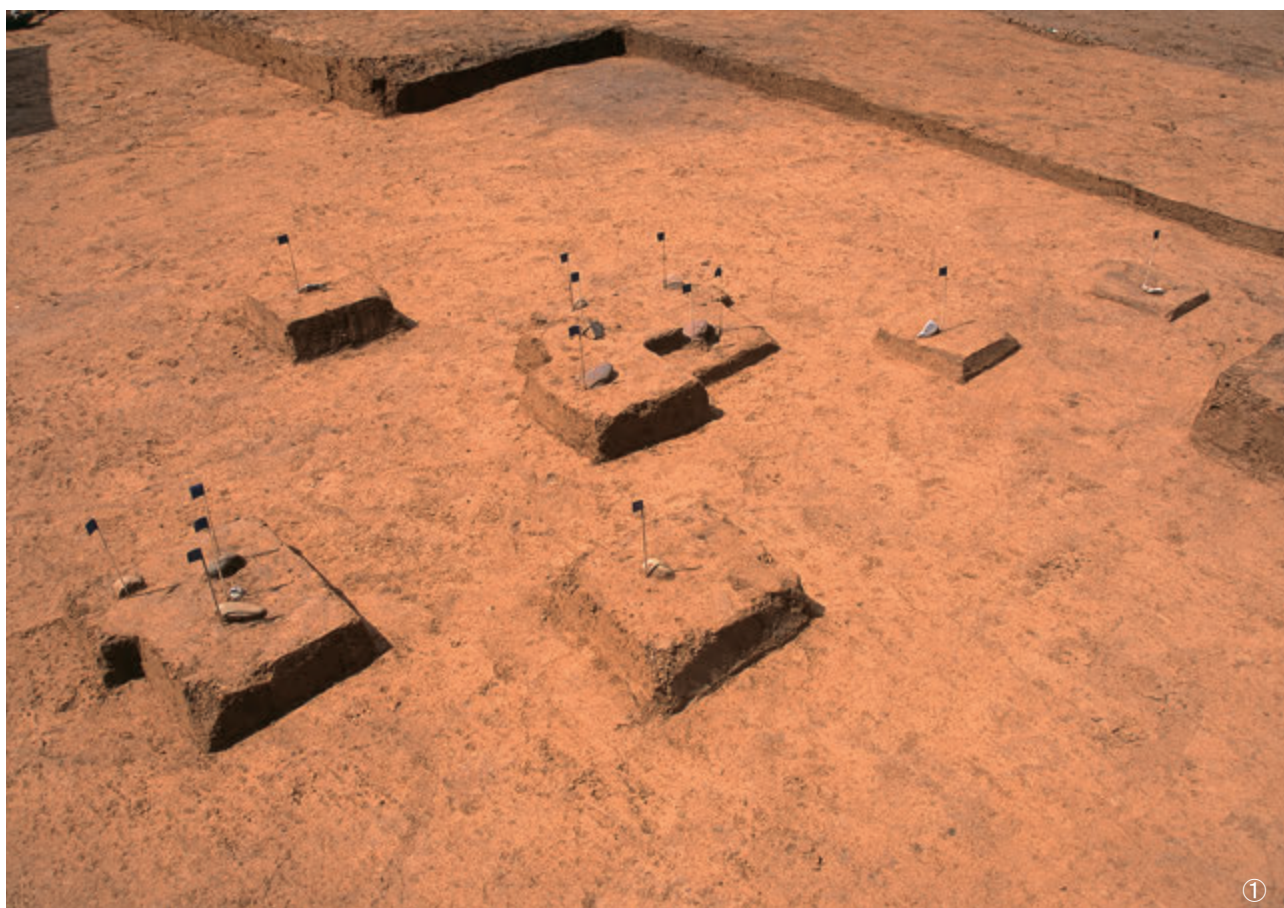
空中写真 枇榔島を望む

図版2
標準土層



①標準土層
②地層確認トレンチ2層序

③小牧遺跡層序



①



②

①旧石器時代礫集中箇所
②旧石器時代遺物出土状況



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧

①土坑 1 号検出状況
③土坑 1 号完掘状況
⑤土坑 2 号検出状況
⑦土坑 2 号土層断面

②土坑 1 号検出状況
④土坑 1 号土層断面
⑥土坑 1 号断割状況
⑧土坑 2 号完掘状況



①土坑3号検出状況
③土坑3号土層断面
⑤土坑3号完掘状況
⑦土坑5号検出状況

②土坑4号検出状況
④土坑4号土層断面
⑥土坑4号完掘状況
⑧土坑5号土層断面

図版6 その他の時代の調査1



①溝状遺構1号検出状況
②溝状遺構1号土層断面

③溝状遺構1号完掘状況（東から西）
④溝状遺構1号完掘状況（西から東）



①



②



③



④

① 溝状遺構 2 号検出状況
② 溝状遺構 2 号完掘状況

③ 溝状遺構 2 号断面
④ 溝状遺構 2 号土層断面



①



③



②



④



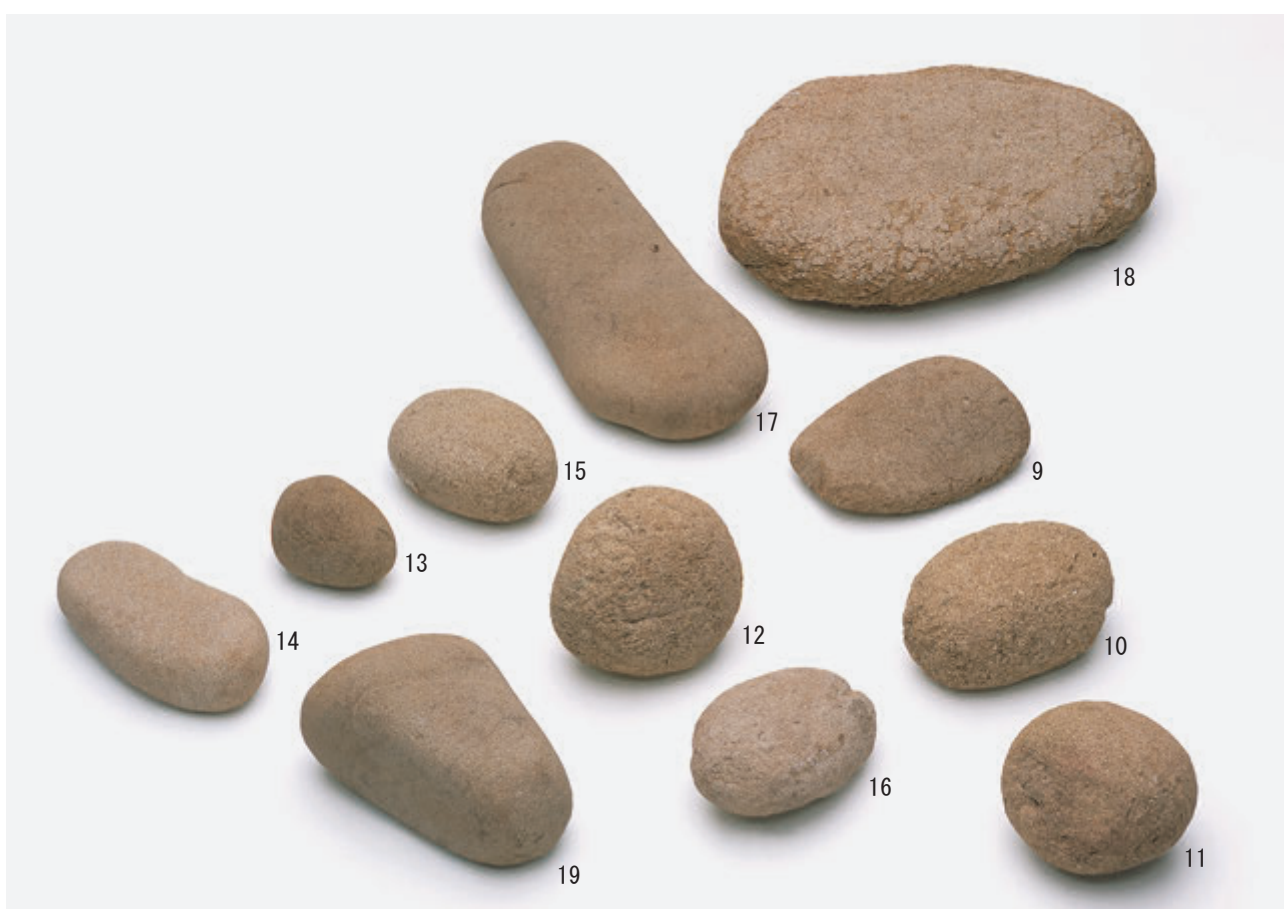
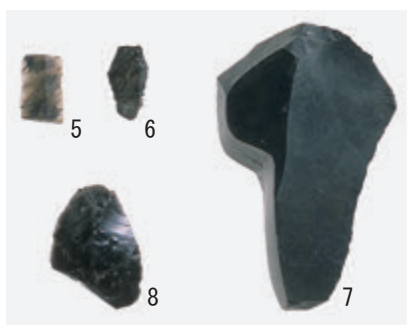
⑤

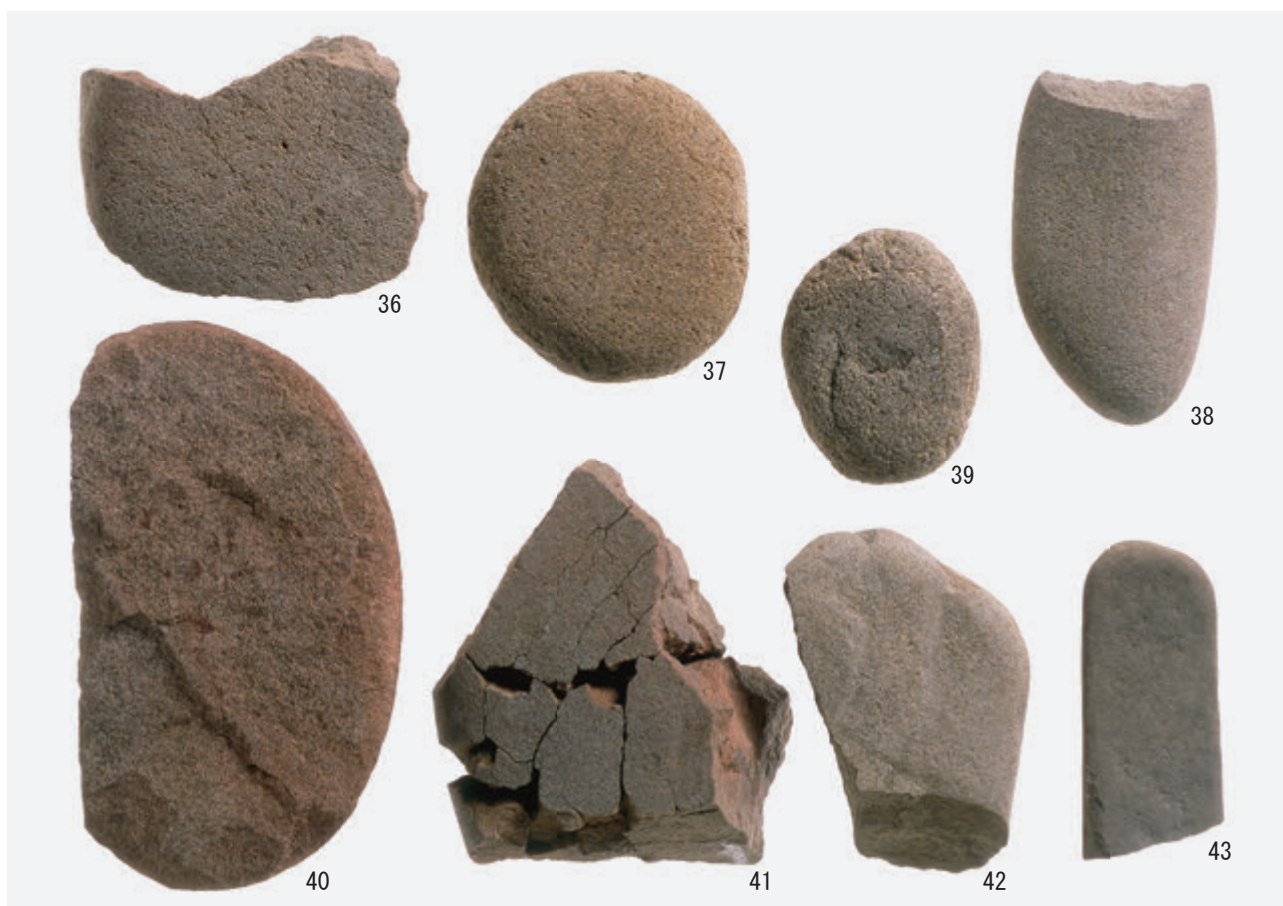
①溝状遺構 3 号検出状況
②溝状遺構 3 号完掘状況

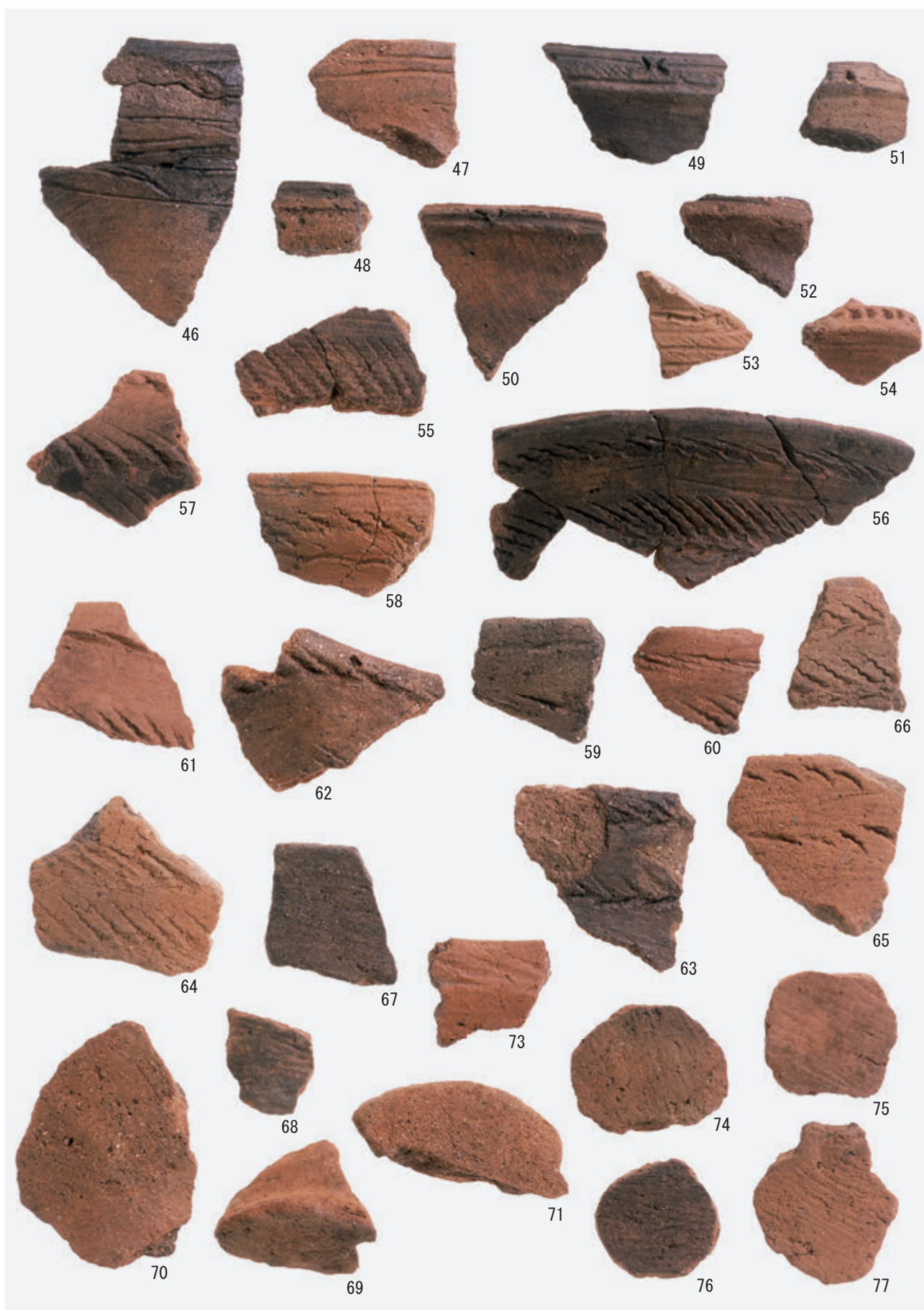
③溝状遺構 4 号検出状況
④溝状遺構 4 号土層断面
⑤溝状遺構 3 号土層断面



図版10 旧石器時代の遺物（細石刃文化期）









図版14 縄文時代後期の石器







公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（23）
東九州自動車道建設（志布志 I C ～鹿屋串良 J C T）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

見 帰 遺 跡

発 行 年 月 2019 年 2 月

編集・発行 鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号
TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576

印 刷 株式会社 国分新生社印刷
〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久 620-1
TEL 0995-45-4880 FAX 0995-45-6979

